

史跡 津山城跡

保存整備事業報告書Ⅲ



史跡津山城跡

保存整備事業報告書Ⅲ

2017

津山市教育委員会



第 12 次調査（平成 20 年度）切手門発掘調査後航空写真（下が北）



第 13 次調査（平成 21 年度）切手門発掘調査後航空写真（下が北）



平成 20 年度天守台西半石列発見時航空写真（右が北）



平成 20 年度天守台西半整備工事終了後航空写真（右が北）



平成 21 年度七番門虎口整備工事終了後航空写真 1 (北から)



平成 21 年度七番門整備工事終了後航空写真 2 (上が北)

序

津山市は岡山県の北部に位置し、人口は約10万3千人、現在の市街地は、慶長8年（1603）に美作18万6,500石を領して入封した森忠政によって整備された城下町を基盤としております。出雲往来沿いにある城下町は古い町並みが良く残っております、特に城東地区は重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今後の保存活用が期待されるところであります。

史跡津山城跡は、近世城郭の優れた遺構として、昭和38年9月28日付けで国の史跡指定を受けました。史跡等の保存整備と活用を求める声が高まる中、平成10年3月に、『史跡津山城跡保存整備計画』を策定し、第Ⅰ期計画として平成10年から29年度の20年間の事業期間に、備中櫓の復元をはじめとして各種調査、石垣の修理、既存樹木の整理、既設占有物の撤去、天守曲輪周辺の整備などを実施してきました。

その後、事業規模や財政状況の変化、及び当初予定していなかった部分の整備が必要になったことなどから、事業計画の見直しをおこない、平成28年度から37年度までの10年間を第Ⅱ期事業と位置づけ、新たに整備事業をスタートさせました。第Ⅱ期事業では、第Ⅰ期で実施できなかった項目のほか、新たに取り組む必要な生じた項目を盛り込んでいます。

本報告書では、第Ⅰ期の平成20年度及び21年度の発掘調査成果と整備事業をまとめたものです。発掘調査では、切手門の構造や排水溝の様子などが新たに判明しました。整備工事では、天守曲輪の西半分の整備工事がほぼ完了したほか、七番門の虎口整備工事を実施しました。工事により、天守曲輪周辺はこれまでよりも近世城郭としての津山城をイメージしやすくなりました。

事業の実施にあたっては、史跡津山城跡整備委員会委員の先生方、及び文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の皆様方には熱心にご指導、ご助言をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成29年3月31日

津山市教育委員会

教育長 原 田 良 一

例　　言

- 1 本書は、津山市が国庫補助事業で実施した、史跡津山城跡保存整備事業報告書である。
- 1 対象とする期間は、平成 20 年度及び平成 21 年度で、各年度の発掘調査、及び整備工事について掲載した。発掘調査については、平成 20 年度が第 12 次、平成 21 年度が第 13 次となる。第 1 次～第 9 次については『保存整備事業報告書 I』で、第 10 次・第 11 次については『保存整備事業報告書 II』で報告している。
- 1 整備事業の実施にあたっては、史跡津山城跡整備委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の指導・助言をいただいた。
- 1 発掘調査は、津山市教育委員会文化財課平岡正宏（現在は異動により津山市都市建設部歴史まちづくり推進室）が担当した。
- 1 本書の執筆は津山市教育委員会文化課豊島雪絵、宮崎絢子が行い、編集は豊島が行った。また、出土遺物の整理作業は野上恭子、岩本えり子、家元弘子、漆間千香子、春名博美、宗本節子、皆木沙織が行い、文献調査・年表の作成は乾貴子の協力を得た。
- 1 出土遺物の鑑定は、岡山市教育委員会 乗岡実氏、及び（一財）米子市文化財団 佐伯純也氏をはじめとする山陰近世考古学研究会のメンバーの方々の協力を得た。
- 1 発掘調査に使用した座標は第 V 直角平面座標系で、方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 1 本書に掲載した絵図は、すべて『津山城資料編』に所収されているものである。
- 1 出土遺物、図面類及び工事関係図面類は津山市教育委員会文化課津山弥生の里文化財センターで収蔵・保管している。
- 1 本書のデータは P D F 形式で保管している。

目 次

第1部 津山城と保存整備事業の概要	1
第1章 津山城の概要	3
第1節 位置と歴史的環境	3
(1) 津山市の位置	3
(2) 歴史的環境	3
第2節 津山城の歴史	7
(1) 築城	7
(2) 森家の改易と、松平の入封	7
(3) 津山城の城郭構成について	8
(4) 廃城後	11
第2章 史跡津山城跡保存整備事業について	15
第1節 整備計画の策定と整備委員会の設置	15
(1)『史跡津山城跡保存整備計画』の策定まで	15
(2) 史跡津山城跡整備委員会の設置	15
第2節 保存整備計画の概要とこれまでの整備事業	17
(1)『史跡津山城跡保存整備計画』(第I期：平成10年度～29年度)	17
(2) これまでの整備事業	18
第2部 発掘調査の概要	21
第1章 発掘調査の記録	23
第1節 はじめに	23
第2節 天守台周辺の調査(第12次(平成20年度))	25
(1) 調査区の概要	25
(2) 出土遺物	28
(3) まとめ	31
第3節 切手門の調査(第12次・13次(平成20・21年度))	34
(1) 調査区の概要	34
(2) 出土遺物	38
(3) まとめ	46
第4節 四足門跡の調査(第13次(平成21年度))	49
(1) 調査区の概要	49
出土遺物観察表	50
写真図版	55
第3部 整備工事の概要	85
第1章 天守曲輪西半整備工事(平成20年度)	87
第1節 事業の概要	87
(1) 事業に至る経過	87
(2) 事業体制	87
(3) 事業の経過	87
(4) 事業費	87
第2節 工事の概要	88
(1) 工事の種別・規模	88

（2）工事の過程	88
（3）工事の概要	89
（4）工事関係者	89
第2章 七番門虎口整備工事（平成21年度）	93
第1節 事業の概要	93
（1）事業に至る経過	93
（2）事業体制	95
（3）事業の経過	96
（4）事業費	96
第2節 工事の概要	97
（1）工事の種別・規模	97
（2）工事の過程	97
（3）工事の概要	97
（4）工事関係者	102
写真図版	103

挿図・表・写真目次

第1図	津山市位置図	3
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	津山城絵図（本丸指図付）	8
第4図	津山城の略年表と津山藩森家、松平家略系図	9
第5図	「津山城天守指図」穴蔵部分	11
第6図	本丸御殿火災前の絵図（御城御座敷向惣絵図 文化5年（1808））	12
第7図	本丸御殿火災後の絵図（津山城之図）	12
第8図	発掘調査区配置図	24
第9図	第12次・13次発掘調査区配置図	25
第10図	天守台周辺調査区1平面・断面図	26
第11図	天守台周辺調査区2平面・断面図	27
第12図	天守台周辺調査区3平面・断面図	28
第13図	天守台周辺調査区出土遺物1	29
第14図	天守台周辺調査区出土遺物2	30
第15図	天守台周辺調査区出土遺物3	32
第16図	天守台周辺調査区出土遺物4	33
第17図	切手門調査区1平面・断面図	35
第18図	切手門調査区2～4平面図	36
第19図	切手門調査区出土遺物1	38
第20図	切手門調査区出土遺物2	40
第21図	切手門調査区出土遺物3	41
第22図	切手門調査区出土遺物4	42
第23図	切手門調査区出土遺物5	43
第24図	切手門調査区出土遺物6	44
第25図	切手門調査区出土遺物7	45
第26図	切手門調査区出土遺物8	47
第27図	切手門調査区出土遺物9	48
第28図	四足門調査区平面図	49
第29図	天守廻之図（左）と津山絵図（天守曲輪部分）（右）	88
第30図	平成20年度整備工事図面1	91
第31図	平成20年度整備工事図面2	92
第32図	津山城絵図（矢印が七番門）	93
第33図	津山絵図（七番門部分）（上が北方向）	94
第34図	平成21年度整備工事図面1	99
第35図	平成21年度整備工事図面2	100
第36図	平成21年度整備工事図面3	101
第1表	歴代藩主一覧	10
写真1	天守台穴蔵航空写真	11
写真2	廢城前の津山城	13
写真3	張りばて天守	13
写真4	七番門虎口発調査写真（右が北）	94

写真図版目次

卷頭図版 1 上 第12次調査（平成20年度）切手
門発掘調査後航空写真（下が北）

下 第13次調査（平成21年度）切手
門発掘調査後航空写真（下が北）

卷頭図版 2 上 平成20年度天守台西半石列発見
時航空写真（右が北）

下 平成20年度天守台西半整備工事
終了後航空写真（右が北）

卷頭図版 3 上 平成21年度七番門虎口整備工事
終了後航空写真 1（北から）

下 平成21年度七番門虎口整備工事
終了後航空写真 2（上が北）

（発掘調査）

写真図版 1－1 天守台調査区 1 調査前
(右が北)

2 天守台調査区 2 調査前
(北西から)

3 天守台調査区 3 調査前
(北から)

写真図版 2－1 天守台調査区 1 航空写真
(上が北)

2 天守台調査区 1 全景（南から）

写真図版 3－1 天守台調査区 1 全景（南から）

2 天守台調査区 1 造成土と盛土
(北西から)

3 天守台調査区 1 天守台石垣基礎
(北から)

写真図版 4－1 天守台調査区 2 航空写真

(下が北)

2 天守台調査区 2 全景（東から）

3 天守台調査区 2 雨落溝検出状況
(西から)

写真図版 5－1 天守台調査区 2 雨落溝検出状況
(北西から)

2 天守台調査区 2 天守台石垣基礎
(南西から)

3 天守台調査区 3 航空写真
(下が北)

写真図版 6－1 天守台調査区 3 全景（南から）

2 天守台調査区 3 天守曲輪仕切石
垣検出状況（南西から）

3 天守台調査区 航空写真
(右が北)

写真図版 7－1 切手門調査区調査前（北から）

2 切手門調査区 航空写真
(第12次、下が北)

3 切手門調査区 航空写真
(第13次、下が北)

写真図版 8－1 切手門調査区 1 全景（下が北）

2 切手門調査区 1 全景（北から）

3 切手門調査区 1 溝 1 検出状況
(南から)

写真図版 9－1 切手門調査区 1 磁石検出状況
(西から)

2 切手門調査区 1 根太痕跡検出状況
(南から)

写真図版 10－1 切手門調査区 1 南側石垣
(東から)

2	切手門調査区 2、3 全景 (北から)	(下が北)	2	四足門調査区調査後航空写真
3	切手門調査区 2 雨水集水枠状遺構検出状況 (西から)	(下が北)	3	四足門調査区全景 (北から)
写真図版11-1	切手門調査区 2 溝 2 及び雨水集水枠状遺構検出状況 (南から)	写真図版17-1	四足門調査区全景 (南から)	
2	切手門調査区 2 溝 2 (南から)	2	四足門調査区根石検出状況 (北から)	
3	切手門調査区 2 雁木検出状況 (南から)	写真図版18	天守台周辺調査出土遺物 1	
写真図版12-1	切手門調査区 2 雁木 (南から)	写真図版19	天守台周辺調査出土遺物 2	
2	切手門調査区 2 雁木 (東から)	写真図版20	天守台周辺調査出土遺物 3	
3	切手門調査区 2 溝 3 (北から)	写真図版21	切手門調査出土遺物 1	
写真図版13-1	切手門調査区 2 磁石検出状況 (南から)	写真図版22	切手門調査出土遺物 2	
2	切手門調査区 2 磁石 (東から)	写真図版23	切手門調査出土遺物 3	
写真図版14-1	切手門調査区 2 磁石 (西から)	写真図版24	切手門調査出土遺物 4	
2	切手門調査区 3 磁石検出状況 (南から)	写真図版25	切手門調査出土遺物 5	
3	切手門調査区 3 磁石 (西から)	写真図版26	切手門調査出土遺物 6	
写真図版15-1	切手門調査区 4 西側溝 4 検出 状況 (北から)	写真図版27	切手門調査出土遺物 7	
2	切手門調査区 4 西側全景 (北から)	写真図版28	切手門調査出土遺物 8	
3	切手門調査区 4 東側溝 2、溝 3 接続状況 (東から)	写真図版29	切手門調査出土遺物 9	
写真図版16-1	四足門調査区調査前航空写真	写真図版30	切手門調査出土遺物 10	
				(整備工事)
		写真図版31	平成20年度整備工事 1	
		写真図版32	平成20年度整備工事 2	
		写真図版33	平成20年度整備工事 3	
		写真図版34	平成21年度整備工事 1	
		写真図版35	平成21年度整備工事 2	
		写真図版36	平成21年度整備工事 3	
		写真図版37	平成21年度整備工事 4	
		写真図版38	平成21年度整備工事 5	

第1部

津山城と保存整備事業の概要

第1章 津山城の概要

第1節 位置と歴史的環境

(1) 津山市の位置

津山市は岡山県北部に位置し、人口約10万3千人、面積506.36km²を測る地方都市である。市域の東は勝田郡勝央町及び奈義町、西は苫田郡鏡野町及び真庭市、南は久米郡美咲町、北は鳥取県八頭郡智頭町及び鳥取市にそれぞれ接する。平成17年（2005）に周辺の4町村との合併により現在の市域となった。

市の北部地域は、鳥取県との県境をなす標高1,000m級の中国山地南面の傾斜地にあたり、南部は中部吉備高原に接している。市の中心部である南部は標高100～200mの津山盆地にあたる。

市の中心部には、鳥取県境に位置する鏡野町上斎原に源流をもつ吉井川が西から東へ流れ、市街地東部で加茂川が合流し、瀬戸内海に注ぐ。吉井川の周囲に広がる沖積地と河岸段丘が近世城下町の中心であり、現在の市街地となっている。市街地には国道53号線とJR津山線がほぼ平行して東西に走る。岡山、鳥取へはそれぞれ約1時間30分程度で移動可能である。

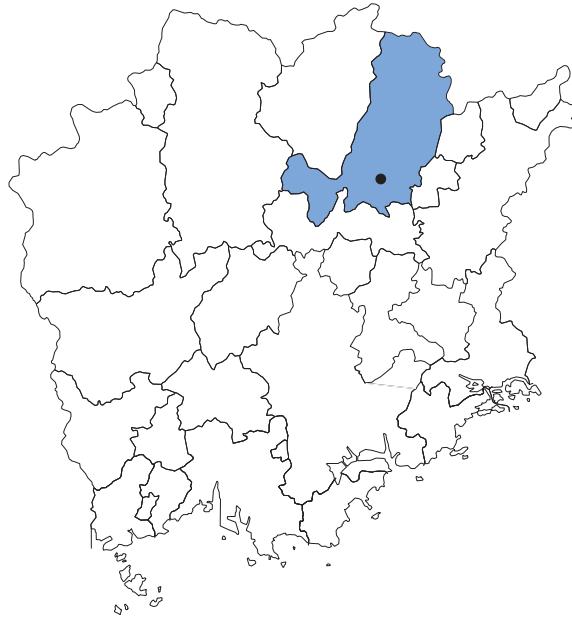
津山城は、吉井川と、市街地を南北に流れる宮川の合流点の北西部に位置する。

(2) 歴史的環境

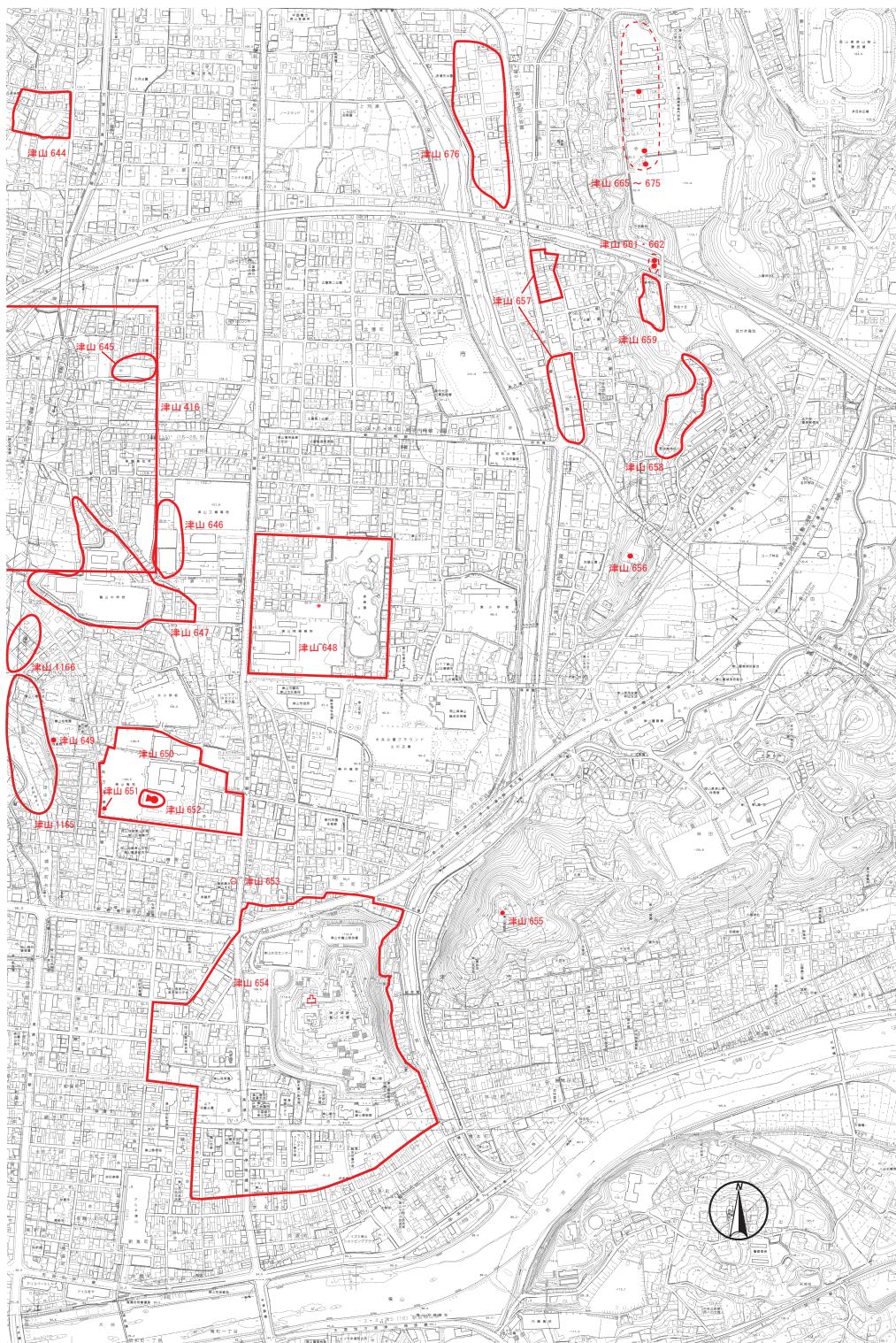
津山市域での人類の痕跡は旧石器時代からみられるが、遺物のみの出土で実態は明らかでない。周辺では大田茶屋遺跡で旧石器時代末頃とみられる石器が出土している^{（註1）}。また、市街地東部に位置する天神原遺跡でナイフ形石器が出土している^{（註2）}。

縄文時代になると、断片的ではあるが遺物の出土だけでなく、遺構が確認されるようになり、生活の痕跡をみることができる。市街地北部にある大田西奥田遺跡では押型文土器を伴う早期の円形の竪穴住居が発見されており、近隣の大田茶屋遺跡でも早期の土坑や、晚期の遺構の存在が確認されている^{（註3）}。津山城の周辺では、津山城の西に位置する小田中遺跡・山北遺跡で縄文土器が出土しているほか^{（註4）}、津山城の東側を流れる宮川を上流にのぼったところに位置する京免遺跡では、後期の土器を伴う土坑がみつかっている^{（註5）}。

弥生時代になると、発掘調査により多くの遺跡が確認されることから、平野部及び丘陵上に多くの集落が営まれるようになることがわかる。津山城の周辺では、宮川流域の京免遺跡、山北一丁田遺跡、高橋谷遺跡などがあげられる。前期については、遺物のみの出土であり、遺構の存在は明らかではない。中期以降は京免遺跡や津山城跡の北西部丘陵斜面に立地する高橋谷遺跡でも集落の存在が明らかになっ



第1図 津山市位置図



654 津山城跡 416 美作國府跡 644 小田中廣畠遺跡 645 橋ノ口遺跡 646 山北一丁田遺跡 647 高橋谷遺跡
648 旧津山藩別邸庭園（衆楽園） 649 地藏院古墳 650 十六夜山遺跡 651 津山高校内古墳 652 十六夜山古墳
653 椿高下遺跡 655 丹後山古墳 656 すくも塚古墳 657 竹ノ下遺跡 658 沼野田遺跡 659 沼北高下遺跡 661 ·
662 沼佐神社裏1・2号墳 665～675 沼1～11号墳 676 京免遺跡 1165 小田中遺跡 1166 山北遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1:15000)

ており、後期にかけて継続的に集落が営まれていたことがわかる。中でも京免遺跡は環濠の存在も確認されていることから、大規模な拠点集落であったことがわかる^(註6)。また、京免遺跡の南側に位置する竹ノ下遺跡では、中期後葉の木棺墓群がみつかっているほか、東側の丘陵上に位置する沼遺跡でも中期の集落の存在が確認される^(註7)。後期になると市内全体で遺跡数は急増する。京免遺跡のように継続的にみられる集落のほか、沼遺跡の南側丘陵に位置する沼E遺跡^(註8)などがある。平野の西側では、津山城の北西に位置する十六夜山遺跡で弥生時代後期の堅穴住居や建物の柱穴などが確認されているほか^(註9・10)、美作国府跡からも中期から後期かけての遺構・遺物が発見されている^(註11)。

古墳時代になると津山市域においても前方後円墳をはじめ多くの古墳が築かれる。十六夜山古墳は墳長約60mの前方後円墳で、二重周濠を有し、類例の少ない石見形埴輪を伴う^(註12)。築造年代は5世紀末頃で、この地域に突如として現れる首長墳に位置づけられる。このほか、沼遺跡の南側丘陵上に位置する古墳群（沼斎神社裏1・2号墳、沼1～11号墳）は、詳細不明なものもあるが箱式石棺を主体とする古墳群で一部横穴式石室を有するものもある。古墳時代後期後葉から終末期にかけて美作地域で多数出土する陶棺は、沼8号墳のほか、津山城跡のある鶴山から東側の宮川を隔てた丹後山古墳や、津山高校内古墳などで出土している^(註13)。

美作国は和銅6年（713）に備前国から分国し、国府は津山城跡の北西にあたる総社に置かれた。美作国府跡はこれまで中国自動車道建設に伴う発掘調査をはじめ多くの調査がなされ、奈良時代の国府関連の遺構に加え、国府以前の苦田郡衙の遺構と推測されるものも確認されている^(註14・15)。発掘調査から、美作国成立以降、この地域は美作国を中心域であったことがわかる。また、津山城跡の北東にあたる椿高下では瓦の出土が見られることから古代寺院の存在が推測されている^(註16)。中世には美作国の守護所が西の院庄に置かれることから、この地域における遺跡は減少する。

南北朝時代には山名氏と赤松氏の攻防が繰り広げられる中、美作国にも多くの山城が築かれた。山名氏は後に津山城が築かれる鶴山に城砦を築いた。平野部の西側、神楽尾城もその一つで、戦国時代も浦上、尼子、毛利、宇喜多等の諸勢力が相次いで美作国に進攻し、これらの攻防が続いた。

天正13年（1585）に宇喜多氏によって美作国は平定されるが、その宇喜多氏も関ヶ原の合戦に敗北し、所領没収となる。その後入国した小早川氏は改易となり、その跡を受けて慶長8年（1603）、森忠政が美作国18万6千5百石を領して入国した。

森忠政は、築城の適地を探し、津山盆地のほぼ中心に位置し、宮川と吉井川の合流点を見下ろす鶴山を選択した。また、築城と平行して城下の町づくりも始められた。城下町は西の小田中丘陵から東の丹後山南麓の吉井川北岸一帯に形成された。寛文年間（1661～1673）には東は東新町、西は安岡町まで広がり、武家屋敷や、商人・職人の町家、寺社などが置かれた。この町割りは基本的に現在も変わっていない。

註

（註1）岡本寛久ほか 1998『大田茶屋遺跡2 大田障子遺跡 大田松山久保遺跡 大田大正開遺跡 大田西奥田遺跡』
(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 129) 岡山県教育委員会

（註2）河本清ほか 1975『狼谷遺跡 小中遺跡 天神原遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 7) 岡山県教育委員会

(註3) 前掲(註1)

(註4) 小林利晴ほか 2011 『美作国府跡・小田中遺跡・山北遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 228) 岡山県教育委員会

(註5) 中山俊紀 1982 『京免・竹ノ下遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 11 集) 津山市教育委員会

(註6) 前掲(註5)

(註7) 近藤義郎・渋谷泰彦編 1957 『津山弥生住居址群の研究』(津山郷土館考古学研究報告第 2 冊) 津山市・津山郷土館

(註8) 河本清・柳瀬昭彦・中山俊紀 2001 『沼 E 遺跡 I』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 71 集) 津山市教育委員会・津山市沼 E 遺跡発掘調査委員会

(註9) 尾上元規ほか 1998 『十六夜山古墳・十六夜山遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 130) 岡山県教育委員会

(註10) 行田裕美 1999 「津山高校創立百周年記念館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『年報津山弥生の里第 6 号』津山弥生の里文化財センター

(註11) 前掲(註4)

(註12) 前掲(註9)

(註13) 豊島雪絵 2013 『平成 25 年度特別展図録 土の棺に眠る～美作の陶棺～』津山郷土博物館

(註14) 高橋護ほか 1973 『美作国府 二宮大成遺跡 西原遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 6) 岡山県教育委員会

(註15) 前掲(註4)

(註16) 前掲(註9)

第2節 津山城の歴史

(1) 築城

慶長8年（1603）に美作に入った森忠政は、院庄に入る。院庄は鎌倉時代から守護所があったとされる土地であった。しかし、この場所は水害の恐れもあるなど、築城の地には不適であった。

築城の候補地として、津山市日上の天王山と鶴山が上げられ、宮川と吉井川の合流地点を見下ろす鶴山を選び、築城を開始する。

元々この地は嘉吉年間（1441～44）に山名忠政が城を構えており、森氏の入封当時は山上に鶴山八幡宮とそれに付随していた千代稻荷、南の山腹に日蓮宗妙法院が、西の山腹には八子町の集落があった。忠政はこれらを移転させ、慶長9年（1604）に鶴山を「津山」と改め、築城に着手した。手斧始めとして、津山城下の総鎮守となる徳守神社社殿を建立している。

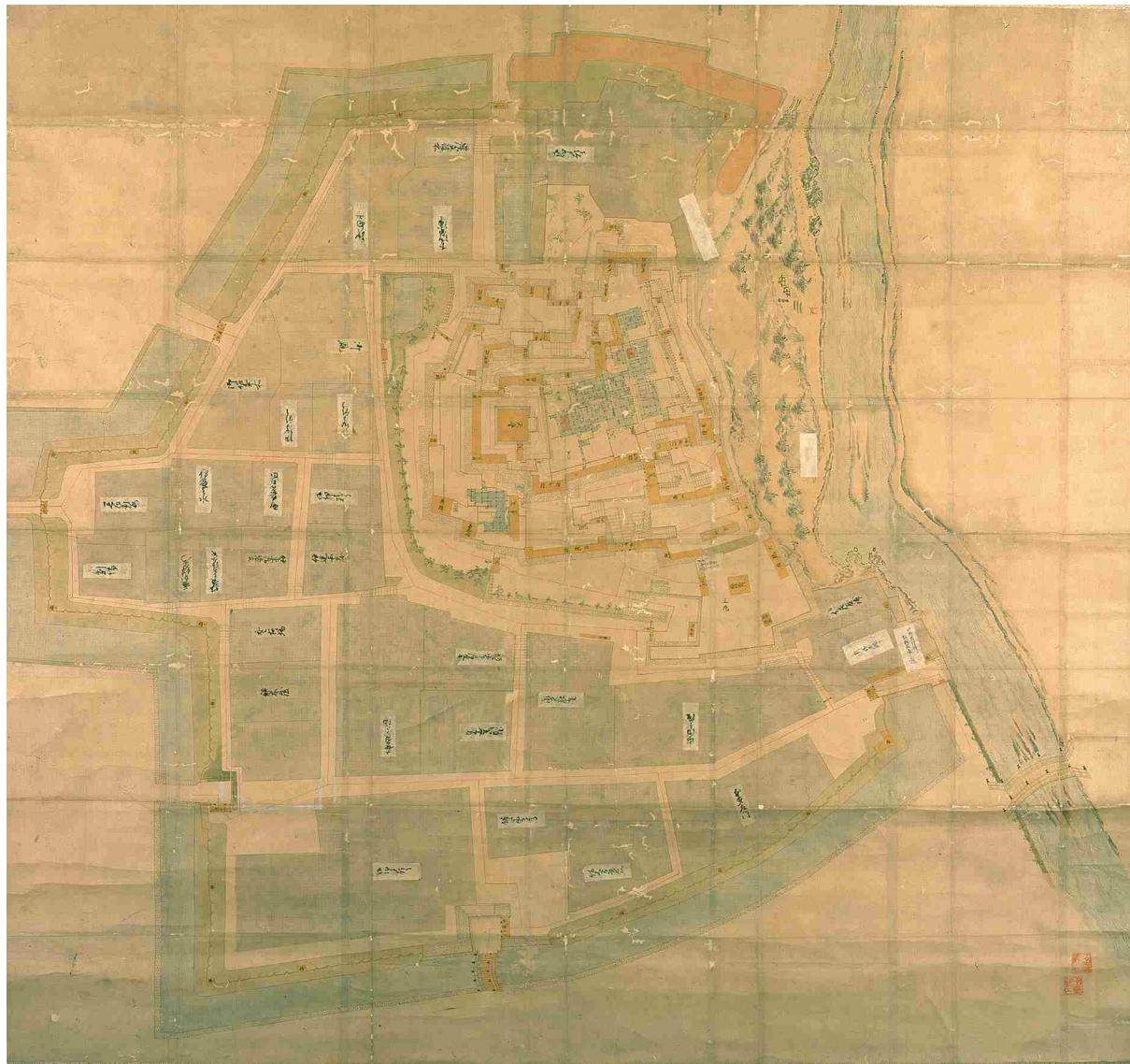
『森家先代実録』によると忠政の第9子御兼が慶長11年（1606）に津山で生まれたと記されていることから、この頃には本丸御殿の建築が進んでいたことがわかる。また、慶長13年（1608）には城の堀と6箇所の門の記述がみられることから、これらが既に完成していたことがわかる。

城の石垣の石材については、吉井川を挟んで南側の石山と呼ばれる一帯と、その下流の金屋から切り出されたとされる。築城工事は、まず御殿などの中心部分の建物ができあがった後、様々な石垣や櫓の工事が進められていったと考えられる。

築城に着手したのは慶長9年（1604）で、津山城が一応の完成をみたのは元和2年（1616）のことであるが、この13年の間に忠政は江戸城、駿府城、丹波篠山城、丹波亀山城、尾張名古屋城などの天下普請、及び大阪冬の陣、大阪夏の陣など各地へ出役や出陣を繰り返している。津山城の石垣は、①自然石を用い、隅角石も不規則な大きさの石で積み上げた野面積みに近いもの、②表面を鑿加工した石を用い、石と石の間には小さな間詰石を詰め、隅角石も規則的な算木積みを行うもの、③切石を規則正しく積み、間詰石をほとんど用いない積み方をするものへと、石垣を積む技術が進歩していることが分かる。森忠政は、各地への普請の中で、築城の技術を進歩させていったのではないかと推測される。

(2) 森家の改易と、松平氏の入封

森氏はその後、長継、長武、長成、と4代95年間存続したが、長成の没後、後継にあげられていた関衆利が発病したため後継ぎがなくなり、元禄10年（1697）8月に領地没収となった。津山城はその後一時幕府の預かりとなり、津山城の在番として広島の浅野家が城に入った。翌元禄11年（1698）正月、越前松平家の分家である松平宣富が津山藩松平家初代藩主として10万石で入封した。その後、第2代藩主である子の浅五郎が若年で死去したため、本来ならば改易となるところを、家柄を理由として特別に5万石を与えられた。以来、藩は長熙、長孝、康哉、康久と5万石の時代が続くが、文化14年（1817）第7代藩主斉孝の時、藩は將軍家から徳川家斉の第14子（後の第8代藩主松平斉民）を養子に迎えることが決まり、幕府から5万石の加増を申し渡された。これにより、藩は松平家初代以来の10万石に復帰した。第9代藩主慶倫のとき明治維新を迎える、明治2年（1869）、版籍が奉還されることにより、津山藩は終焉を迎える。



第3図 津山城絵図（本丸指図付）

（3）津山城の城郭構成について

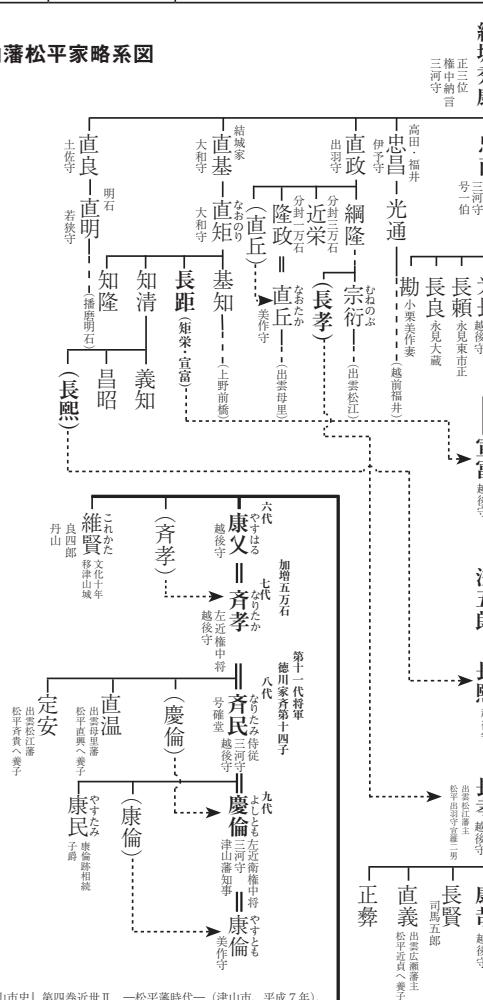
津山城は、吉井川と宮川の合流点を望む小高い山を利用して築かれている。山頂を削平して本丸とし、本丸を囲むように二の丸、三の丸が高い石垣によって階段状に配され、南側を大手、北側を搦手としている。三の丸下段の南、西、北側は総曲輪を形成し、その周囲を土塁と堀で固めている。東側は急な断崖であり、その直下に南北に流れる宮川を自然の防御線としている（第3図）。

堀の外側には宮川門、京橋門、二階町門、田町門、作事門、北門が設けられ、城下町の中心となる京橋門を大手口とし、北門を搦手口とする。堀の幅は、京橋門付近で 27 m、水深 2.4 m で、北東部は空堀であったことが絵図からわかる。現在津山城の堀は水路としてわずかに残っている以外はほとんどが埋められているが、京橋門の西側、堀の北側土手にあたる部分は唯一石垣と土塁が残存しており、「津山城外濠跡」として市の史跡に指定されている。本丸への通路は、大手、搦手とも鍵の手状に曲がる「榪形虎口」が繰り返し形成されており、極めて防御性を意識した構成となっている。城内の櫓の数は 60 棟を数え、城内には建造物がひしめき合うように建ちならぶ堅固な城郭構成であったことがわかる。

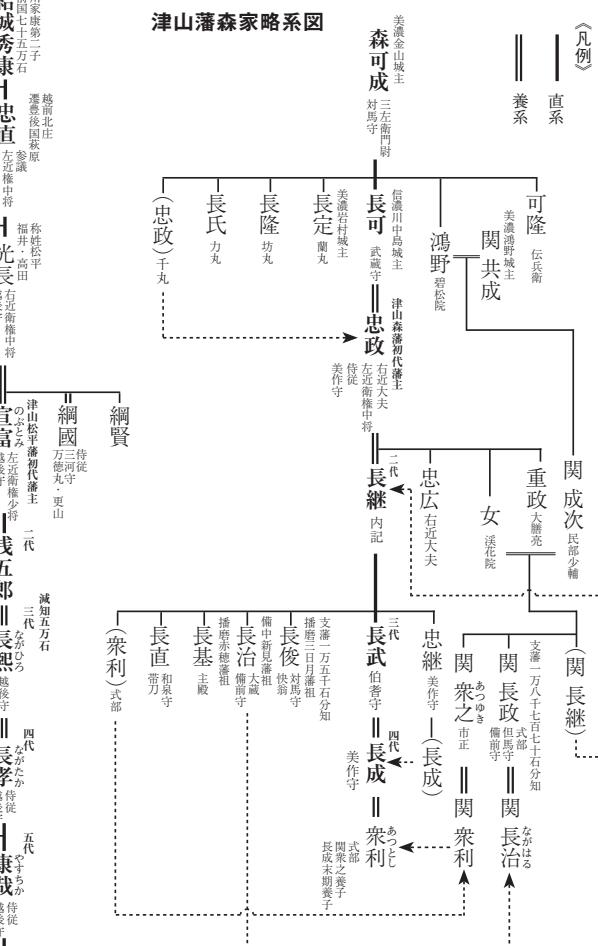
津山城略年表

西暦	年号	出来事
1441	嘉吉元	美作守護山名教清の一族である山名忠政が「鶴山城」を築き、美作中心部の拠点とする
1469頃	文明年間	山名氏の勢力が衰え、鶴山城は衰退する
1603	慶長8	森忠政が美作十八万六千五百石を領して入国する
1604	同9	忠政が「鶴山」を「津山」と改め、築城と城下町の形成に着手する
1615	元和元	幕府が「一国一城令」を定める
1616	同2	3月 津山城築城を終了
1655頃	明暦年間	二代藩主長継が城の後園として、城北に「御対面所」(現在の「衆楽園」)を営む
1697	元禄10	6月 四代藩主長成の死去により後嗣が途絶える
		8月 除封が命じられる(10月に津山城と領国が幕府に引き渡される)
1698	同11	松平長矩(宣富)が津山城及び美作国内の十万石を拝領する
1726	享保11	二代藩主浅五郎の死去により後嗣が無くなり、五万石を収公される
1809	文化6	津山城本丸御殿を大火で焼失する(翌7年再建)
1817	同14	9月 将軍家斉の第十四子銀之介(斉民・確堂)が養子入りする
		10月 七代藩主斉孝に五万石加増が申し渡され、藩領が十万石に復帰する
1869	明治2	版籍奉還により、藩主慶倫は津山藩知事に任命される
1871	同4	廢藩置県により松平氏による藩政が終わり、「津山県庁」が城跡内の内山下に置かれる
1873	同6	津山城の廢城が決定し、大蔵省により城郭が公売に付される
1874	同7	夏 城郭内の諸建物の撤去が始まる(同8年に終了)
1900	同33	城跡を津山町の町有地とし、「鶴山公園」を開園する
1905	同38	旧津山松平藩の「修道館」を三の丸に移築し、「鶴山館」を開設する
1963	昭和38	津山城跡が国指定史跡となる

津山藩松平家略系図



津山藩森家略系図



参考文献：「津市史」第四卷近世II 一松平藩時代（津市、平成7年）、『愛山文庫目録』津市松平藩文書の部（津市郷土博物館紀要第3号、平成3年）「藤川系譜」、「松平家御系譜」、「追知会計」所取、「藤川加除封録」による。

参考文献:「津山市史」第三巻近世 I 「森藩時代」(津山市、昭和 48 年)、『津山城築城四〇〇年記念特別展 戦国武将 森忠政―津山城主への道―』(津山郷土博物館、16 年)、「森家譜」、「森家・平生作室記」による

第4図 津川城の略年表と津川藩森家、松平家略系図

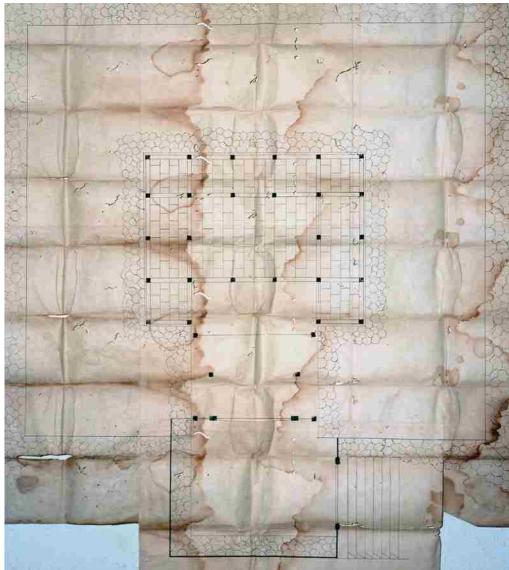
	藩主(謚号)	襲封・致仕	生没年	父母	婚姻年・正室	生没地	墓地	備考
1	津山森藩初代 森 忠政(本源院)	慶長8年～寛永11年 (1603) (1634) 襲封34歳・在封31年	元龟元年～寛永11年 (1570) (1634) 享年65歳	森 可成 林通安女 (妙向尼)	①天正16年 (1588) 中川瀬兵衛清秀 ②文禄3年 (1594) 大和納言秀長女	美濃金山 京都妙堅寺	京都大徳寺三 玄院	美作国18万 6,500石拝領
2	同 2代 森 長繼(長継院)	寛永11年～延宝2年 (1634) (1674) 襲封25歳・在封40年	慶長15年～元禄11年 (1610) (1698) 享年89歳	閑 成次 於郷	寛永12年 (1635) 池田長幸女	津山 江戸芝屋敷	江戸瑞光寺	
3	同 3代 森 長武(円明院)	延宝2年～貞享3年 (1674) (1686) 襲封30歳・在封12年	正保2年～元禄9年 (1645) (1696) 享年52歳	森 長繼 池田長幸女	延宝4年 (1676) 京極高直女 【異説】京極高任妹	江戸 目黒閑口屋敷	江戸寛永寺	
4	同 4代 森 長成(雄峯院)	貞享3年～元禄10年 (1686) (1697) 襲封16歳・在封11年	寛文11年～元禄10年 (1671) (1697) 享年27歳	長繼子忠繼 小笠原長次女	元禄2年 (1689) 毛利綱元女	江戸 江戸芝屋敷	江戸祥雲寺	
5	津山松平藩初代 松平宣富(源泉院)	元禄11年～享保6年 (1698) (1721) 襲封19歳・在封23年	延宝8年～享保6年 (1680) (1721) 享年42歳	松平直矩 村上氏女	元禄16年 (1703) 佐竹右京大夫美處女	江戸 津山	津山泰安寺	10万石拝領
6	同 2代 松平浅五郎(智円院)	享保6年～同11年 (1721) (1726) 襲封6歳・在封5年	享保元年～同11年 (1716) (1726) 享年11歳	松平宣富 光円院	—	江戸桜田屋敷 江戸	江戸天徳寺	
7	同 3代 松平長熙(戒善院)	享保11年～同20年 (1726) (1735) 襲封7歳・在封9年	享保5年～同20年 (1720) (1735) 享年16歳	松平知清 本多氏女	—	江戸 江戸	江戸天徳寺	5万石減封
8	同 4代 松平長孝(隆照院)	享保20年～宝暦12年 (1735) (1762) 襲封11歳・在封27年	享保10年～宝暦12年 (1725) (1762) 享年38歳	松平近朝 横島氏女	宝暦元年 (1751) 藤堂高治女	出雲広瀬 江戸	江戸天徳寺	
9	同 5代 松平康哉(顕徳院)	宝暦12年～寛政6年 (1762) (1794) 襲封11歳・在封32年	宝暦2年～寛政6年 (1752) (1794) 享年43歳	松平長孝 梅光院	明和8年 (1771) 井伊掃部頭直幸女	江戸鍛冶橋邸 江戸鍛冶橋邸	江戸天徳寺	
10	同 6代 松平康義(嚴恭院)	寛政6年～文化2年 (1794) (1805) 襲封9歳・在封11年	天明6年～文化2年 (1786) (1805) 享年20歳	松平康哉 柴田氏女	享和3年 (1803) 藤堂高継女	江戸鍛冶橋邸 江戸	江戸天徳寺	
11	同 7代 松平斉孝(成裕院)	文化2年～天保2年 (1805) (1831) 襲封18歳・在封26年	天明8年～天保9年 (1788) (1838) 享年51歳	松平康哉 池田氏女	文化4年 (1807) 松平治好女	江戸鍛冶橋邸 津山西御殿	津山泰安寺	10万石に復帰
12	同 8代 松平斉民(文定院)	天保2年～安政2年 (1831) (1855) 襲封18歳・在封24年	文化11年～明治24年 (1814) (1891) 享年78歳	徳川家齊 土屋氏女	婚姻年不明 松平斉孝女	江戸 東京	東京谷中墓地	
13	同 9代 松平慶倫(慎由院)	安政2年～明治2年 (1855) (1869) 襲封29歳・在封14年	文政10年～明治4年 (1827) (1871) 享年45歳	松平斉孝 中西氏女	嘉永4年 (1851) 黒田齊興養女 奥平昌高女	津山城 津山	津山愛山廟	

《出典》『森家先代実録』(『岡山県史 津山藩文書』)・『松平御家譜』(『津山温知会誌』第3編)

第1表 歴代藩主一覧

本丸は西端を石垣で区切って天守曲輪とし、その中央に天守が築かれた。天守は地下一階、地上五階で、平面が正確な四角形で、上階が規則的に小さくなっていく「層塔型」と呼ばれる構造である。天守の高さは、天守台石垣を除くと約22m、石垣を入れると27mという壮大なものであった。天守を支える礎石は、地下の穴蔵部分に並んでいる様子が現在も確認でき、絵図と比較すると柱の位置と礎石の位置がほぼ一致していることが分かる(第5図、写真1)。

本丸御殿は、儀式や政務を行う表向きの御殿と、藩主の生活の場にあたる奥向きの御殿に分けられる。



第5図「津山城天守指図」穴蔵部分

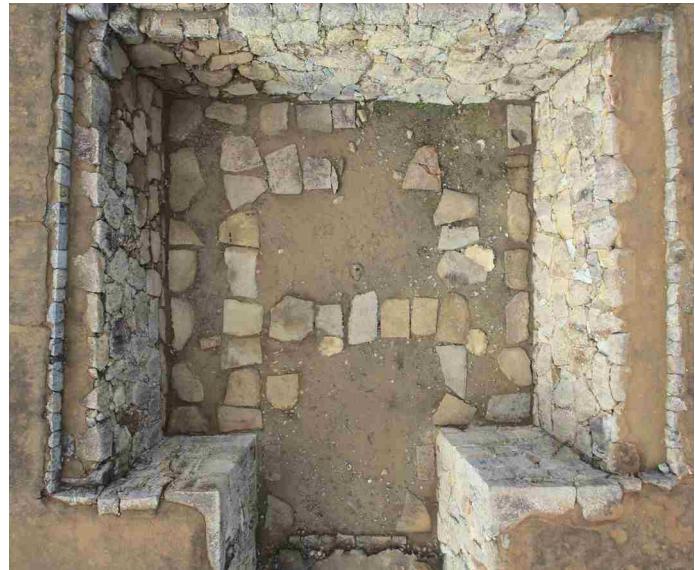


写真1 天守台穴蔵航空写真

表向きの御殿は、「玄関」、「大広間」、「大書院」、「小書院」で構成され、奥向きの御殿には、「料理の間」、「台所」、「居間」、「主殿」などが配される。南西に位置する備中櫓や長局は、中が畳敷きになっており、櫓としてではなく、御殿の一部として使われていたことが分かる。このほかにも、表鉄門の二階部分が御殿への通路となっていたり、裏鉄門枠形の一部が本丸御殿の地下室の空間として使われるなど、御殿の面積を広く使おうとする意図が見て取れる箇所が多い（第6図）。

森忠政が築いた津山城は、松平家の時代に度々石垣の積み直しや修復作業が行われているが、実際の戦闘を経ることなく明治を迎えていたため、基本的に明治初期の時点では城郭建築のほとんどが築城当時に近い形で残っているといえる。また、松平家の時代に描かれた絵図や修復の記録が残されているため、往時の城郭構成や変遷を伺い知ることができる。

文化6年（1809）、藩主松平斉孝の時、本丸御殿の台所から出火し、本丸御殿のすべての建物、及び表鉄門、裏鉄門などが全焼した。本丸御殿は翌7年に再建されるが、表鉄門はその7年後の文化14年（1817）に再建されることとなり、裏鉄門は廃城まで再建されることはなかった。

再建後の本丸御殿を描いた絵図によると、表向きの部分は小書院が造られておらず、表鉄門二階部分を通って広間の玄関に至る構造も廃止されている（第7図）。

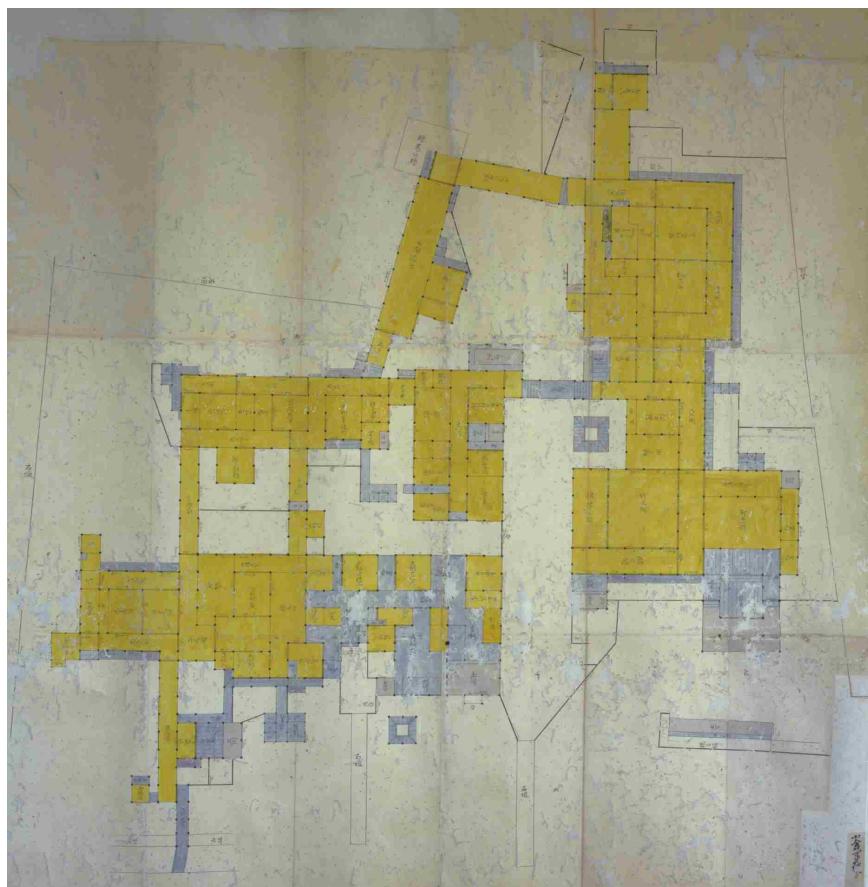
（4）廃城後

津山城は江戸時代の終焉とともにその役目を終え、明治7年（1874）から翌8年にかけて石垣を残しすべての建物が取り壊された。解体された材木の多くは筏に組まれて吉井川を下り、瀬戸内の製塩の燃料に利用されたという。その後の津山城は桑や麻の畠となるが、大半は荒れ果てた状態であった。明治15年（1882）に備中櫓跡地に設置され、現在は本丸天守曲輪の東側にある鶴山城址碑には、当時の状況が記されている。

津山城の保存のきっかけになったのは明治23年（1890）の腰巻櫓石垣の崩落である。当時津山町議会は、町が崩落した石の払い下げを受け、河岸の堤防に利用することを検討していた。そのような状



第6図 本丸御殿火災前の絵図（御城御座敷向惣繪圖 文化5年（1808））



第7図 本丸御殿火災後の絵図（津山城之図）



写真2 廃城前の津山城

況の中、岡山県の書記官が崩落の現状視察に訪れ、津山町から廃城後の経過や今後の対応を聞き、津山にとって非常に惜しむべきことであると語った。このことが地元有志を動かし、保存に向けた働きかけを町長から郡長、県知事へと次々に行い、明治24年（1891）、鶴山城保存会の発足につながる。このとき津山城は国有地、県有地、私有地が混在していたが、明治32年（1899）から33年にかけて町が必要な土地の取得を終え、明治33年（1900）春、「鶴山公園」が開園した。明治37年（1904）には、旧藩校の建物の一つを三の丸に移築し、現在の鶴山館となっている。その後大正15年（1926）には、当時の皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）が来津し、津山城跡を訪れ、この鶴山館を視察された。

昭和11年（1936）には津山城跡を中心に産業振興大博覧会が開催され、博覧会の呼び物として天守台の上に本来の天守の3分の2の大きさの天守が建てられた。この天守は「張りぼて」の愛称で親しまれたが、空襲の標的になるという理由から、昭和20年8月に取り壊された。

昭和30年（1955）には三の丸南側に津山市立動物園が開設され、昭和36年（1961）4月からはこれまで無料であった入園が有料となった。また、明治末の開園以来、公園整備の一環として継続的に桜の植樹が行われていたこともあり、津山城跡は現在岡山県内で唯一、全国桜名所百選のひとつになり、桜の名所としても親しまれるようになった。



写真3 張りぼて天守

参考文献

津山市史編纂委員会 1973 『津山市史第三巻 近世 I－森藩時代－』 津山市

津山市史編纂委員会 1995 『津山市史第四巻 近世 II－松平藩時代－』 津山市

津山市教育委員会 2000 『津山城 資料編』 津山市教育委員会

津山市制施行八〇周年記念出版 2000 『津山学ことはじめ』 津山市

平岡正宏ほか 2007 『史跡津山城跡 保存整備事業報告書 I』 津山市教育委員会

平岡正宏編 2009 『津山城百聞録』 津山市

第2章 史跡津山城跡保存整備事業について

第1節 整備計画策定と整備委員会の設置

（1）『史跡津山城跡保存整備計画』の策定まで

史跡津山城跡は、近世城郭の優れた遺構として昭和38年9月28日、国の史跡に指定された。史跡指定範囲は、本丸、二の丸、三の丸を中心とする91,110m²で、ほぼ全域が公園として鶴山公園として一般に有料公開されている。

史跡指定を受けたことから、石垣で囲まれた部分については現在まで保存がはかられてきたが、周辺地域については、市街地化が進んでいる。本来の城郭の範囲である外堀部分については、京橋門跡の西側に遺存する土壘や、部分的に堀の名残をとどめる水路などがみられるが、大半はビルや宅地、駐車場となっている。このため、史跡指定地外については本来の縄張り構成が分かりにくくなっていた。

そこで、津山城跡を都市基盤整備の中で正しく位置づけ、有効活用していくことを目的として昭和63年（1988）に『史跡津山城跡保存整備基本計画』が策定された。

その後、この計画に沿って町並み調査や石垣修復、本丸の民家撤去、トイレ水洗化、無電柱化などの授業が進められてきたが、史跡指定地内の調査や整備をより具体的に推進するための指針が求められるようになり、改めて整備委員会を設置し、『史跡津山城跡保存整備計画』を策定することとなった。

（2）史跡津山城跡整備委員会の設置

「史跡津山城跡整備委員会設置要項」は平成8年2月16日告示第68号で制定された。委員会の構成は次のとおりである。

【平成28年4月現在】

氏名	所属等	初就年月
狩野 久	奈良文化財研究所名誉研究員	平成8年2月～
河本 清	元くらしき作陽大学教授	平成8年2月～
鈴木 充	広島大学名誉教授	平成8年2月～
三好 基之	津山市文化財保護委員会委員長	平成8年2月～
可児 通宏	くらしき作陽大学非常勤講師	平成21年4月～
田中 哲雄	日本城郭研究センター名誉館長	平成22年4月～

【平成20年度】

	氏名	所属等（委嘱時）
委員長	狩野 久	元岡山大学教授
委員	尼崎 博正	京都造形芸術大学教授
	伊原 恵司	東京芸術大学客員教授
	河本 清	くらしき作陽大学非常勤講師
	鈴木 充	広島大学名誉教授
	三好 基之	津山市文化財保護委員会委員長

【平成 21 年度】

	氏名	所属等（委嘱時）
委 員	伊 原 恵 司	東京芸術大学客員教授
	可 児 通 宏	國學院大學講師
	狩 野 久	元岡山大学教授
	河 本 清	くらしき作陽大学非常勤講師
	鈴 木 充	広島大学名誉教授
	三 好 基 之	津山市文化財保護委員会委員長

【指導】

本 中 真	文化庁記念物課主任文化財調査官	平成 9 年 4 月～平成 27 年 3 月
青 木 達 司	文化庁記念物課文化財調査官	平成 27 年 4 月～
田 村 啓 介	岡山県教育庁文化課参事	平成 11 年 4 月～平成 22 年 3 月
尾 上 元 規	岡山県教育庁文化財課主任	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月
石 田 為 成	岡山県教育庁文化財課主任	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月
大 橋 雅 也	岡山県教育庁文化財課総括参事	平成 26 年 4 月～

第2節 保存整備計画の概要とこれまでの整備事業

津山市の中心に位置する津山城は、都市基盤の整備とともに急速な市街地化が進み、津山城の城郭としての縄張構成が分かりにくくなっていた。また、国史跡指定地内においても、樹木や後世の占有物によって視界が妨げられている箇所も多くみられ、全体の構成が理解しにくい状況であった。

『史跡津山城跡保存整備計画』は、これらの改善を目的として平成10年3月に策定された。整備期間は、第Ⅰ期整備計画として平成10年度から平成29年度までの20年間を対象とした。主な事業内容は次のとおりである。

(1) 『史跡津山城跡保存整備計画』(第Ⅰ期：平成10年度～平成29年度)

A. 虎口通路整備

冠木門から本丸に到る通路及び本丸から裏下門に到る通路について、往時の通路の景観を復元するために、樹木の整理、石段の修復、土砂の除去、既設物の撤去等を行う。

B. 石垣修理

石垣については現在の時点で崩落の危険がある箇所が本丸五番門など計7箇所認められる。これらの箇所については、基本的に解体・積み直しを行うこととする。

C. 既存樹木整備

津山城内の既存樹木は桜の名所あるいは都市公園の緑地として長年親しまれていることから、可能な限り保全していくこととし、南は桜、北は紅葉を主体とした現状を残していくが、①城の景観を損ねているもの、②石垣を破損したり破損する危険のあるもの、③整備に支障を来すもの の3点について樹木の整理を行う。

D. 既設占有物の撤去

廢城後に設置された既存占有物については基本的に撤去する。

E. 建造物の復元

建造物の復元については、本丸においては備中櫓を対象とする。

F. 展示説明計画

津山城を一般の人々にわかりやすく理解してもらうために、展示施設の充実をはかる。そのため案内施設・表示の充実・ガイダンス施設の設置、本丸御殿の遺構表示などを行う。

(2) これまでの整備事業

史跡津山城跡保存整備計画は平成10年3月に策定されたが、計画策定、委員会設置等の事業がこれに先立つ平成8年度から単市事業として実施した。平成11年度からは国・県補助事業として実施した。

【単市事業】

単市事業は、すべて津山市教育委員会文化課が主体となって実施した。主な事業概要は次のとおりである。

年 度	事 業 概 要
平成8年度	『史跡津山城跡保存整備計画』策定（1年目）
平成9年度	『史跡津山城跡保存整備計画』策定（2年目）
	第1次発掘調査
	整備委員会他
平成10年度	備中櫓跡鶴山城址碑移設工事
	津山城跡排水基本調査・備中櫓部地質基本調査委託
	津山城跡石垣立面、勾配測量委託
	第2次発掘調査
	文献調査
平成11年度	備中櫓復元整備基本計画書・石垣調査報告書作成委託
	『津山城資料編』刊行
	文献調査
	「津山城だより」No.1～3刊行他
平成12年度	備中櫓復元整備工事基本設計委託
	管理道（市道部分）設計委託
	管理道（市道部分）設置工事
	『津山城資料編Ⅱ』刊行
	管理道設置に伴う配電設備等移転
	文献調査他
平成13年度	栗石採集他
平成14年度	文献調査
平成15年度	樹木伐採委託他
	文献調査
	文献調査他
平成16年度	台風禍による石垣修理
	備中櫓復元落成式他
平成17年度～	文献調査他

【国・県補助事業】

国・県補助事業は、平成 11 年度からである。補助事業の名称は、平成 11・12 年度が「記念物保存修理事業」、平成 12・13 年度が「地方拠点史跡等総合整備事業」、平成 15～17 年度が「史跡等総合整備活用推進事業」、平成 18～21 年度が「史跡等・登録記念物・歴史の道保存修理事業」の交付決定を受け実施した。

各年度の主な事業概要と平成 20・21 年度の事業費は次のとおりである。

(事業概要)

年 度	事 業 概 要
平成 11 年度	第 3 次発掘調査 五番門南石垣測量図化業務 管理道設計業務
平成 12 年度	第 4 次発掘調査 五番門南石垣修復工事設計業務 五番門南石垣修復工事（2 カ年事業の 1 年目） 五番門南石垣修復工事設計監理業務（2 カ年事業の 1 年目） 管理道設置工事
平成 13 年度	第 5 次発掘調査 五番門南石垣修復工事（2 カ年事業の 2 年目） 五番門南石垣修復工事設計監理業務（2 カ年事業の 2 年目） 備中櫓復元整備工事実施設計業務 備中櫓復元整備工事（4 カ年事業の 1 年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4 カ年事業の 1 年目）
平成 14 年度	第 6 次発掘調査 備中櫓復元整備工事（4 カ年事業の 2 年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4 カ年事業の 2 年目）
平成 15 年度	第 7 次発掘調査 備中櫓復元整備工事（4 カ年事業の 3 年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4 カ年事業の 3 年目）
平成 16 年度	第 8 次発掘調査 備中櫓復元整備工事（4 カ年事業の 4 年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4 カ年事業の 4 年目） 備中櫓復元整備工事記録 DVD 作成業務 備中櫓周辺整備工事設計業務 第 9 次発掘調査
平成 17 年度	備中櫓周辺整備工事 五番門南石垣土堀復元整備工事 備中櫓周辺・五番門南石垣土堀復元整備工事設計監理業務 天守曲輪西半整備工事設計業務
平成 18 年度	第 10 次発掘調査 天守曲輪西半整備工事 天守曲輪西藩整備工事監理
平成 19 年度	第 11 次発掘調査 天守曲輪西半整備工事 天守曲輪西半整備工事監理 多門櫓石垣修理設計業務
平成 20 年度	第 12 次発掘調査 天守曲輪西半整備工事（2 年目） 天守曲輪西半整備監理
平成 21 年度	第 13 次発掘調査 七番門虎口整備工事 七番門虎口整備工事監理

(事業費)

年 度	事 業 費 (円)			
	国庫	県費	市費	計
平成 20 年度	6,750,000	2,250,000	4,517,067	13,517,067
平成 21 年度	7,000,000	2,333,000	4,732,966	14,065,966
合計	13,750,000	4,583,000	9,250,033	27,583,033

第2部

発掘調査の概要

第1章 発掘調査の記録

第1節 はじめに

これまでに実施された津山城の発掘調査は、平成元年と平成2年に実施された無電柱化に伴うトレーニング調査と、整備計画策定後の発掘調査とに大別される。

前者は、都市公園としての工事に伴い実施された確認調査であり、調査成果は報告されている^(註1)。

後者は、史跡整備に伴う確認調査で、第1次（平成9年度）～第9次（平成17年度）までは『史跡津山城跡保存整備事業報告書I』で報告されている。第9次までの調査は、本丸御殿、備中櫓、及び搦手通路及び門部分の調査が行われ、その結果、後世の攪乱によって削平されている部分はあるものの、遺構は概ね良好な状態で残されていることが判明した。

調査位置は、本丸御殿の調査についてはこれまでの資料悉皆調査により判明している絵図をもとに調査区を設定しており、絵図と発掘調査との対比ができる部分が多くみられた。また、御殿以外の調査についても俯瞰図が多数残されていたため、絵図からの情報と、発掘調査からの所見とを合わせて検討することが可能であった。

今回報告するのは第12次調査（平成20年度）、及び第13次調査（平成21年度）の発掘調査である。第12次調査では、天守台周辺及び切手門の調査、第13次調査では、切手門の補足調査を実施している。

切手門の調査が2か年に渡っているので、報告は天守台周辺の調査と、切手門の調査に分けて行う。

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

津山市教育委員会 教育長 藤田長久（平成20年度・21年度）

原田良一（平成28年度）

教育次長 國藤義隆（平成20年度）

大下順正（平成21年度）

生涯学習部長 松尾全人（平成28年度）

（平成20年度）文化財課長 中山俊紀（文化財センター所長）

参事（兼）文化財保護係長 行田裕美（ 同 次長）

主任 平岡正宏（ 同 主任、調査担当）

（平成21年度）文化財課長 行田裕美

係長 小郷利幸

主査 平岡正宏（ 同 主査、調査担当）

（平成28年度）次長 小坂田裕造（文化課長）

参事 小郷利幸（文化財センター所長）

主幹（兼）文化財保護係長 仁木康治（ 同 次長）

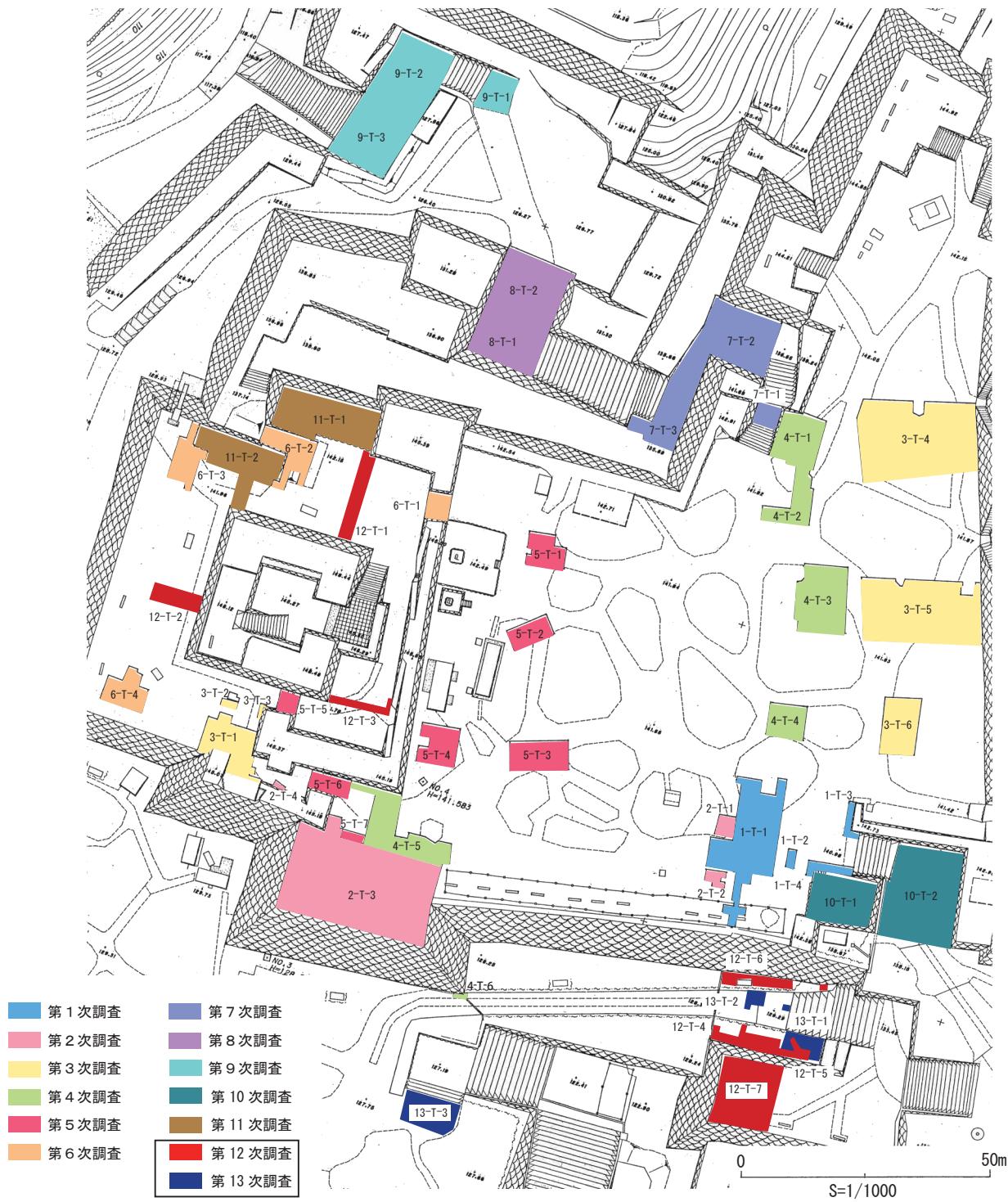
主査 豊島雪絵（ 同 主査、報告書担当）

主事 宮崎絢子（ 同 主事、報告書担当）

発掘調査にあたっては、史跡津山城跡整備委員会の諸先生方、文化庁文化財部記念物課、岡山県教育庁文化財課の関係者をはじめ、多くの皆さん方からの御教示を得た。また、発掘調査に従事していただいたシルバー人材センターの作業員の皆さん方にもお世話になった。記してお礼申し上げます。

註

(註1) 行田裕美 1995「津山城本丸・二の丸確認調査報告」『年報 津山弥生の里』第2号 津山弥生の里文化財センター



第2節 天守台周辺の調査（第12次（平成20年度））

天守曲輪周辺の整備に伴う遺構確認のため、天守台の北、西、東の3か所の調査を実施した。

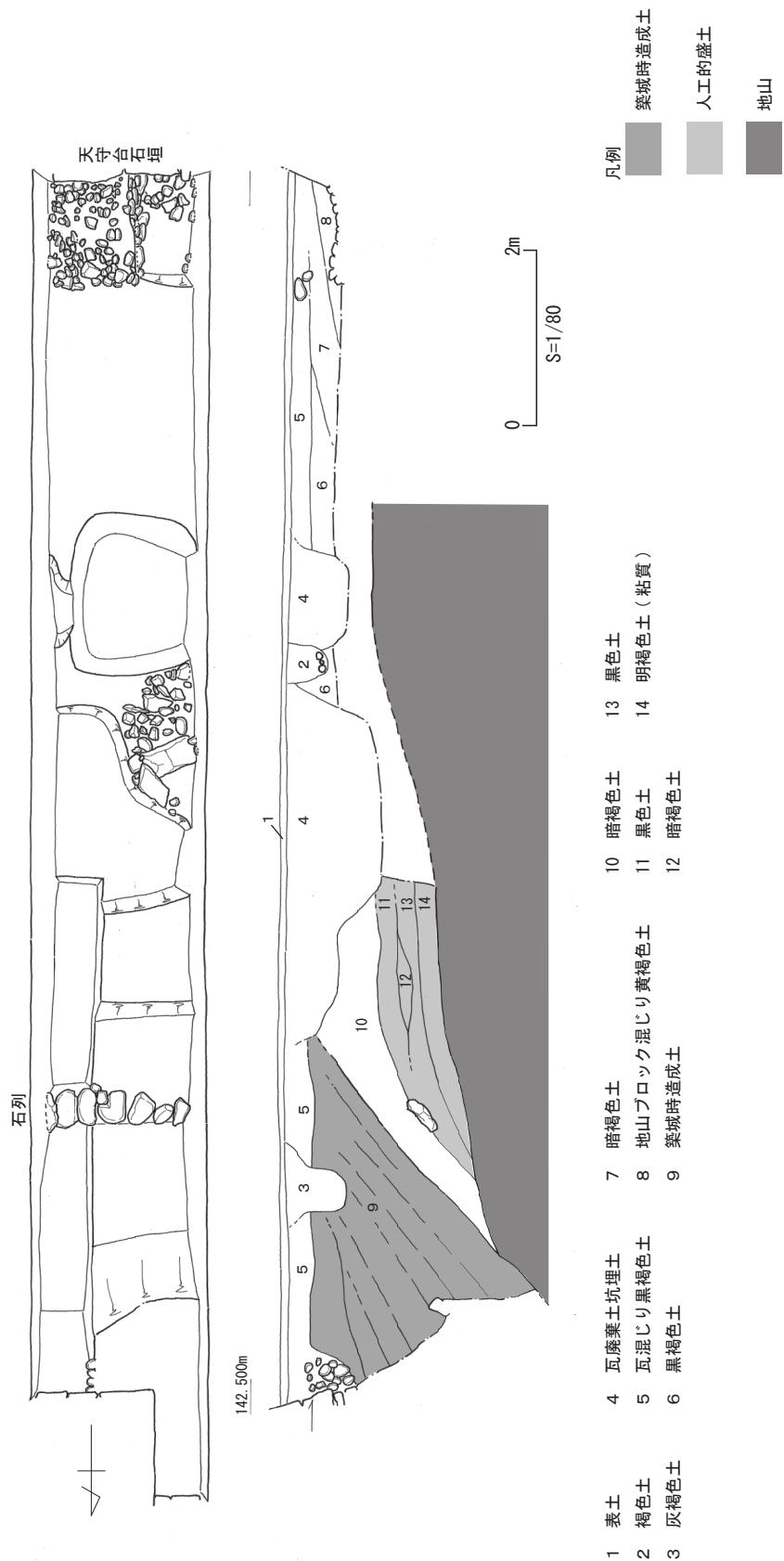
（1）調査区の概要

調査区1（第10図）

天守台の北側で、長櫓南石垣と天守台北石垣に直交する形で設定した調査区である。明治時代の廃城時以降に瓦を廃棄した土坑等により、築城時の遺構面は大きく改変を受けていた。天守台石垣の基底部



第9図 第12次・13次発掘調査区配置図 (S=1:3000)



第10図 天守台周辺調査区1 平面・断面図 (S=1:80)

の状況を確認したところ、基底部は、栗石上に直接置かれており、栗石は根石の前面 1m あまりのところまで敷き詰められていた。また、地山の高さを確認するために調査区の北東側を掘削したところ、石列が検出された。

石列

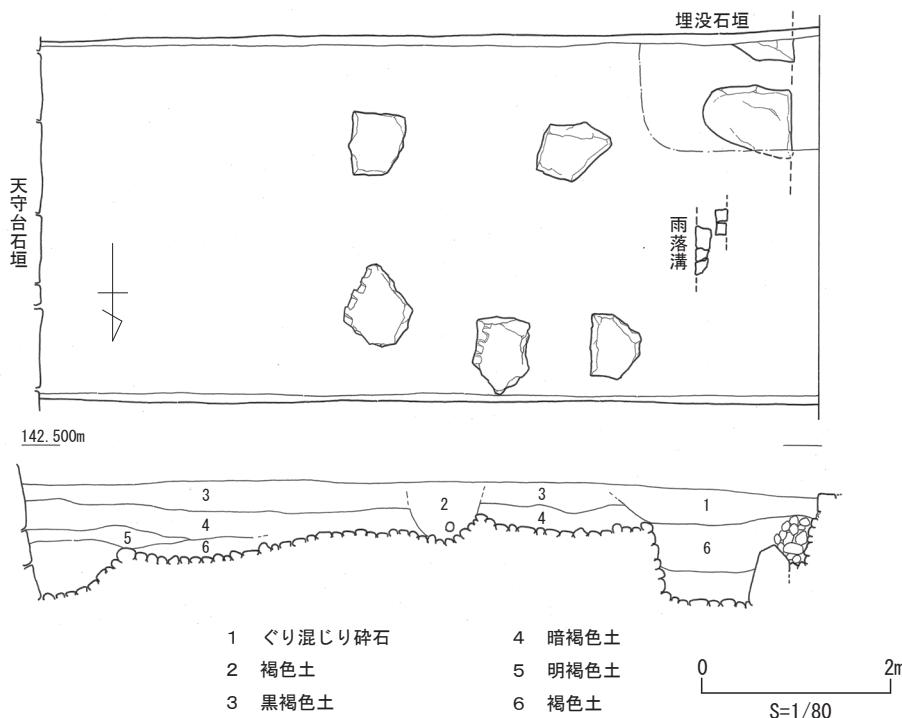
長櫓南石垣から南に 3m の位置で、長さ 40 cm 程度の河原石が斜めに東西方向に並んで据えられていた。堆積状況を確認したところ、石列は地山の上の築城時以前の人工的な盛土の斜面上に据えられていることから、城に伴う遺構ではなく、築城時以前の墳墓などの墳端の一部と推測される。

調査区 2 (第 11 図)

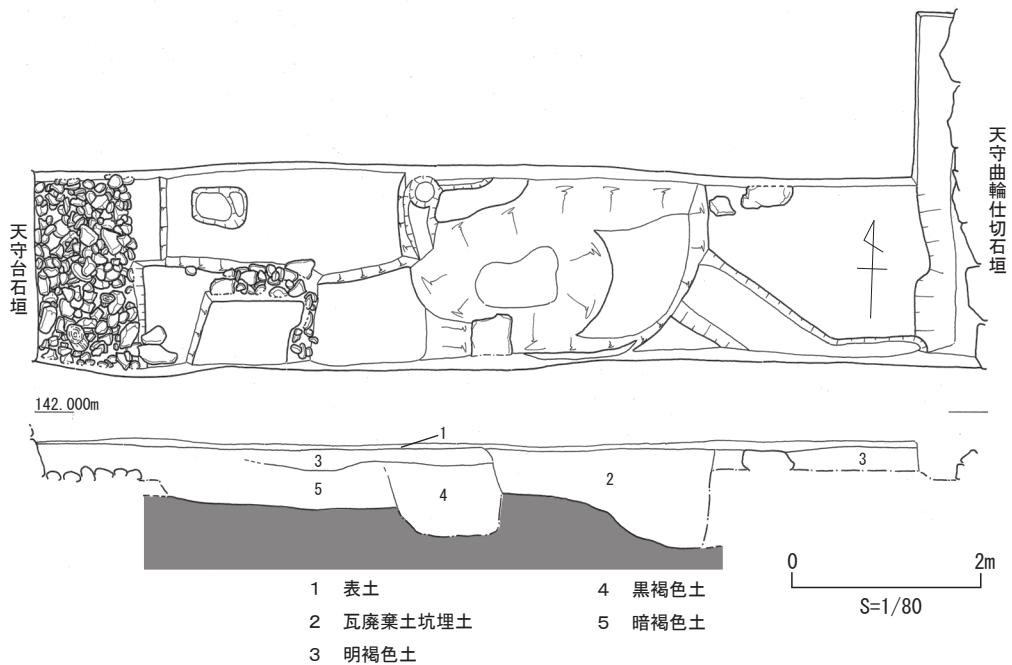
天守台の西側で、多門櫓と天守台西石垣の間に設定された調査区である。表土と瓦の堆積層を除去したところ、調査区全面で栗石が検出された。栗石は天守台石垣の下に続いており、天守台石垣の基底部は、栗石上に直接置かれていた。遺構は、雨落溝、埋没石垣、石が検出された。石は調査区の西半分に 5 石存在し、いずれも上面は平坦である。絵図等からこの場所に建物は存在せず、石の並びも不規則であることから、建物の礎石とは考えがたいが、性格は不明である。

雨落溝

調査区西側で天守台西石垣から約 7m の位置で検出された。南北方向に延びる豊島石製の溝で、幅約 30 cm をはかる底部の一部が遺存する。絵図等から多門櫓の雨落溝と推定される。



第 11 図 天守台周辺調査区 2 平面・断面図 (S = 1 : 80)



第12図 天守台周辺調査区3平面・断面図 (S=1:80)

埋没石垣

調査区南西隅で2石分が検出された。西側に面をもち、面から天守台西石垣までは約8mをはかる。埋没石垣は平成11年度に南側の角が、平成19年度に北側の角が確認されており、今回検出されたものは南北両角を結ぶ位置にあたる。

調査区3（第12図）

天守台の東側で、天守曲輪仕切石垣と天守台東石垣に直交する形で設定した調査区である。明治時代の廃城時以降に瓦を廃棄した土坑等により、築城時の遺構面は大きく改変を受けていた。天守台石垣の基底部の状況を確認したところ、調査区1同様、基底部は栗石上に直接置かれており、栗石は根石の前面1mあまりのところまで敷き詰められていた。

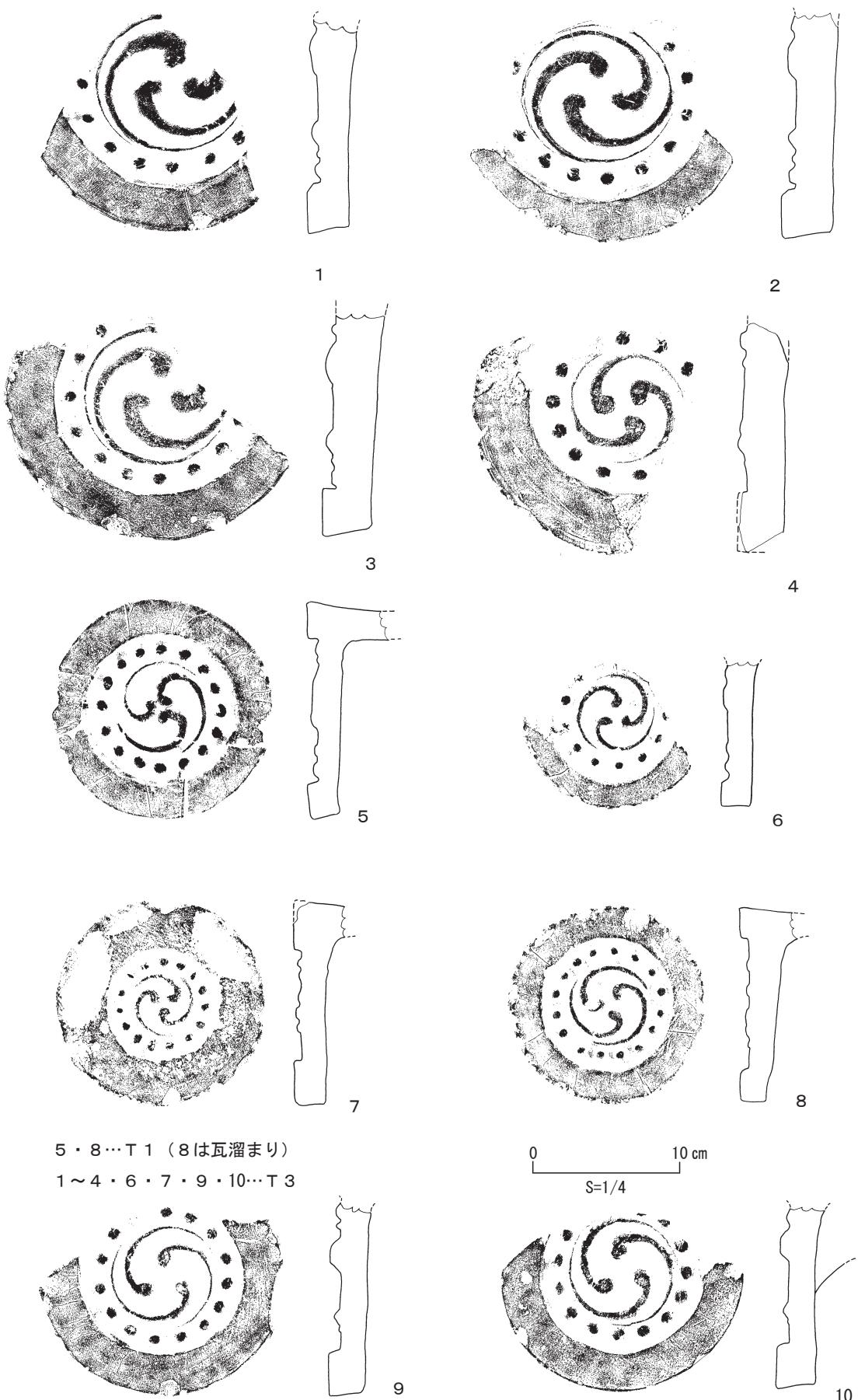
（2）出土遺物（第13図～16図）

遺物は天守台周辺の各調査区において出土した。掘削の際に埋土中から出土したものがほとんどで、遺構に伴うものはみられない。調査区1において部分的に瓦の集積がみられる箇所があり、そこから多くの瓦が出土したのをはじめ、ほとんど瓦のみの出土であった。

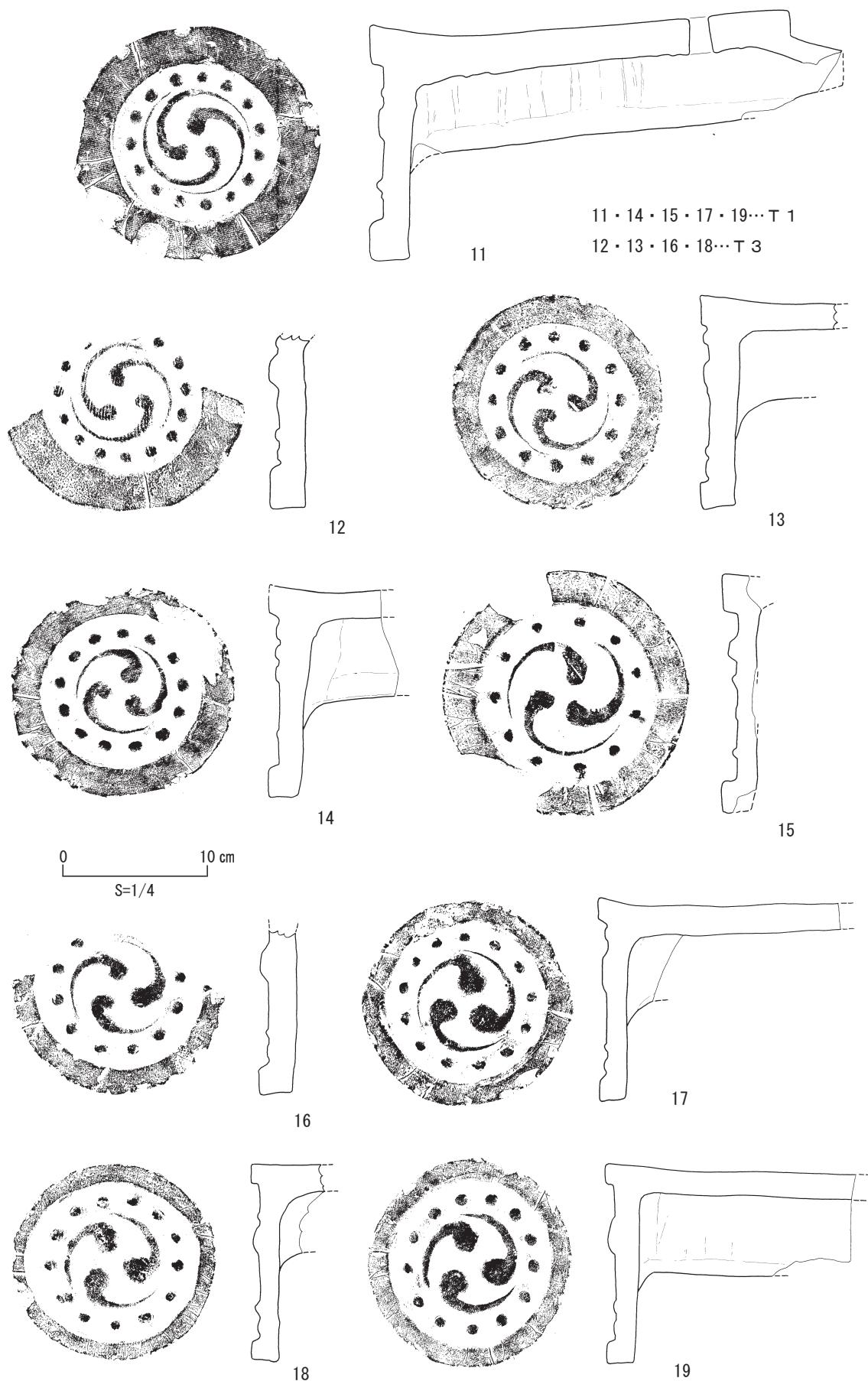
瓦

軒丸瓦（1～19）

1～19は軒丸瓦ですべて巴文である。中でも1～4は直径が20～21cmと大きいもので、出土地点から考えても天守に葺かれていた瓦である可能性が高い。1～3は左巻き、4は右巻きである。2、3の珠文数は16個である。5～8は直径が13～14cm内外のもので、細めの巴文をもつものである。5、8が右巻き、6、7が左巻きである。5の巴文は巴の頭部分が接し、尾の部分も長く伸びている。9、



第13図 天守台周辺調査区出土遺物1 ($S=1:4$)



第14図 天守台周辺調査区出土遺物2 (S=1:4)

10 は右巻き三巴で、巴がやや離れたものである。9 が直径 16 cm、10 が直径 16.5 cm をはかる。

11、12 は右巻き巴文軒丸瓦で、11 が直径 16.2、12 が直径 17 cm をはかる。11 は全体のよく分かるもので、釘穴がみられる。内面には、布目や、コビキ B の痕跡がみられる。13、14 はいずれも左巻き巴文で、13 が直径 14.8 cm、14 が 14.5 cm をはかる。15 は巴文や珠文が他のものに比べて立体的である。巴文は左巻きである。

16～19 はやや大きめの巴文をもつ軒丸瓦である。珠文数は 12～13 個でいずれも左巻きである。17 は巴がやや立体的である。18 の外面にはキラコが付着している。19 の内面には布目がみられる。

軒平瓦 (20～26)

20・21 は中心飾りが三葉桐葉文で、唐草文は二転である。20 の桐葉は立体的であるが、21 は凸線で描かれている。外面・内面ナデ。瓦当面の縁を面取りしており、古相を呈している。いずれも大型のもので、これまでの出土例から天守等の大型の建物に葺かれていた瓦と推測される。22 も三葉の中心飾りであるが、唐草文が二重の凸線で描かれているものである。23 は中心飾りが宝珠である。瓦当面の縁を面取りしている。24・26 の中心飾りは三巴文である。いずれも左巻きで、唐草文は 26 は三転する。25 は中心飾りが細い三葉文である。全体が黄褐色を呈していることから、火を受けた可能性が高い。

これらの軒平瓦は過去の調査で出土しているタイプのものである。

その他の瓦 (27～33)

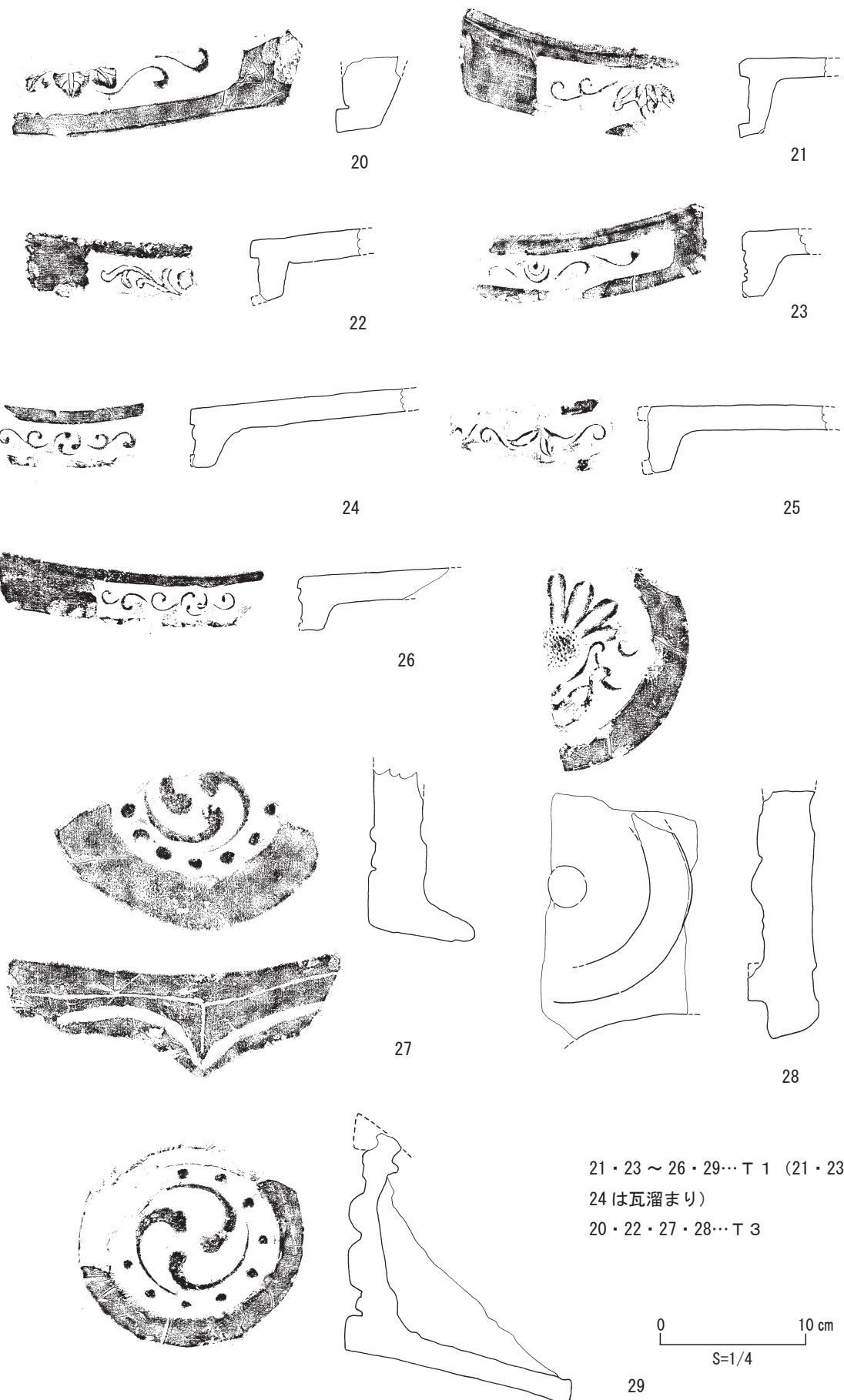
27 は隅角の軒丸瓦で、底部には外形に沿ったヘラ描の線がみられ、さらにその線に沿った形で細い線刻がみられる。28 は瓦当部分のみの出土であるが、鬼瓦の一部と推測される。瓦当面には菊花文を少し崩したような文様が施されている。この文様をもつ瓦は平成 19 年度の多門櫓腰石垣の調査において出土している^(註1)。今回も同じ天守台の周辺であることから、天守台周辺の建物に使われることの多い瓦である可能性が考えられる。29 は鳥衾瓦で、内面に布目の痕跡がみられる。30 は鳥の頭部を表現したもので、裏面に剥離痕があることから、鬼瓦等に付けられていた文様の一部と推測される。嘴を欠いているが、森家の家紋である鶴の可能性も考えられる。31・32 は鰐瓦の一部で、いずれも鱗が半円形の型押しで表現されている。32 は眼の部分か。33 は断面形が波状を呈するもので、道具瓦の一種と考えられる。

(3) まとめ

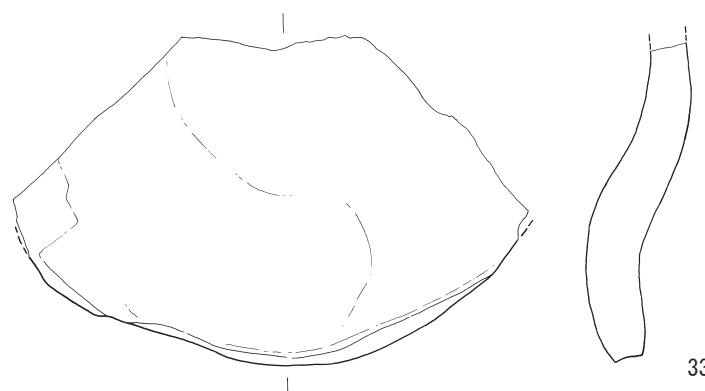
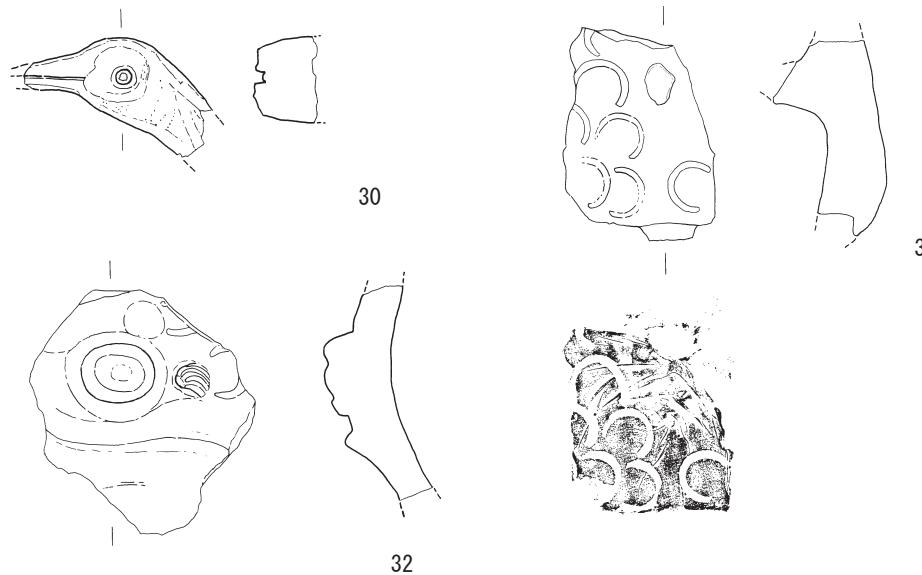
天守台周辺部の調査では、天守台石垣の基底部の構造を確認することができた。天守台石垣の基底部は栗石の上に直接据えられており、天守台の北側及び東側では栗石が天守台石垣根石の前面 1m あまりのところまで敷き詰められていた。天守台の西側では埋没石垣の裏込めの栗石が天守台石垣根石の下まで続いていることが明らかとなった。

また、調査区 1 の堆積状況から、築城以前の鶴山の開発の一端を伺い知ることができた。

遺物は瓦がほとんどで、陶磁器の出土は少ない。これは平成 19 年度の第 11 次調査において実施した天守曲輪内部の調査でもみられた傾向である。また、大型の軒瓦が少なからず出土しているのも特徴であり、天守や本丸御殿に葺かれた瓦であったことが推測される。また、瓦の一部は焼けたものもある



第15図 天守台周辺調査区出土遺物3 (S=1:4)



30…T 3
31～33…T 1 (32・33は瓦溜まり)

0 10 cm
S=1/4

第 16 図 天守台周辺調査区出土遺物 4 (S=1:4)

ことから、文化 6 年（1809）に本丸御殿が焼失した際に使用されていた瓦が部分的に含まれていると考えられる。

軒丸瓦については、巴文の頭が小さく、尾が長くのびる古相のものから、頭が大きく、尾が短い新相を呈するものまで様々である。軒平瓦は、20 のように丁寧なつくりのものは創建期に遡る可能性が考えられるが、その他のものについてはやや時代が下がると推測される。また、鬼瓦の一部と考えられる 30 は、鶴丸の文様と考えられることから、森家時代に遡る資料である可能性が考えられる。

註

（註 1） 豊島雪絵編 2016 『史跡津山城跡 保存整備事業報告書Ⅱ』 p.47 第 15 図 16

第3節 切手門の調査（第12次（平成20年度）・第13次（平成21年度））

切手門は、津山城の二の丸大手筋に位置する門である。四足門を北から南方向にくぐり、そこから鉤の手状に向きを変え、西から東に向かって進んだところにそびえ立つ。門の構造は、一階が門、二階が櫓となっている、いわゆる櫓門である。調査は、門の構造及び規模の確認と背後の雁木の状況の確認を目的として実施した。

（1）調査の概要

調査区1（第17図）

切手門の櫓台部分に設定した調査区である。石垣天端面まで表土を除去すると、石垣の裏込石、礎石、溝、土坑2基、根太痕跡が検出された。

礎石

配置は明確ではなく、櫓台の中央部で1か所確認された。径約1.6mの不整円形の土坑を掘り、河原石で根固めをしたのち、上面が平らな石を据えている。

溝1

調査区東辺中央から西方向へ流れ、1.5mほどのところで北に折れる。北に折れた溝は5mほど北に延び、櫓台北側石垣にある排水口から調査区2の雨水集水樹状遺構へと排水される。溝の幅は50cm、深さは約40cmである。溝の中には一部豊島石製のU字溝が遺存していた。

絵図等によると、切手門櫓の南東側には多門櫓である弓櫓が接続して建てられていたため、溝1は弓櫓から切手門櫓へと連続する雨落溝と推測される。

土坑1

調査区中央からやや東寄りで櫓台南石垣から1.8mの位置で検出された。1辺約1mの隅丸方形で、深さ10cmをはかる。時期・性格等は不明である。

土坑2

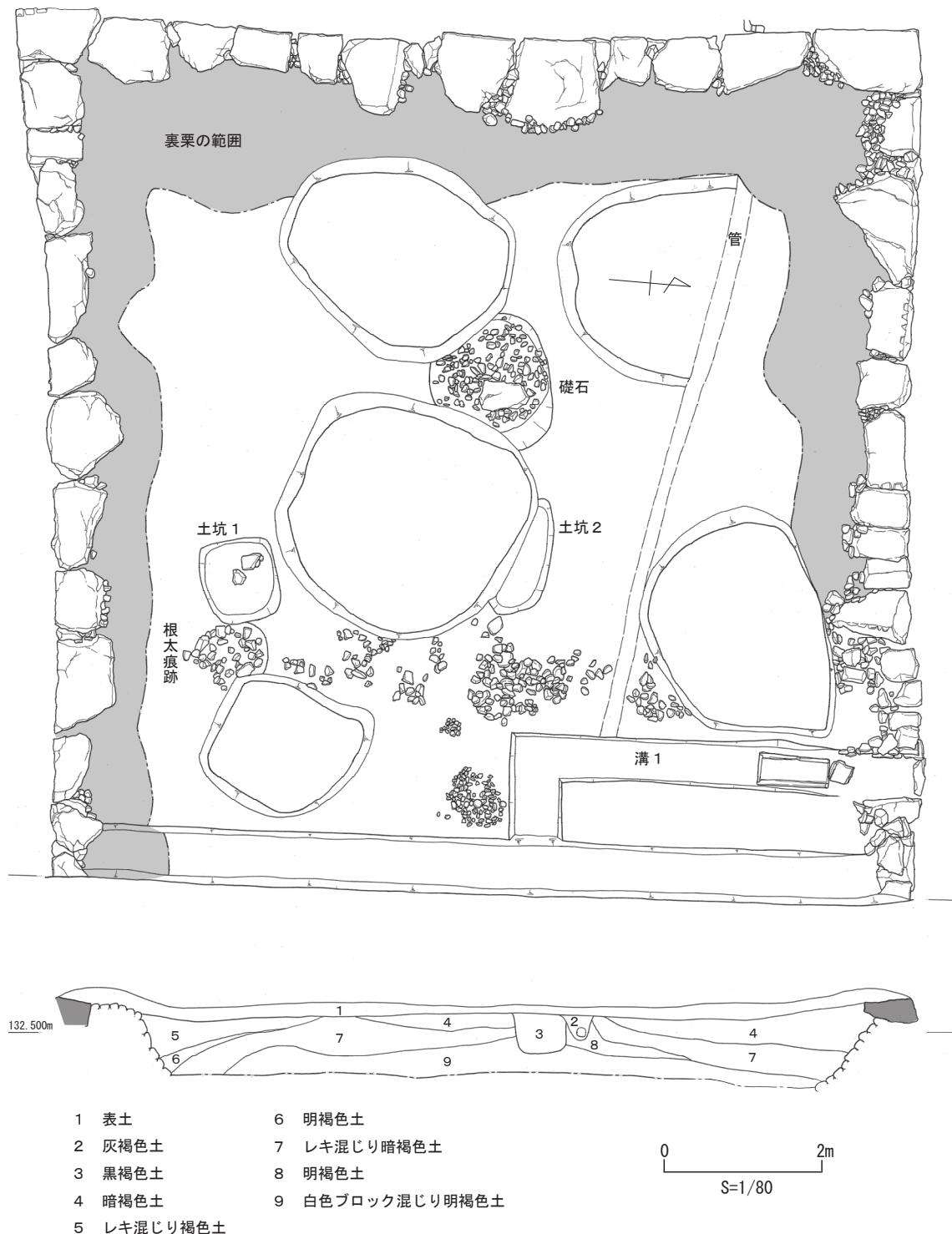
土坑1の2.6m北、調査区中央からやや東寄りで櫓台南石垣から5.5mの位置で検出された。長径1.5mの橢円形で、深さ30cmをはかる。時期・性格等は不明である。

根太痕跡

櫓台西石垣から7.5mの位置に拳大から人頭大の河原石が、幅1mで南北方向に直線的に集積している。集積は、溝1に西に隣接し、南北方向の溝1と平行することから、切手門櫓の根太と推定される。

調査区2（第18図）

切手門の南側で切手門櫓台北石垣に沿って設定した調査区である。表土を除去すると、礎石、溝、雨



第 17 図 切手門調査区 1 平面・断面図 (S=1:80)

水集水構造遺構、後背部の雁木が検出された。

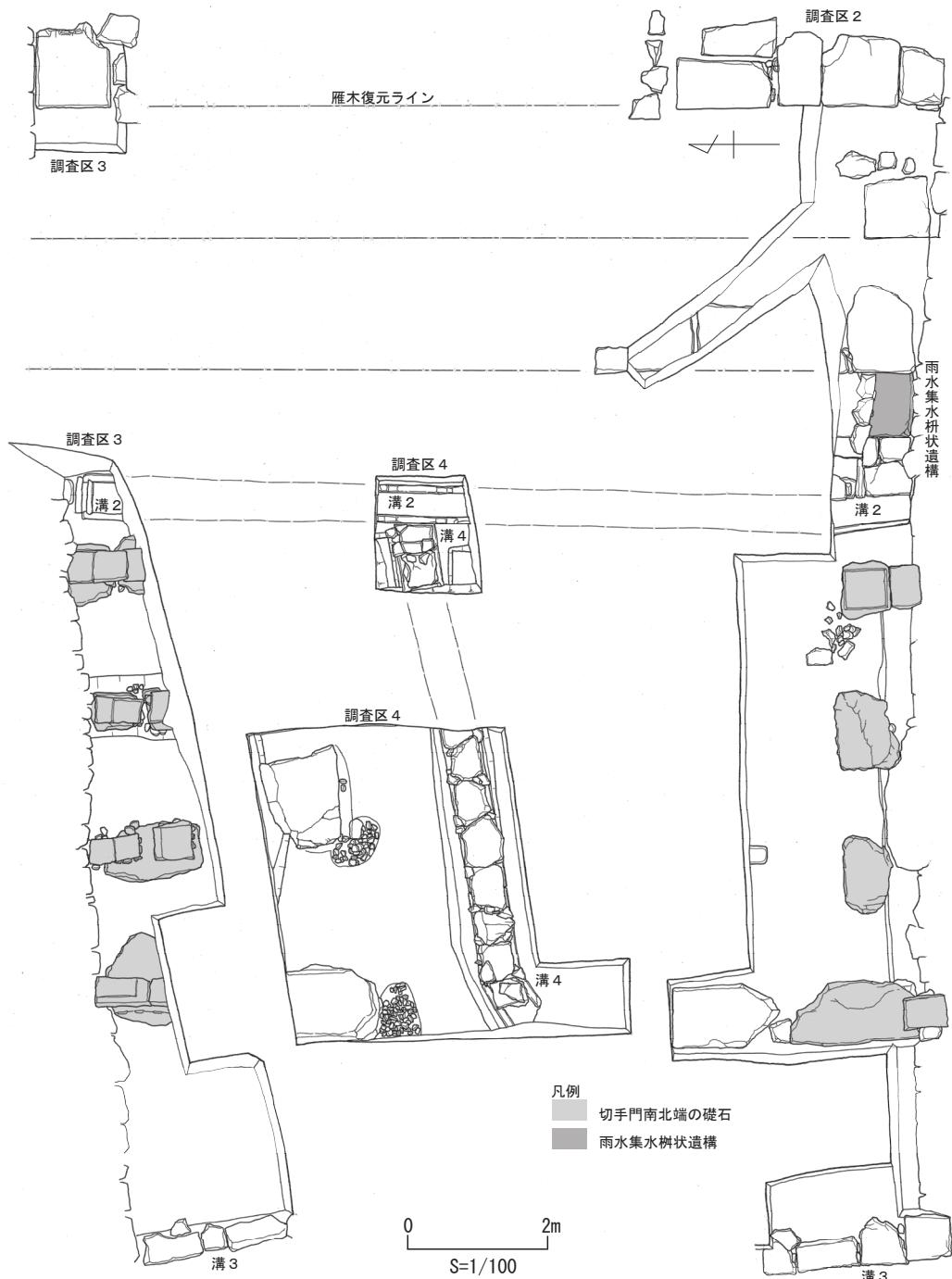
礎石

調査区南端の切手門櫓台北石垣に沿って上面が平らな石が、東西方向に 4 石並んで検出された（第 18 図アミ掛け部分）。西端の石は上方を東西 50 cm、南北 55 cm の方形に加工されている。4 石の上面

の標高は概ね等しく、芯々距離は 2.0m (約 1 間) である。

雨水集水枠状遺構

調査区南端の切手門櫓台北石垣にある調査区 1 の溝 1 排水口の直下に位置する。南・北・東の 3 側面が残る枠状遺構が検出された。南辺は切手門櫓台北石垣面を、北辺は凝灰岩 4 石の石列を、東辺は雁木の段差を側面としている。西辺は開口しており、東壁から西へ 90 cm ほどで 1 段下がり、さらに西 85 cm で溝 2 の東側壁天端に接続する。溝 1 からの排水を受け、溝 2 へ排水する集水枠と推定される。



第 18 図 切手門調査区 2～4 平面図 (S = 1 : 100)

溝2

調査区南端で雨水集水枠状遺構の西に接する位置に検出された。南北方向に延びる豊島石製U字溝で、南端は切手門櫓台北石垣に接し、東壁の一部が壊れたのち凝灰岩に置き換えられている。溝底部の勾配から、雨水集水枠状遺構の排水を受け、北方向に流す構造であったことがわかる。また、礎石との位置関係から、切手門の雨落溝も兼ねるものと推定される。

溝3

調査区西端で切手門櫓台西石垣の延長線上で検出された。南北方向に延びる凝灰岩の石組溝で、西壁側は小ぶりな石で組み直されているが、東壁側の石組は江戸期のものが遺存している。

雁木

調査区東側で検出された。幅1m前後、奥行き1.1m前後の石材が使われており、1段の幅は下から1段目が90cm、2段目以上は1.9m、段差は30cmをはかる。下から3段目には石材の抜き取りが見られる。検出された雁木は現在の雁木と比べると1段の幅や段差、石材の法量が約2倍の大きさである。堆積状況を観察したところ、現在の雁木は下半部を中心に、廃城後に築城時の雁木を埋めて勾配を緩やかに改変して造られている。築城時の雁木は廃城後の切手門撤去時に埋められており、埋土中には破壊された際の瓦等が多数含まれていた。

調査区3（第18図）

切手門の南側で到来櫓南石垣に沿って設定した調査区である。表土を除去すると、礎石、溝、後背部の雁木が検出された。

礎石

調査区北端の到来櫓南石垣に沿って上面が平らな石が、東西方向に4石並んで検出された（第18図アミ掛け部分）。4石はいずれも大きく上面が平らな石の上に、方形に加工した石を置いており、芯々距離は2.0m（約1間）である。また、各礎石は調査区2で検出された礎石の北延長に位置する。

溝2

調査区2の溝2の北延長に位置する。豊島石製U字溝であり、到来櫓南石垣面の手前で小口に板状の豊島石を立て、溝端部としている。

溝3

調査区2の溝3の北延長に位置する。凝灰岩の石組溝であり、調査区2の溝3と同じく東壁側の石組が遺存する。

調査区4（第18図）

切手門中央の東西2か所に設定した調査区である。表土を除去すると、礎石と溝が検出された。

礎石

西調査区の北側で上面が平らな石が東西方向に2石ならんで検出された。西側の石は調査区2及び調査区3の西端の礎石の延長上に位置しており、切手門に伴う礎石と考えられる。東側の石は調査区2及び調査区3の中央2列の礎石の中間に位置する。

溝2

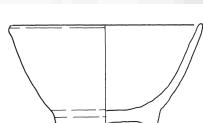
東調査区東端で検出された。調査区2及び調査区3の溝2の延長上に位置する。豊島石製U字溝で、調査区中央で溝4と接続する。溝2の西壁に穴をあけて溝4を取り付けている。溝2と溝4の底部のレベルはほぼ同じである。

溝4

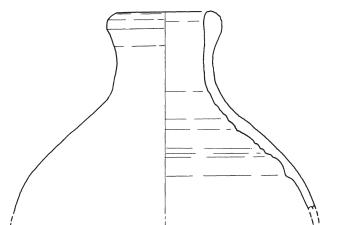
両調査区中央で検出された。溝2との接続部から西方向に6.5m流れ、南西に折れる。豊島石製U字溝で、溝蓋は溝2との接続部から西に約30cmまでは豊島石の板石、以西は凝灰岩の板石である。

(2) 出土遺物 (第19図～27図)

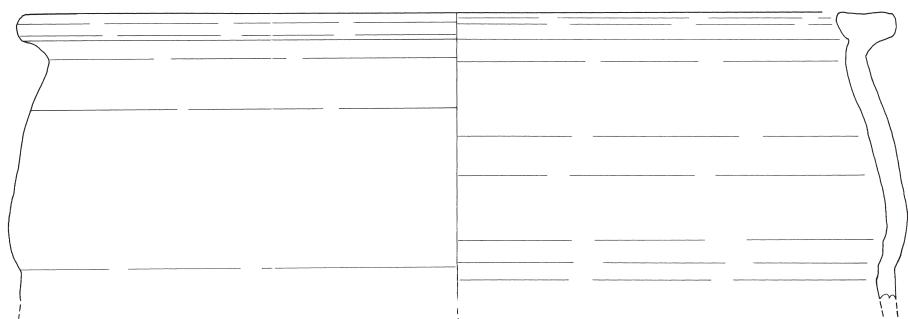
遺物は切手門跡に設定された各調査区において出土した。門の周辺の調査ではあるが、瓦だけでなく、



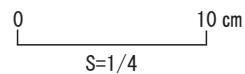
34



35



36



第19図 切手門調査区出土遺物1 (S=1:4)

陶磁器片も一定量出土している。

陶磁器（平成 20 年度調査出土）（34～36）

34 は、瀬戸美濃系の陶器碗で、高高台をもつ太白茶碗である。時期は 18 世紀末から 19 世紀前半のものと推測される。35 は鉄釉陶器の徳利で、側面には文字が描かれている。36 は大甕である。直径 46 cm をはかる。

陶磁器（平成 21 年度調査出土）（37～62）

37～41 は小壺である。38 もやや浅い小壺で、内面底部付近に四本足の動物が描かれている。39 は外面の側面に文字や、急須が描かれている。底部見込み部分には、「山久造」とある。40 は陶器の小壺で、梅の木と花が描かれている。41 は猪口で草木文が描かれている。これらの小壺は、いずれも幕末から近代にかけてのものと考えられる。

42～44、46 はほぼ同じ規模の小皿で、セットになるものと考えられる。いずれも平面正方形で、四隅が内側にすぼまる。42 と 43 の底面にはいずれも菊花文がみられ、44 にはうさぎの文様がみられる。45 の小皿には蝶の文様が三方向に描かれている。いずれも幕末から近代のものである。47 は肥前系磁器の染付鉢で、高台部分に蛇の目釉剥ぎがみられる。19 世紀前半に位置づけられる。51 は緑灰色を呈する陶器皿である。見込みには文字が描かれているが、判読できない。本丸御殿の調査により出土した類似品からは、「賄」の文字の可能性が考えられる^{（註1）}。52 は肥前系磁器鉢で、幕末頃のものと考えられる。53～56 は蓋である。56 は関西系の陶器蓋と考えられる。上面のみ釉がかかり、その上から鉄絵により文様が描かれている。53～55 はいずれも幕末～近代のものと考えられる。

57～62 の碗についても、幕末～近代にかけてのものと考えられる。

註

（註1）前掲『報告書Ⅱ』pp.61-62

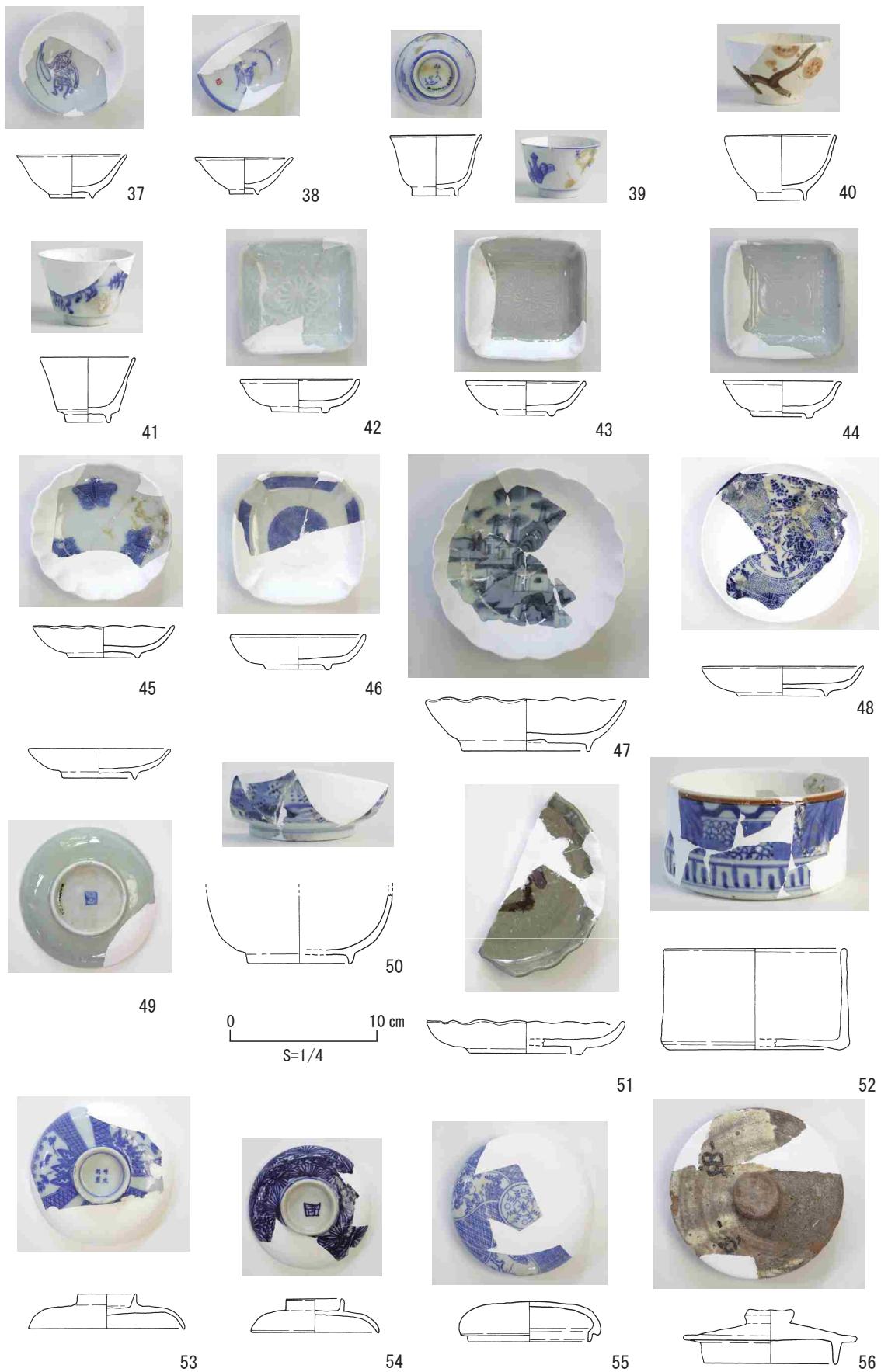
瓦（平成 20 年度調査出土）（63～103）

軒丸瓦（63～74）

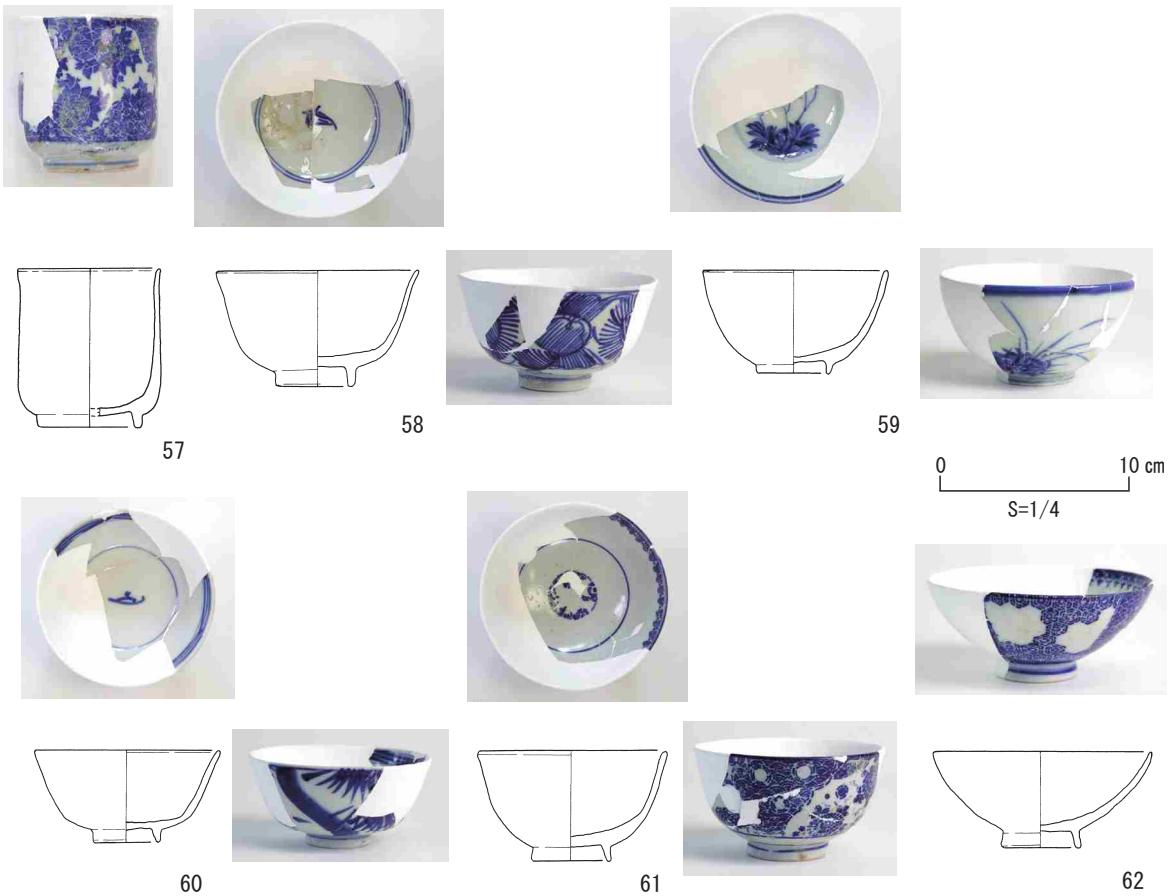
巴文軒丸瓦で、いずれも左巻きである。63～66 は直径 14.3～14.7 cm のもので、巴文の頭部分がやや大きい。珠文数は 12 個～16 個である。67～69 は直径 13 cm 内外をはかる小形のもので、文様区径が小さく、巴が細い。70、71 は 63～66 と同規模のものであるが、巴が細い。中でも 70 は巴の尾の部分が長く伸びる。72～74 は直径 14.2～14.8 cm のもので、巴の頭が大きいタイプのものである。珠文数は 16 個で、72、74 の外面にはキラコが付着している。

棟込瓦（75～94）

切手門調査区周辺から出土した棟込瓦はほとんどが菊花文で、外周部をもち、文様区に凸面の花弁を配するものと（75～86）、外周がなく、凹面の花弁を配するもの（87～94）の大きく 2 種類に分類される。前者は直径 8.7～9 cm、後者は直径 9.1～9.7 cm の範囲に入る。



第20図 切手門調査区出土遺物2 ($S=1:4$)



第 21 図 切手門調査区出土遺物 3 (S = 1 : 4)

軒平瓦 (95 ~ 98)

95 はこれまでの調査でも出土している三葉桐葉文である。天守台調査区 1 出土のもの（本書 p.32 第 15 図 21）と同じ文様である。96 は 3 本の軸の先端が 3 方向に枝分かれする三葉文である。97 の中心飾りは宝珠である。天守台出土のものと同様瓦当上縁を面取りしており、宝珠は大きく、唐草文は太い古相を呈している。98 の中心飾りは花文である。

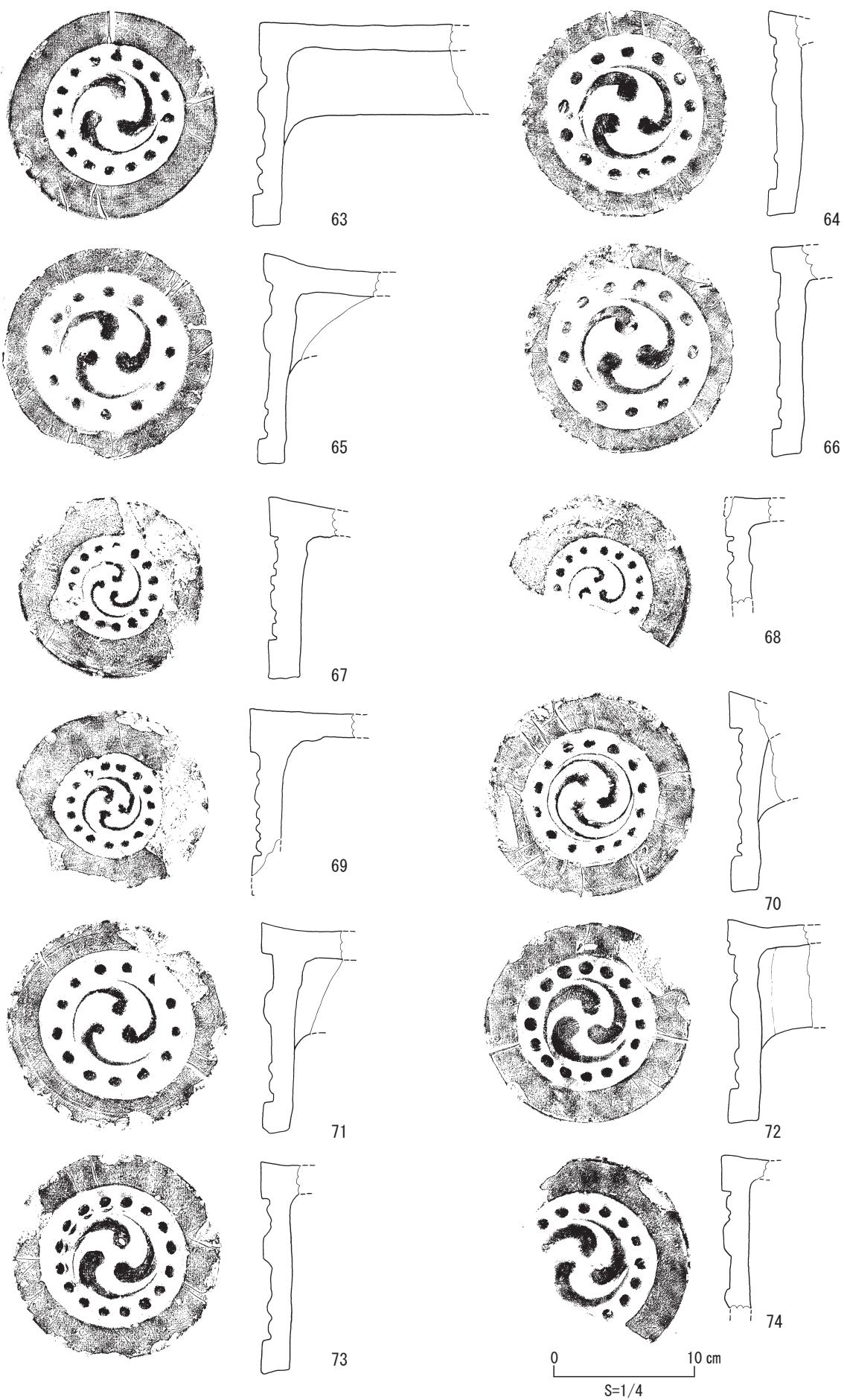
道具瓦 (99 ~ 103)

99 は鳥衾瓦で、瓦当文は左巻三巴文である。100 は鬼瓦の一部と考えられる。101、103 は鰐瓦である。101 は鰐の鼻先から口にかけての部分で、103 は鰐の一部と考えられる。102 は鬼瓦の先端にあたる部分である。

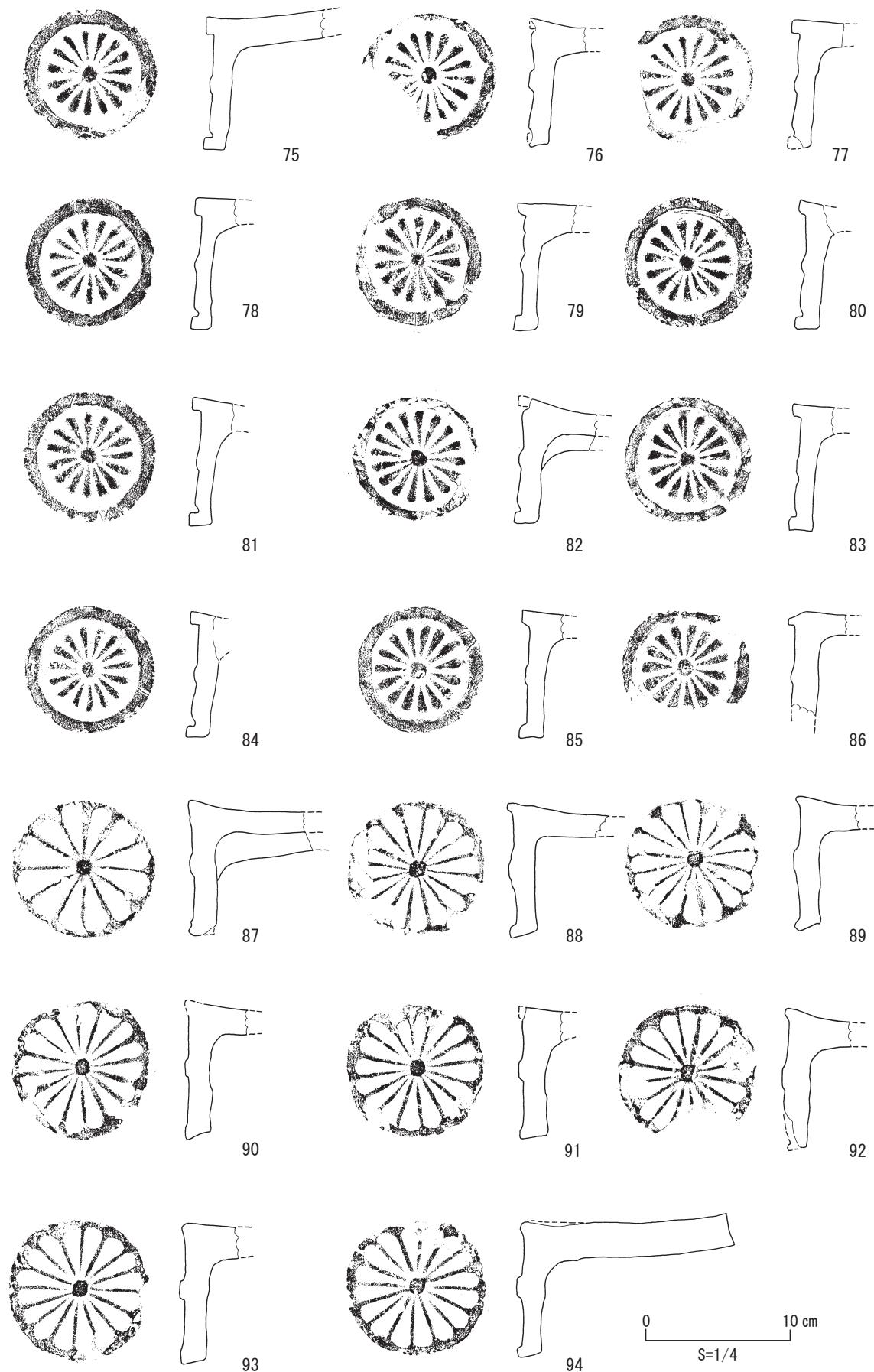
瓦 (平成 21 年度出土) (104 ~ 129)

軒丸瓦 (104 ~ 111)

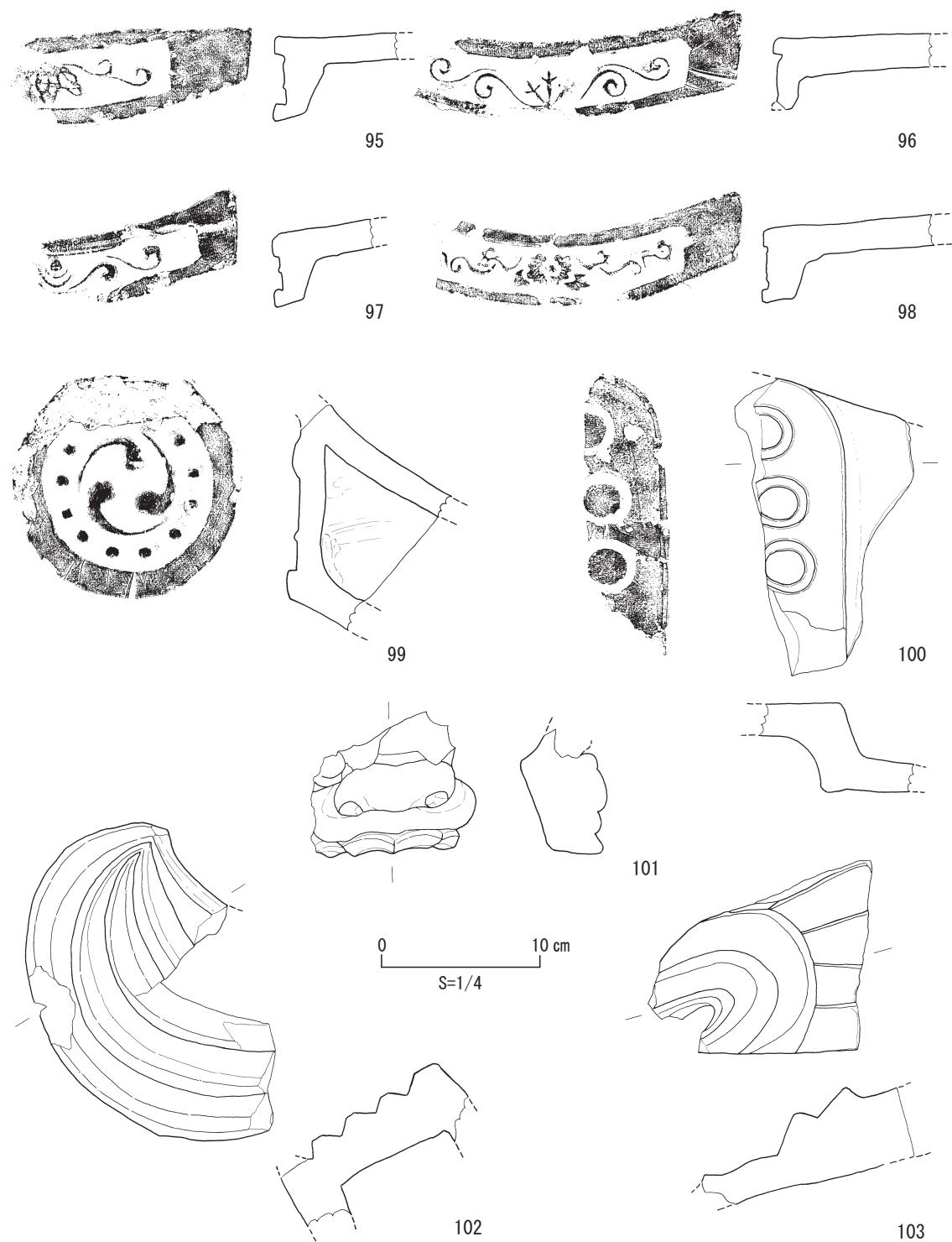
104 ~ 110 は巴文軒丸瓦で、左巻きである。104 の内面にはコビキ B がみられる。105 も同大のものである。106 は巴の尾が太い。104 ~ 106 の外面はキラコが付着する。104、106 の内面にはコビキ B が残る。107 は巴が細く、尾が長く伸びる。109 は巴の中心が広い。



第22図 切手門調査区出土遺物4 (S=1:4)



第23図 切手門調査区出土遺物5 (S=1:4)

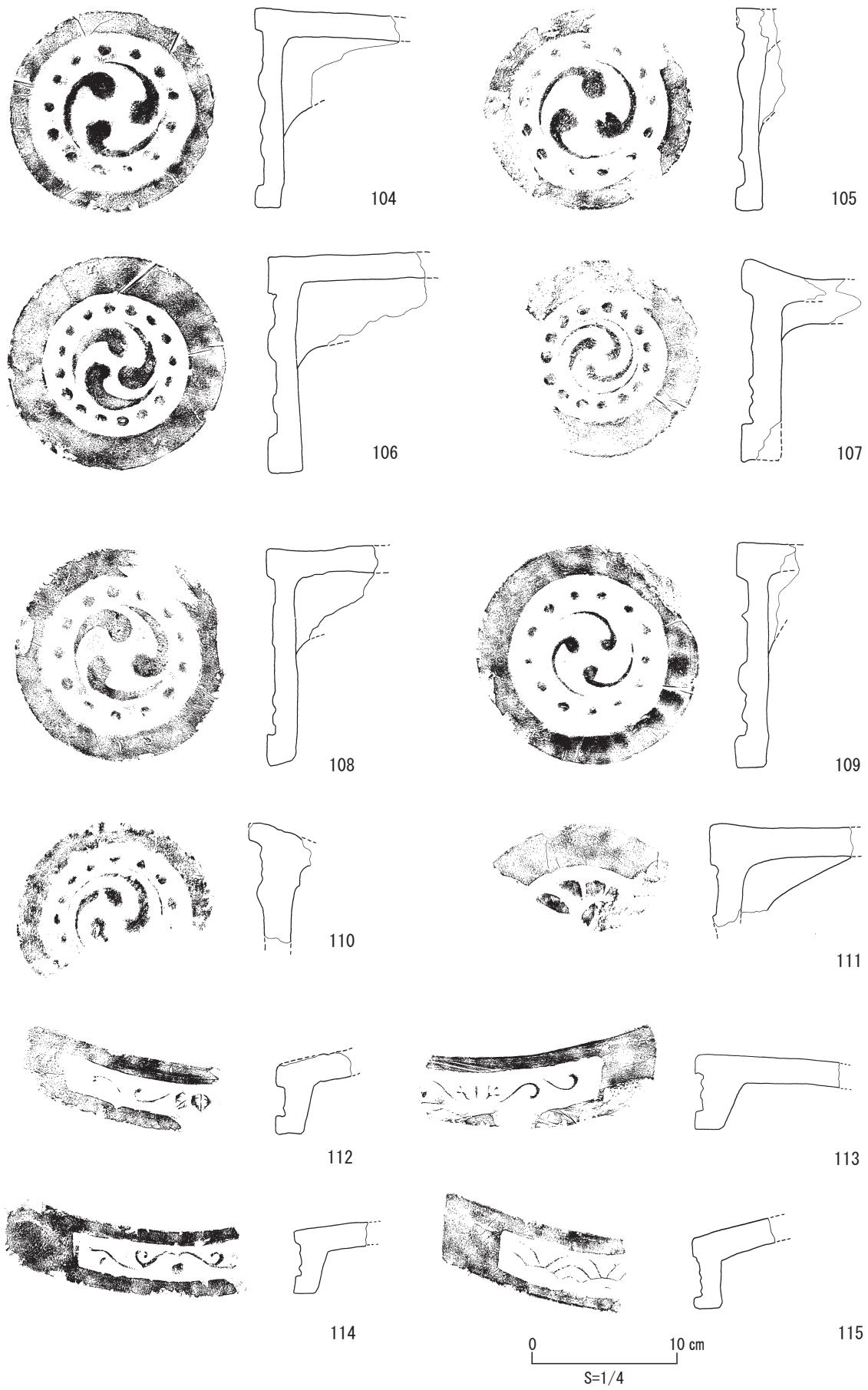


第24図 切手門調査区出土遺物 6 (S=1:4)

111は菊花文状の文様が部分的にみられるが全体の文様は不明。津山城ではこれまでに報告例がなく、今後の類例が待たれる。

軒平瓦 (112～115)

112は中心飾りの三葉桐葉文が立体的にみられる古相のものだが、天守台や本丸周辺で出土するも



第25図 切手門調査区出土遺物7 (S=1:4)

のと比べて小さく、桐葉も小さい。切手門周辺における最古段階の瓦と考えられる。瓦当上縁を面取りする。113は三葉文で、唐草文は二転する。瓦当上縁を面取りする。114は中心飾りが宝珠で、唐草文は二転半。同様の文様の中では唐草文が退化している。115の中心飾りは青海波文である。

棟込瓦（116～123）

116は、遺存状態が悪いが、揚羽蝶文の棟込瓦である。揚羽蝶文の棟込瓦はこれまでの調査では備中櫓周辺の調査でのみ出土しており、備中櫓以外の調査区からの出土例は初めてである。部分的に判明するのみだが蝶の表現は備中櫓出土のものと同じでかなり簡略化されている。大きさも備中櫓出土とほぼ同じであることから、同范である可能性も考えられる。117は外周部のない菊花文で、118～123は外周部をもつ菊花文の棟込瓦である。これまでの出土例からは、前者は直径9.3～9.7cm程度、後者は直径8.6～8.8cmの間におさまるものがほとんどであったが、123は、外周部をもつもので直径が9.6cmと大きく、これまであまり見られないタイプのものである。上面にはサクラの型押しがみられる。

道具瓦（124～129）

124、126、127、128は鬼瓦の一部と考えられる。125は鰐瓦の一部で、鼻先部分と考えられる。129は鰐瓦の尾鰭部分であり、残存長39cmをはかる。128は全体は不明だが、三葉葵文の鬼瓦と考えられる。外面にキラコが付着する。

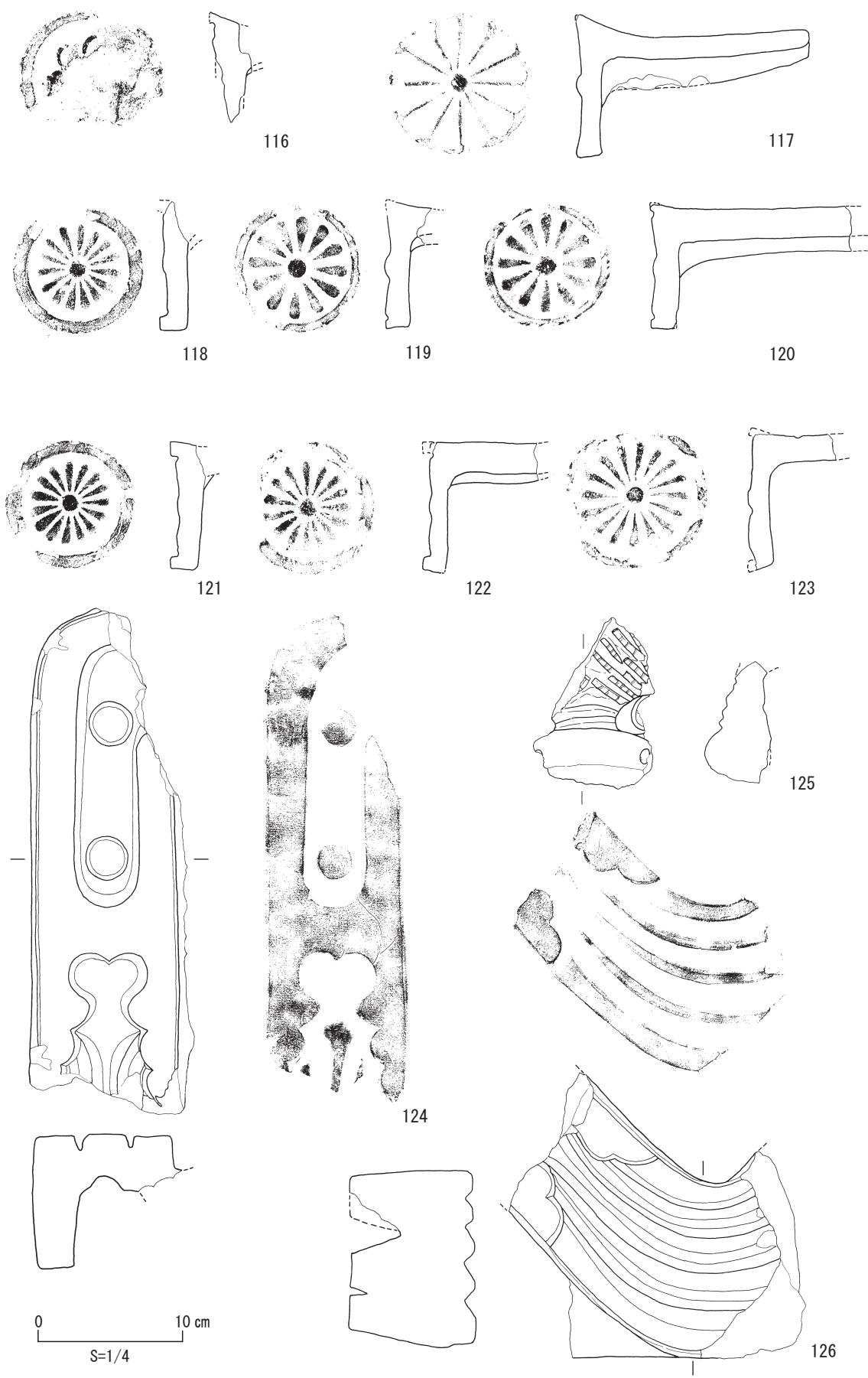
（3）まとめ

切手門の調査では、門の規模や雨水の排水設備、背後の雁木の状況を明らかにすることができた。櫓門は通常、梁間2間であるが、切手門は南北ともに礎石が4石確認できたことから、梁間3間の珍しい形式の門であったことが判明した。雨水は、弓櫓から切手門櫓台まで連続する雨落溝を流れ、切手門櫓台北面石垣の排水口から門背後の雁木上にある集水枡、続いて切手門雨落溝へと落ち、切手門雨落溝の中ほどで接続する溝により、西方向に排水されることが確認できた。背後の雁木は、下半部を中心に廃城後改変を受けており、築城時の雁木が切手門撤去の際に破棄された瓦等で埋まっていた。築城だけでなく廃城過程の一端も伺い知ることができた。

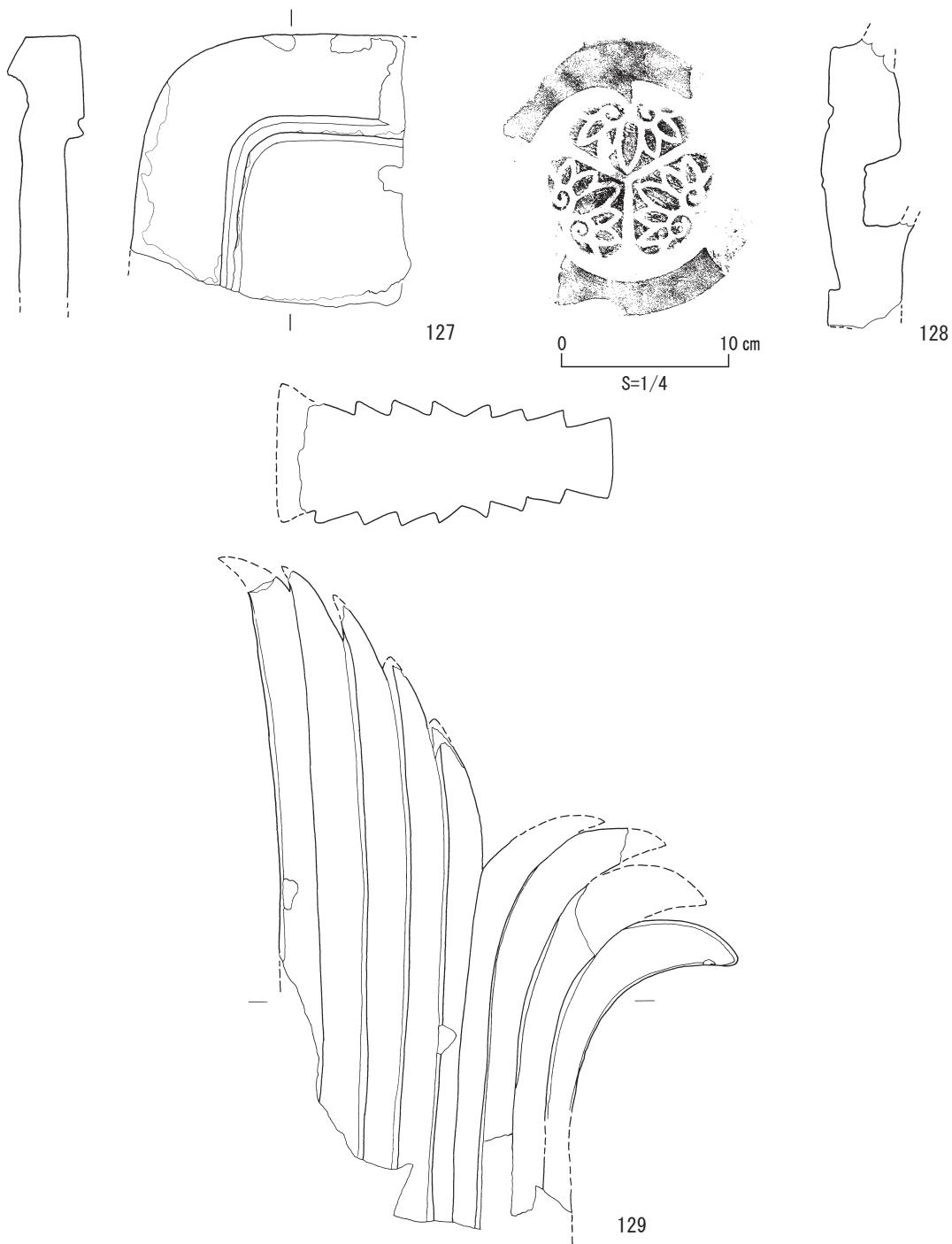
出土遺物は、陶磁器類や瓦が多数みられた。陶磁器類については、ほぼ幕末～近代にかけてのものであり、築城当時を伺わせる資料は皆無であった。陶磁器の産地については、肥前系のもの、瀬戸・美濃系のもの、関西系のものなどが含まれるが、中には在地でつくられたと考えられるものもある。門跡の調査であるため陶磁器の出土は限られている。

瓦は、コンテナ20箱分程度出土した。津山城跡の遺構は基本的に表土から20cm程度で検出され、埋土についても層位的に分類することができない。従って、瓦の文様で分類を試みなければならないが、今回はすべての瓦について分析することができなかった。津山城跡では本丸御殿の調査や天守台周辺の調査で瓦が一定量出土していることから、これらの資料を文様や同范関係など詳細に検討することが今後必要となってくるであろう。

また、軒瓦のほか、棟込瓦も数多く出土した。棟込瓦の中には、備中櫓以外ではじめて揚羽蝶文のものが出土した。揚羽蝶文は備中櫓のみで使用されていたと考えられていたが、切手門にも使用されてい



第26図 切手門調査区出土遺物8 (S=1:4)



第27図 切手門調査区出土遺物9 ($S=1:4$)

た可能性が高いことから、切手門の創建時期は備中櫓とあまり変わらない時期であった可能性が考えられる。これは、軒平瓦の中にも天守台周辺で出土するもの程の大きさではないが、築城期に近いと考えられる古い特徴をもつものが出土したことからも裏付けられる。

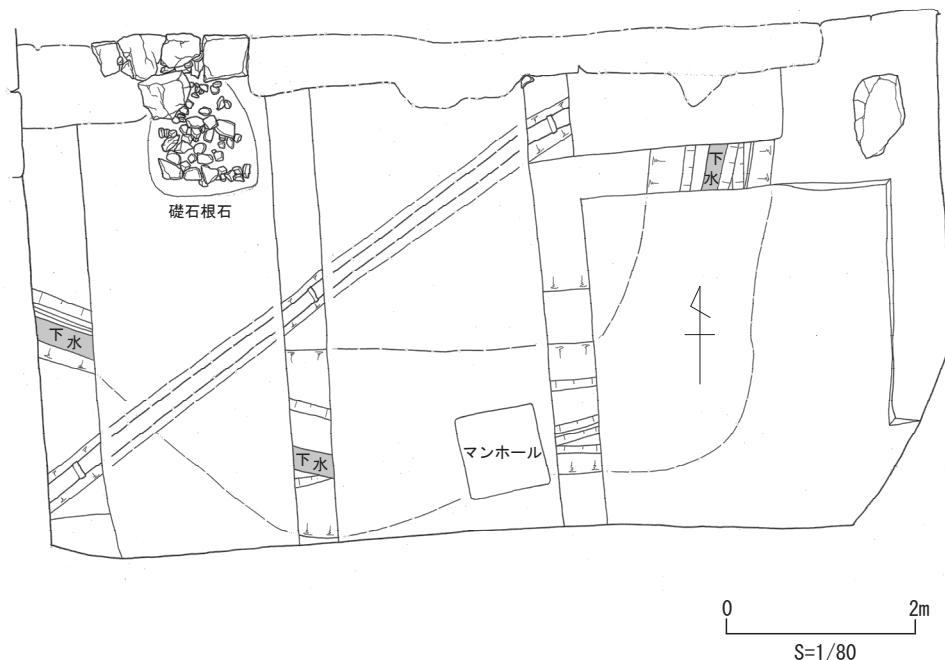
第4節 四足門の調査（第13次（平成21年度））

四足門は大手側の二の丸の入口に位置する門である。四足門の建物は、桁行1間、梁行1間の薬医門であり、廃城後の明治7年10月に津山市一宮にある中山神社の神門として移築され、現在でも往時の姿を見る事ができる。平成18年～19年の保存修理時に建物調査がおこなわれており、門扉のない城門であることが明らかとなっている。発掘調査は、門礎石などの基礎構造の確認を目的としておこなった。

（1）調査区の概要（第28図）

表土を除去したところ、下水道等の近現代の地下埋設物により、築城時の遺構面は大きく改変を受けていた。遺構は、調査区北西隅で集石が検出された。集石の南辺は90cmをはかり、門北側の雁木と平行になるように配置されている。周囲にはごく浅い掘方が確認された。門の本柱が見付け（正面から見た幅）2.1尺、見込み（正面から見た奥行き）1.1尺であることや、絵図等の位置関係から、集石は門礎石の根石と推定される。調査区からの出土遺物はみられなかった。

遺構面の改変により門の基礎構造の全容は明らかにすることできなかったが、基礎構造の一部を伺い知ることができた。



第28図 四足門調査区平面図 (S=1:80)

平成 20 年度天守台周辺発掘調査出土瓦観察表

番号	出土地	器種	文様・中心 飾	法量 (cm)			備考
				瓦当	長さ	幅	
1	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	21	(3.5)	(21)	外面・内面ナデ。
2	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	21	(3.9)	(21)	珠文 16 個か。内面ナデ。
3	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	20	(4.3)	(20)	珠文 16 個か。内面ナデ。
4	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	20	(3.5)	(20)	外面・内面ナデ。
5	天守 T 1 (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	14.6	(5.7)	14.6	珠文 16 個。外面・内面ナデ。巴文が 中心でくっつく。
6	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	13	(2.6)	(13)	珠文 14 個か。外面・内面ナデ。
7	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14	(3.4)	14	珠文 15 個。外面・内面ナデ。
8	天守 T 1 瓦溜まり (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	13	(4)	13	珠文 16 個。外面・内面ナデ。
9	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	16	(3)	16	珠文 15 個。外面・内面ナデ。
10	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	16.5	(4.7)	16.5	外面・内面ナデ。
11	天守 T 1 (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	16.2	(33)	16.2	珠文 15 個。外面ナデ、内面布目、ナデ、 コビキ B。釘穴あり。
12	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	右巻三巴	17	(2.8)	(17)	珠文 14 個。外面ナデ。内面ナデ。
13	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.8	(9.4)	14.8	珠文 12 個。外面・内面ナデ。
14	天守 T 1 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.5	(9)	14.5	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
15	天守 T 1 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	16.4	(2.8)	16.4	珠文 11 個。外面ナデ。
16	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.5	(2.5)	14.5	珠文 12 個か。外面・内面ナデ。
17	天守 T 1 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14	(16.9)	14	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
18	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	13.6	(5)	(13.6)	珠文 13 個。外面ナデ、キラコ付着。 内面ナデ。
19	天守 T 1 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	13.7	(17.3)	13.7	珠文 13 個。外面ナデ、内面布目、ナデ。
20	天守 T 3 (H20)	軒平瓦	三葉桐葉文	5.2) × (20)	(4.4)	(20)	唐草文二転。外面ナデ、ミガキ。瓦当 面縁を面取り。内面ナデ。
21	天守 T 1 瓦溜まり (H20)	軒平瓦	三葉桐葉文	5.3 × (15.5)	(6)	(15.5)	唐草文二転。外面ナデ。瓦当面縁を面 取り。内面ナデ。
22	天守 T 3 (H20)	軒平瓦	三葉	4.5 × (12)	(7.7)	(12)	唐草文四転。外面・内面ナデ。
23	天守 T 1 瓦溜まり (H20)	軒平瓦	宝珠	4.5 × (16.2)	(4.7)	(16.2)	唐草文二転。外面ナデ。内面ナデ・ミ ガキ。瓦当面縁を面取り。
24	天守 T 1 瓦溜まり (H20)	軒平瓦	左巻三巴	3.9 × (12.8)	(14.8)	(12.8)	唐草文二転以上。外面・内面ナデ。
25	天守 T 1 (H20)	軒平瓦	三葉	4.6 × (12)	(12.5)	(12)	唐草文二転以上。外面・内面ナデ。
26	天守 T 1 (H20)	軒平瓦	左巻三巴	3.7 × (18.5)	(10.5)	(18.5)	唐草文三転。外面・内面ナデ。
27	天守 T 3 (H20)	軒丸瓦 (隅角部)	右巻三巴	11 × (18.5)	(7.2)	(18.5)	内面ナデ。底部に外形に沿ったヘラ描 の線あり。
28	天守 T 3 (H20)	鬼瓦か	蓮華文	16	(16.8)	(10)	外面ナデ。内面ナデ。
29	天守 T 1 (H20)	鳥衾瓦	左巻三巴	16.1	(15.5)	16.1	外面ナデ。内面布目・ナデ。
30	天守 T 3 (H20)	鬼瓦か			(6.2)	(9.9)	鶴か。飾りの一部が剥離したのか。
31	天守 T 1 (H20)	鰐瓦			(11.1)	(8)	半円形の鱗文が型押しされている。
32	天守 T 1 瓦溜まり (H20)	鰐瓦			(12.8)	(11.8)	鰐の眼部分か。
33	天守 T 1 瓦溜まり (H20)	道具瓦			(17.4)	(27.2)	断面形波状。外面・内面ナデ。

平成 20・21 年度切手門出土陶磁器観察表

番号	出土地	器種	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
34	切手門 (H20)	陶器碗	10	5.2	5.5	瀬戸美濃系の高高台をもつ太白茶碗。外面・内面回転ナデ。
35	切手門 (H20)	陶器徳利	5		(12.5)	鉄釉陶器。側面に文字。外面・内面回転ナデ。
36	切手門 (H20)	陶器甕	46		(15)	大型の甕。外面・内面回転ナデ。
37	切手門 (H21)	磁器小壺	7.4	2.9	2.9	内面に呉須で「鈴□」の文字。
38	切手門 (H21)	磁器小壺	6.6	1.9	2.5	内面に動物（鹿？）の絵。
39	切手門 (H21)	磁器小壺	6.2	3	4.1	外面：「満月□芝依□」の文字。底部外面に「山久造」文字あり。
40	切手門 (H21)	陶器小壺	7.6	3.4	4.4	外面に梅。
41	切手門 (H21)	磁器小壺	6.4	2.9	4.4	外面に草。
42	切手門 (H21)	磁器小皿	8	3.8	2.2	内面に菊花文。
43	切手門 (H21)	磁器小皿	8	3.8	2.3	内面中心に菊花文。
44	切手門 (H21)	磁器小皿	8	4.2	2.4	内面にうさぎの絵。
45	切手門 (H21)	磁器小皿	9.6	4.8	2.1	内面に蝶の絵。
46	切手門 (H21)	磁器小皿	9.1	4.2	2.3	内面に円形の文様。
47	切手門 (H21)	磁器皿	13.6	8.7	3.5	肥前系磁器。底部蛇の目釉剥ぎ。
48	切手門 (H21)	磁器皿	11	6	2	
49	切手門 (H21)	磁器皿	9.6	4.9	1.9	
50	切手門 (H21)	磁器碗	12.6 (最大径)	7.2	(4.6)	外面に草花文。
51	切手門 (H21)	陶器皿	13.5	7.8	2.2	内面に「賄」の文字か。
52	切手門 (H21)	磁器鉢	12.3	11.5	6.8	肥前系磁器か。
53	切手門 (H21)	磁器蓋	10.6	4 (把手)	2.4	摘み内に文字「□□軒製」。
54	切手門 (H21)	磁器蓋	8.6	4	2.3	摘み内に文字。
55	切手門 (H21)	磁器蓋	8.3	9.6 (最大径)	2.7	印籠蓋。
56	切手門 (H21)	陶器蓋	9.2	11.8 (最大径)	3.6	関西系陶器。鉄絵が施される。
57	切手門 (H21)	湯飲茶碗	7.5	5.4	8.2	外面に青海波文、花文。
58	切手門 (H21)	磁器碗	16	4.4	6	
59	切手門 (H21)	磁器碗	9.7	3.8	5.4	外・内面に草花文。底部に記号。
60	切手門 (H21)	磁器碗	9.6	3.5	4.8	
61	切手門 (H21)	磁器碗	10	5	5.8	外面に青海波文、花文。
62	切手門 (H21)	磁器碗	11.5	4.3	5	外面に青海波文、亀甲文。

平成 20・21 年度切手門出土瓦観察表

番号	出土地	器種	文様・中心 飾	法量 (cm)			備考
				瓦当	長さ	幅	
63	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.3	(15.7)	14.3	珠文 16 個。外面ナデ、ミガキ。内 面ナデ、コビキ B。
64	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.4	(2.4)	14.4	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
65	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.7	(8.5)	14.7	珠文 12 個。外面・内面ナデ。
66	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.7	(3.4)	14.7	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
67	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	12.8	(5)	12.8	珠文 15 個。外面・内面ナデ。
68	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	13	(3.3)	13	珠文 16 個か。外面・内面ナデ。
69	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	13.1	(7.4)	13.1	珠文 15 個。外面・内面ナデ。
70	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.2	(4)	14.2	珠文 14 個。外面・内面ナデ。
71	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.8	(5.7)	14.8	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
72	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.4	(6)	14.4	珠文 16 個。外面ナデ、キラコ付着。 内面ナデ。
73	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.8	(2.8)	14.8	珠文 16 個。外面・内面ナデ。
74	切手門 (H20)	軒丸瓦	左巻三巴	14.2	(3.4)	(7.1)	珠文 16 個か。外面ナデ、キラコ付着。 内面ナデ。
75	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9	(8.2)	9	外面・内面ナデ。
76	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.9	(4.1)	8.9	外面・内面ナデ。
77	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9	(3.6)	9	外面・内面ナデ。
78	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9	(3.2)	9	外面・内面ナデ。
79	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.7	(4.1)	8.7	外面・内面ナデ。
80	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.9	(2.5)	8.9	外面・内面ナデ。
81	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.8	(2.9)	8.8	外面・内面ナデ。
82	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.7	(5.5)	8.7	外面・内面ナデ。
83	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.7	(3)	8.7	外面・内面ナデ。
84	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.7	(2.2)	8.7	外面・内面ナデ。
85	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.8	(3)	8.8	外面・内面ナデ。
86	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	8.8	(4.4)	8.8	外面・内面ナデ。
87	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.3	(8.5)	9.3	外面・内面ナデ。
88	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.4	(7)	9.4	外面・内面ナデ。
89	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.3	(4.4)	9.3	外面・内面ナデ。
90	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.4	(4.4)	9.4	外面・内面ナデ。
91	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.1	(3.2)	9.1	外面・内面ナデ。
92	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.7	(4.5)	9.7	外面・内面ナデ。
93	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.6	(4)	9.6	外面・内面ナデ。
94	切手門 (H20)	棟込瓦	菊花文	9.4	(15)	9.4	外面ナデ・内面ナデ、コビキ B。
95	切手門 (H20)	軒平瓦	三葉桐葉文	5.2 × (15)	(7.8)	(15)	唐草文二転。凸面ナデ。
96	切手門 (H20)	軒平瓦	三葉	4.7 × (20.5)	(10)	(20.5)	唐草文二転。凸面・凹面ナデ。
97	切手門 (H20)	軒平瓦	宝珠	4.6 × (12.5)	(6.2)	(12.5)	唐草文二転。瓦当上縁面取り。凸面・ 凹面ナデ。

98	切手門 (H20)	軒平瓦	花文	4.5 × (18.5)	(10.5)	(18.5)	唐草文三転。凸面・凹面ナデ。
99	切手門 (H20)	鳥衾瓦	左巻三巴文	14.2	(10.1)	14.2	外面・内面ナデ。
100	切手門 (H20)	鬼瓦		(18.8) × (11)			3つの円が描かれている。外面・内面ナデ。
101	切手門 (H20)	鰐瓦		(9) × (10.4)			鰐の中心部分破片。
102	切手門 (H20)	鬼瓦		(19.6) × (15.6)			外面ナデ、内面板ナデ。
103	切手門 (H20)	鰐瓦		(12) × (29)			鰐の一部。外面・内面ナデ。
104	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	13.5	(10)	13.5	珠文 13 個。外面ナデ、キラコ付着。内面ナデ、コビキ B。
105	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	13.6	(3.3)	13.6	珠文 13 個。外面ナデ、キラコ付着。内面ナデ。
106	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	14.6	(10.8)	14.6	珠文 16 個。外面ナデ、キラコ付着。内面ナデ、布目、コビキ B。
107	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	13.7	(8.2)	13.7	15 個。外面・内面ナデ。
108	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	14.6	(7.8)	14.6	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
109	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	15.3	(4.3)	15.3	珠文 13 個。外面・内面ナデ。
110	切手門 (H21)	軒丸瓦	左巻三巴	13	(4.8)	13	珠文 16 個か。外面・内面ナデ。
111	切手門 (H21)	軒丸瓦	菊花文か	15.6	(9.7)	15.6	外面ナデ、ミガキ。内面ナデ、コビキ B。
112	切手門 (H21)	軒平瓦	三葉桐葉文	4.6 × (13)	(5.6)	(13)	唐草文二転。凸面ナデ。瓦当上縁面取り。
113	切手門 (H21)	軒平瓦	三葉文	5 × (16)	(10)	(16)	唐草文二転。凸面ナデ、ミガキ。凹面ナデ。瓦当上縁面取り。
114	切手門 (H21)	軒平瓦	宝珠	4.2 × (15.5)	(5)	(15.5)	唐草文二転半。凸面・凹面ナデ。
115	切手門 (H21)	軒平瓦	青海波文	4.7 × (12.5)	(5.6)	(12.5)	凸面・凹面ナデ。
116	切手門 (H21)	棟込瓦	揚羽蝶	9.6	(2.7)	9.6	外面・内面ナデ。
117	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	9.7	(16.1)	9.7	外面・内面ナデ。
118	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	8.8	(2)	8.8	外面・内面ナデ。
119	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	8.8	(3.1)	8.8	外面・内面ナデ。
120	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	8.6	(13.9)	8.6	外面・内面ナデ。
121	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	8.6	(2.4)	8.6	外面・内面ナデ。
122	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	8.9	(8)	8.9	外面・内面ナデ。
123	切手門 (H21)	棟込瓦	菊花文	9.6	(6.4)	9.6	外面・内面ナデ。外面にサクラの型押しあり。
124	切手門 (H21)	鬼瓦		(34.7) × (11.3)			外面ナデ・ミガキ、内面ナデ。
125	切手門 (H21)	鰐瓦		(11.8) × (8.4)			鰐の顔の一部。外面ナデ・ミガキ、内面ナデ。
126	切手門 (H21)	鬼瓦		(19.5) × (20.7)			外面ナデ・ミガキ、内面ナデ。
127	切手門 (H21)	鬼瓦		(16) × (16.9)			外面・内面ナデ。
128	切手門 (H21)	鬼瓦か	三葉葵文	(17.8) × (16.2)			外面キラコ付着。内面ナデ。
129	切手門 (H21)	鰐瓦		(39) × (27.2)			鰐の尾鰐部分。

写真図版 1 天守台周辺調査



写真図版2 天守台周辺調査

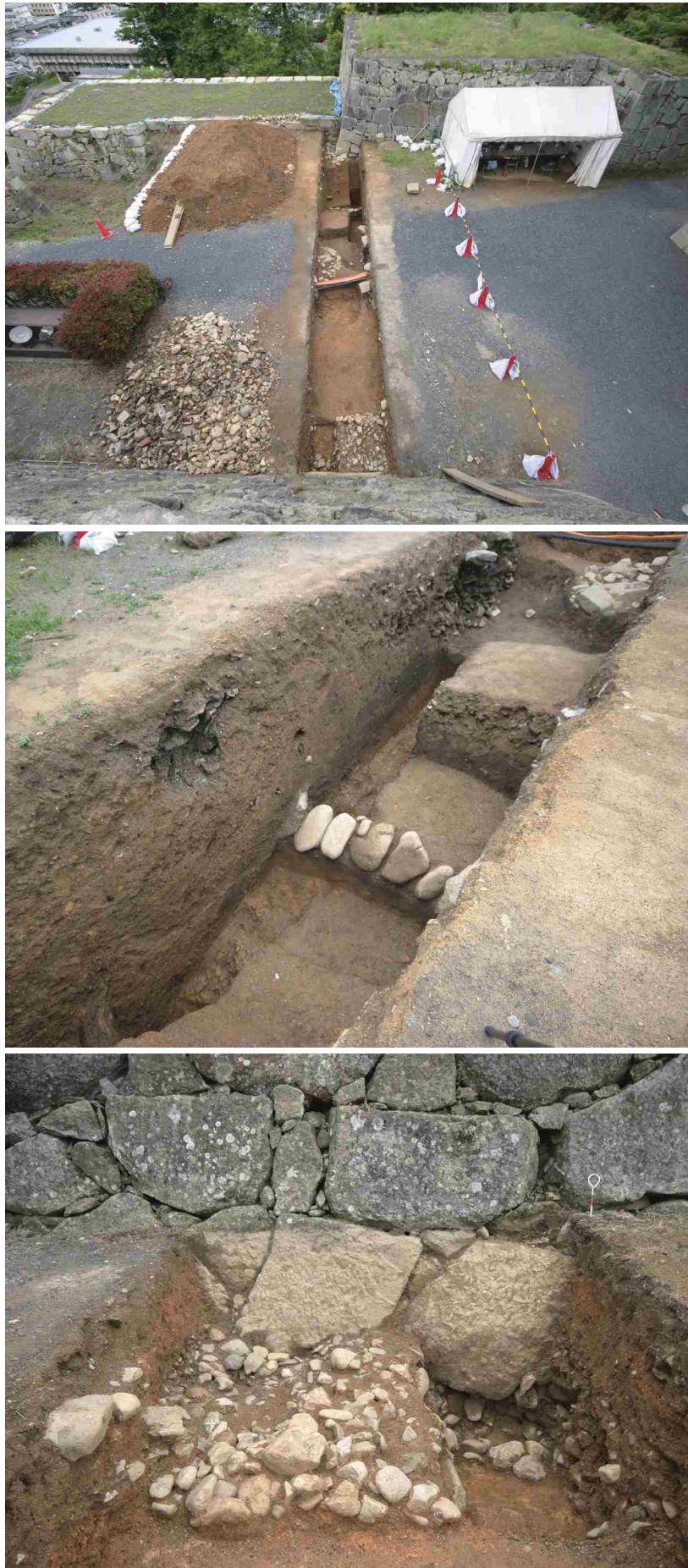


1. 天守台調査区1 航空写真
(上が北)



2. 天守台調査区1 全景
(南から)

写真図版3 天守台周辺調査



写真図版4 天守台周辺調査



1. 天守台調査区2 航空写真
(下が北)



2. 天守台調査区2 全景
(東から)



3. 天守台調査区2 雨落溝検出
状況 (西から)

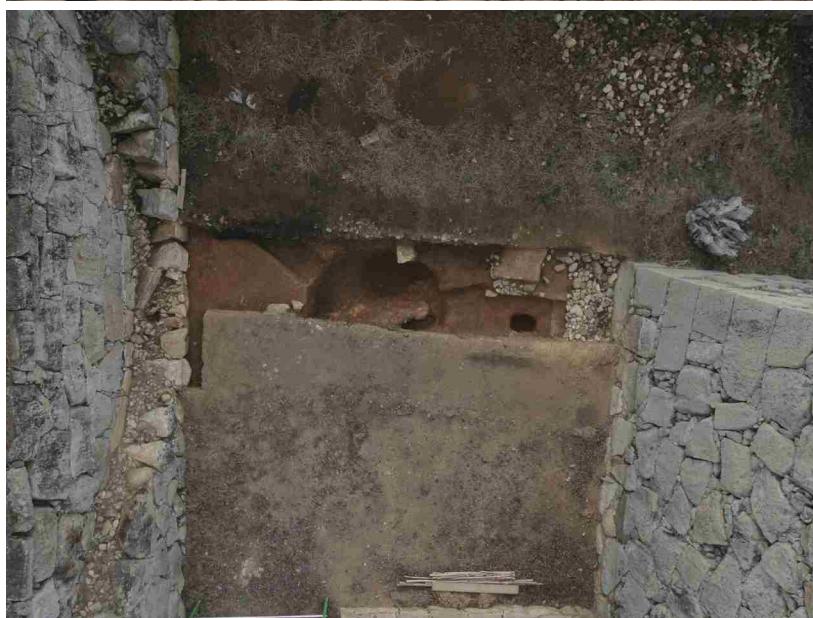
写真図版 5 天守台周辺調査



1. 天守台調査区 2 雨落溝検出
状況（北西から）



2. 天守台調査区 2 天守台石垣
基礎（南西から）



3. 天守台調査区 3 航空写真
(下が北)

写真図版6 天守台周辺調査



1. 天守台調査区3全景
(南から)



2. 天守台調査区3天守曲輪仕
切石垣検出状況 (南西から)

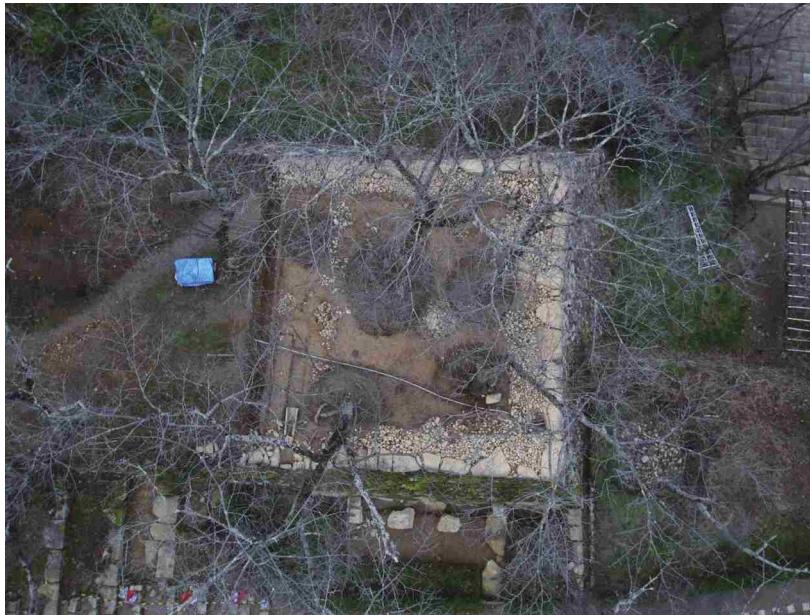


3. 天守台調査区航空写真
(右が北)

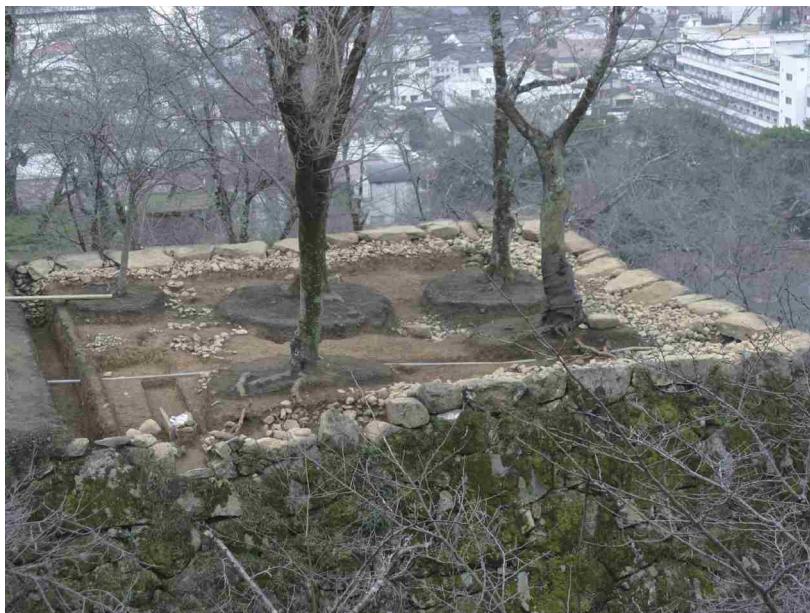
写真図版 7 切手門調査



写真図版8 切手門調査



1. 切手門調査区1全景
(下が北)



2. 切手門調査区1全景
(北から)

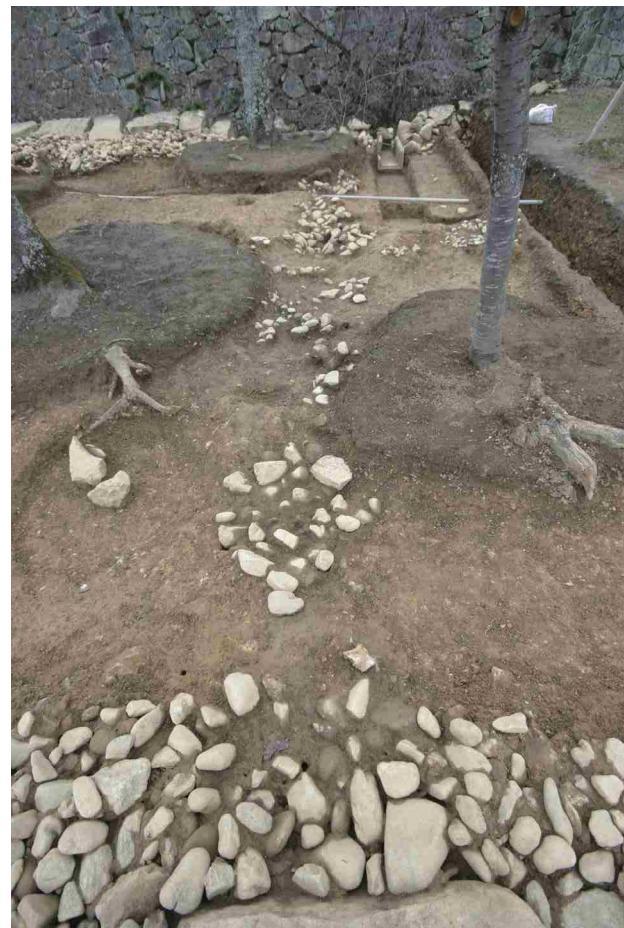


3. 切手門調査区1溝1検出状況
(南から)

写真図版9 切手門調査



1. 切手門調査区1 磐石検出状況（西から）



2. 切手門調査区1 根太痕跡検出状況（南から）

写真図版 10 切手門調査



1. 切手門調査区 1 南側石垣
(東から)



2. 切手門調査区 2、3 全景
(北から)



3. 切手門調査区 2 雨水集水枠
状遺構検出状況 (西から)

写真図版 11 切手門調査

1. 切手門調査区 2溝 2 及び雨水集水枠状遺構検出状況
(南から)



2. 切手門調査区 2溝 2
(南から)



3. 切手門調査区 2 雁木検出状況
(南から)



写真図版 12 切手門調査



1. 切手門調査区 2 雁木
(南から)



2. 切手門調査区 2 雁木
(東から)

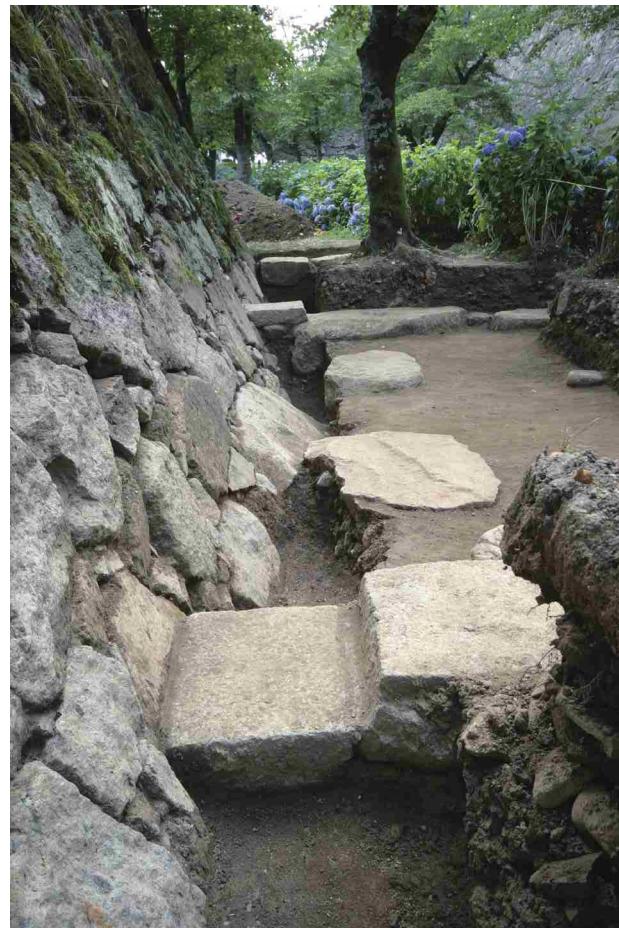


3. 切手門調査区 2 溝 3
(北から)

写真図版 13 切手門調査



1. 切手門調査区 2 磁石検出状況（南から）



2. 切手門調査区 2 磁石（東から）

写真図版 14 切手門調査



1. 切手門調査区 2 硏石
(西から)



2. 切手門調査区 3 硏石検出状況
(南から)

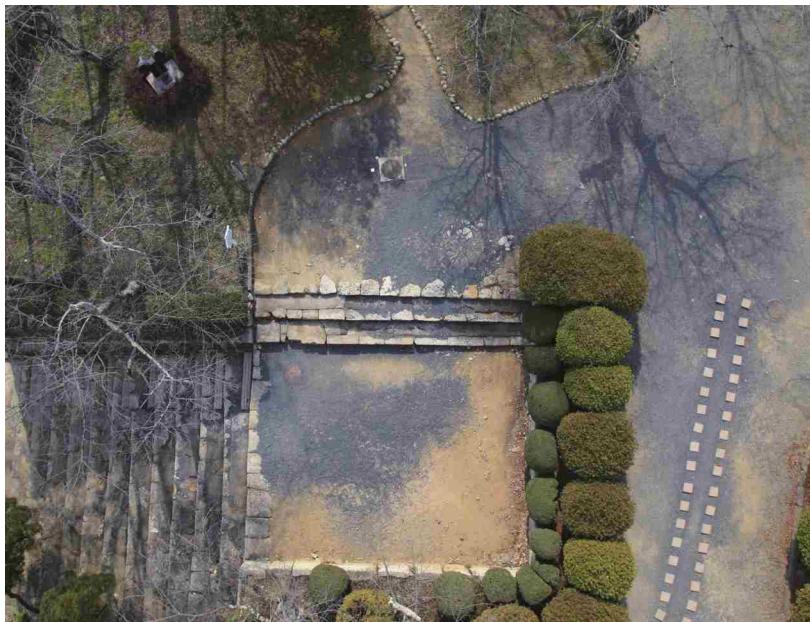


3. 切手門調査区 3 硏石
(西から)

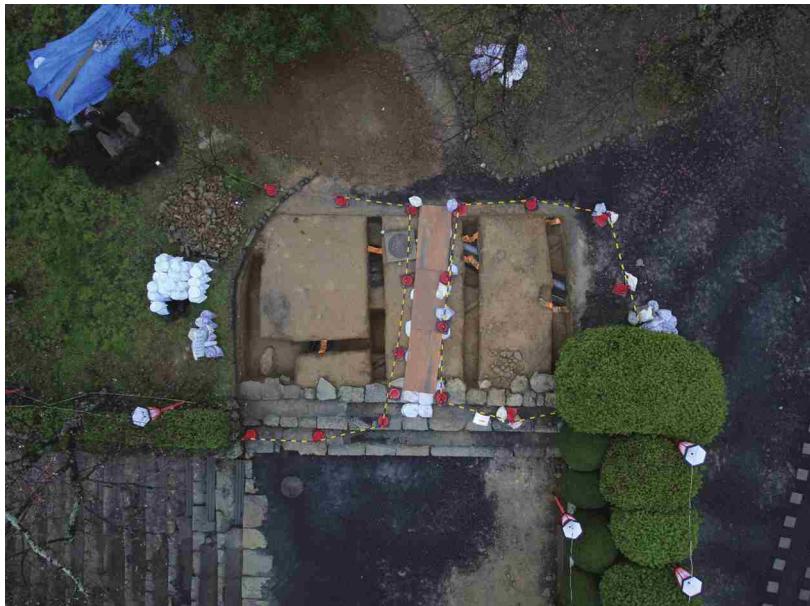
写真図版 15 切手門調査



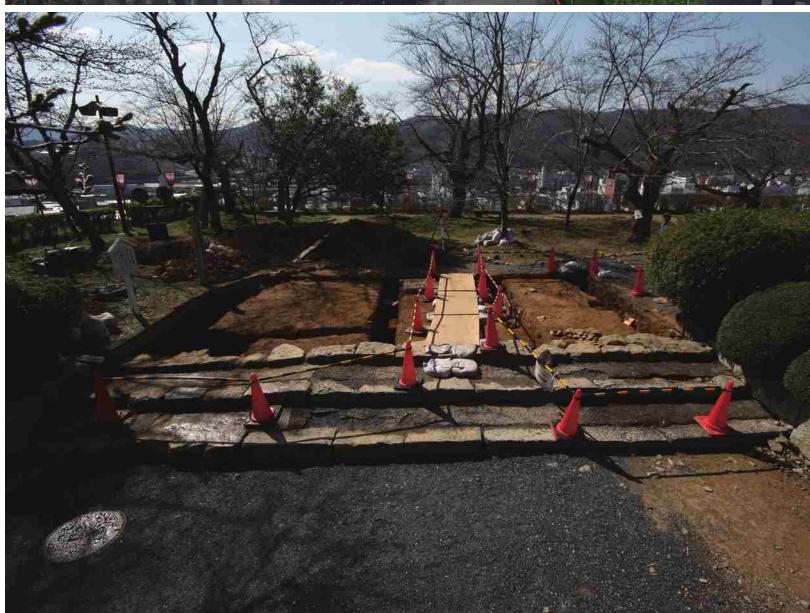
写真図版 16 四足門調査



1. 四足門調査区調査前航空写真（下が北）



2. 四足門調査区調査後航空写真（下が北）



3. 四足門調査区全景（北から）

写真図版 17 切手門調査



1. 四足門調査区全景（南から）



2. 四足門調査区根石検出状況
(北から)

写真図版 18 天守台周辺調査 出土遺物 1



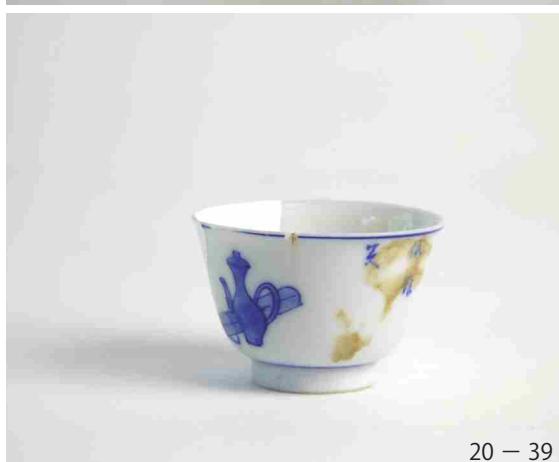
写真図版 19 天守台周辺調査 出土遺物 2



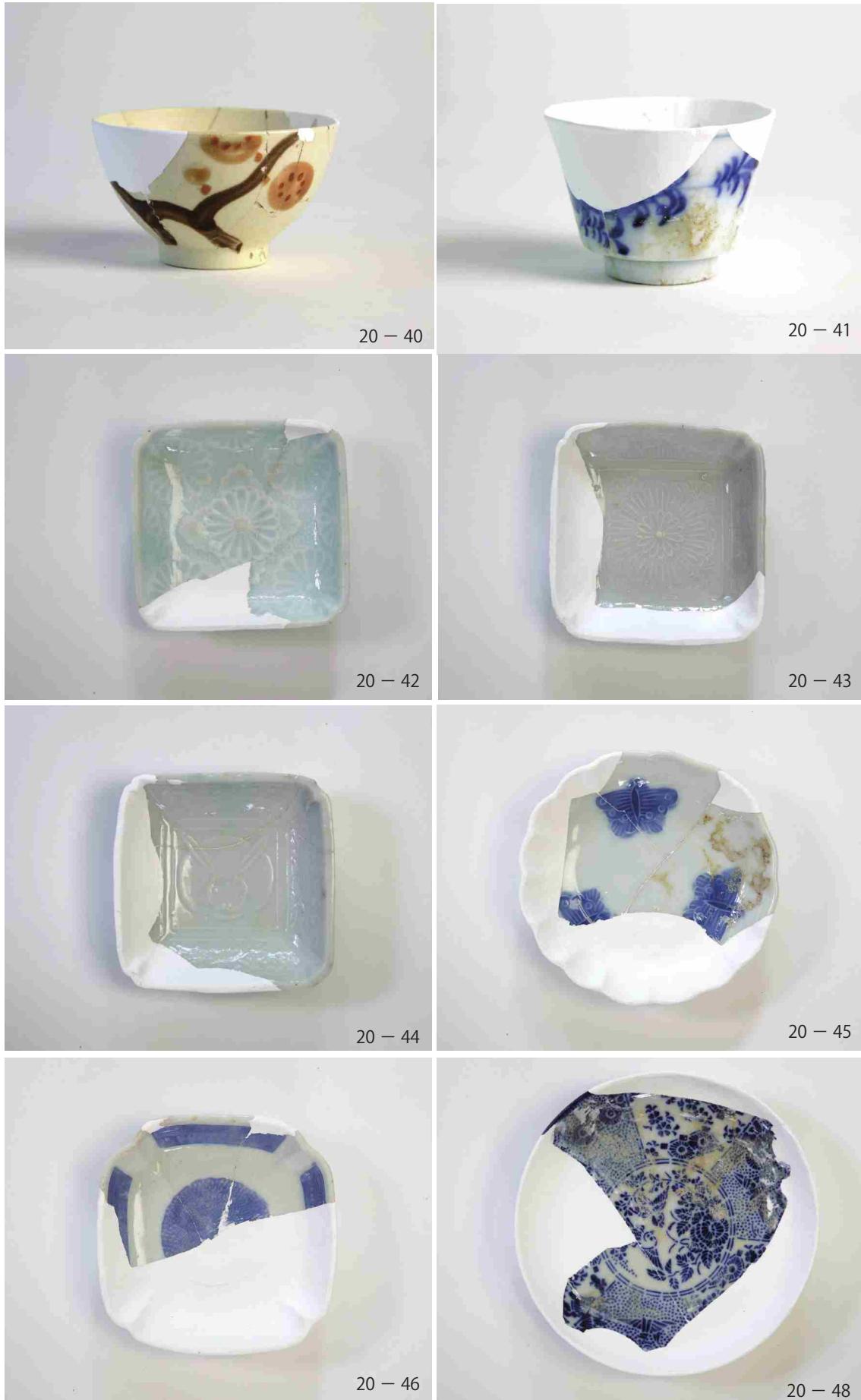
写真図版 20 天守台周辺調査 出土遺物 3



写真図版 21 切手門調査 出土遺物 1



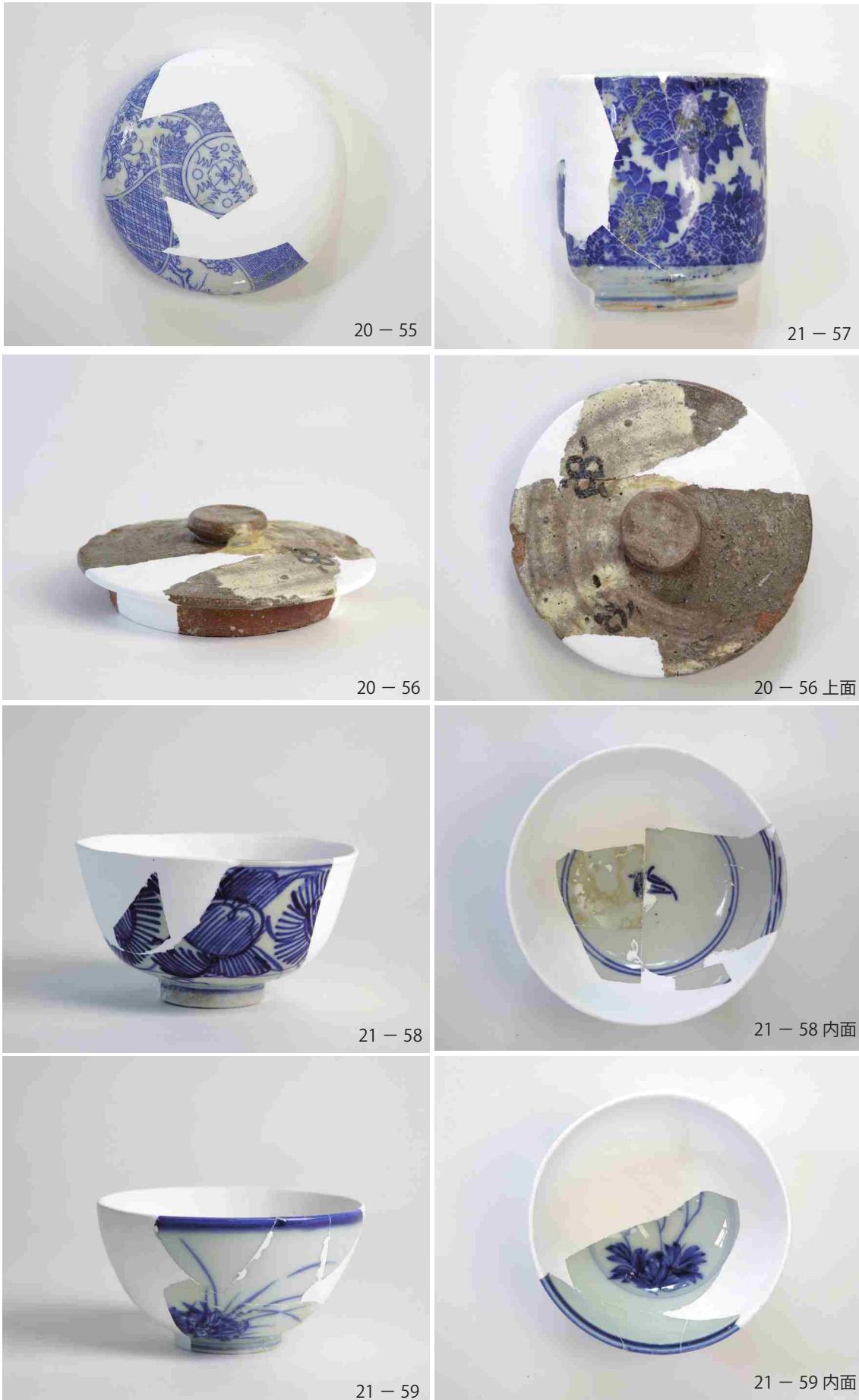
写真図版 22 切手門調査 出土遺物 2



写真図版 23 切手門調査 出土遺物 3



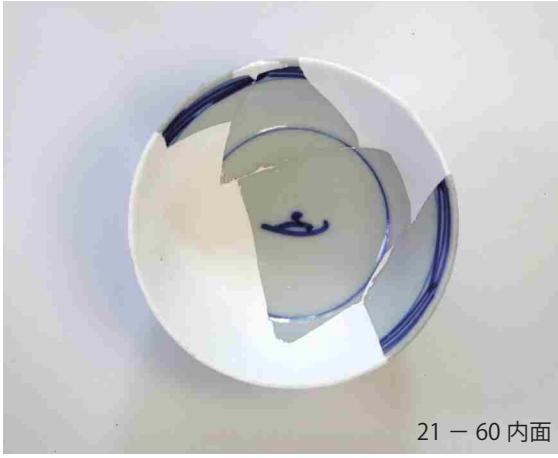
写真図版 24 切手門調査 出土遺物 4



写真図版 25 切手門調査 出土遺物 5



21-60



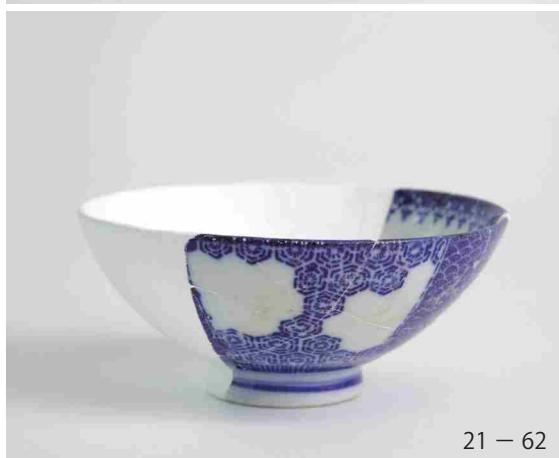
21-60 内面



21-61



21-61 内面



21-62

写真図版 26 切手門調査 出土遺物 6



22-63



22-64



22-69



22-71



23-80



23-82



23-94



24-95

写真図版 27 切手門調査 出土遺物 7



24-96



24-99



24-101



24-103



24-100



24-102

写真図版 28 切手門調査 出土遺物 8



25-104



25-105



25-106



25-108



25-109



25-111



25-112



25-113

写真図版 29 切手門調査 出土遺物 9



写真図版 30 切手門調査 出土遺物 10



第3部

整備工事の概要

第1章 天守曲輪西半整備工事（平成20年度）

第1節 事業の概要

（1）事業に至る経過

史跡津山城跡保存整備事業では、平成18年度から「天守曲輪」部分の整備に着手した。天守曲輪は本丸の西側に位置し、本丸とは石垣で仕切られ、天守台と天守台の南西、西、北を囲む櫓群で構成される。

平成18年度及び19年度には天守台の南西、西、北西を囲む「多門櫓」の平面表示と、多門櫓腰石垣の修理を行った。

平成20年度は、多門櫓と天守台の間の部分について、通路の土系舗装及び周辺への芝張を行った。また、既存の排水施設遺構を利用して新たに排水溝を設置した。

整備工事は平成20年度の単年で実施した。

工事は史跡津山城跡整備委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の指導・助言のもとに実施した。

（2）事業体制

事業は津山市が直営で実施した。

（3）事業の経過

天守曲輪西半整備工事にかかる経過は下記のとおりである。

平成10年3月 『史跡津山城跡保存整備計画』策定

平成18年1月25日～平成18年3月15日 天守曲輪西半整備工事設計委託

平成20年12月5日～平成21年3月27日 天守曲輪西半整備工事

（4）事業費

事業に要した予算は下記のとおりである。（単位：円）

	実施設計	工事費	設計監理	年度別計
平成17年度	2,997,750			2,997,750
平成20年度		6,037,500		6,037,500
合計	2,997,750	6,037,500		9,035,250

第2節 工事の概要

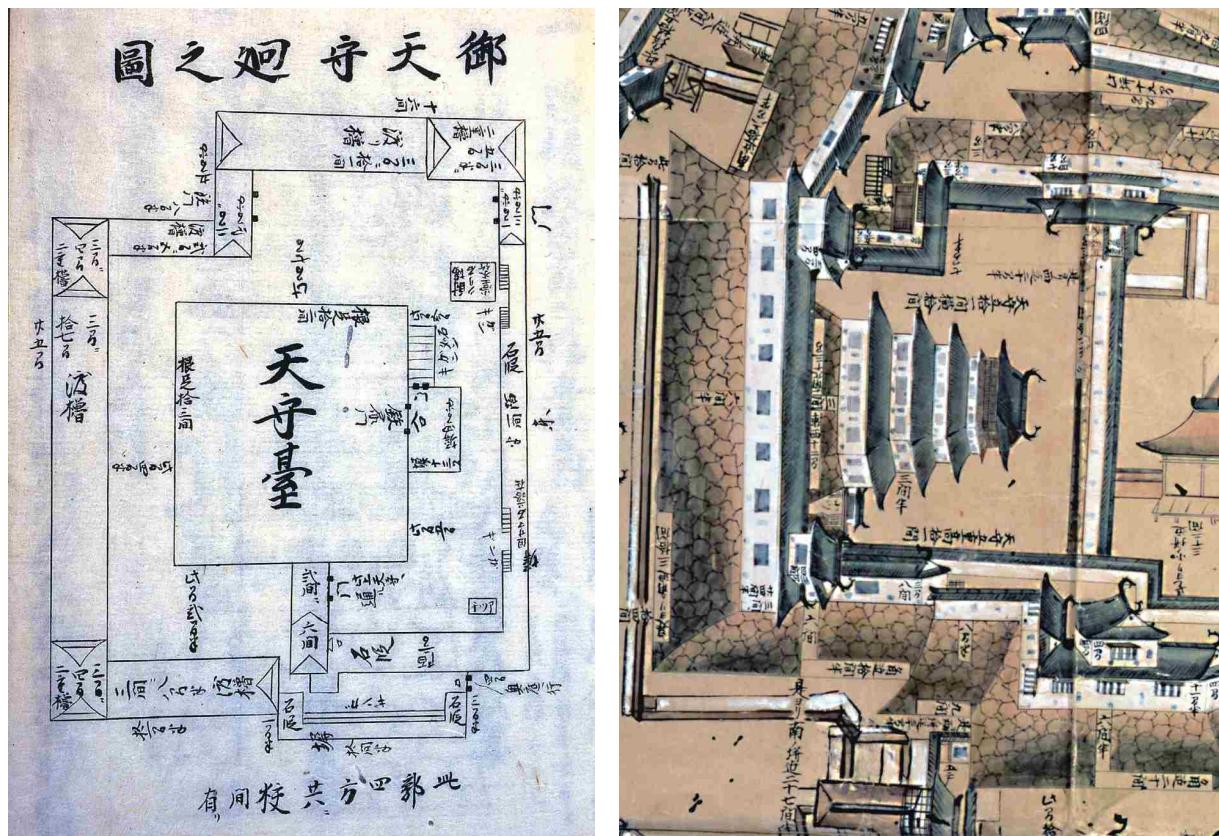
(1) 工事の種別・規模

残土搬出	体積 43 m ³
すき取り工	体積 225 m ³
土系舗装	面積 202 m ²
玉砂利敷	面積 97 m ²
暗渠管埋設	延長 27m
芝張	面積 220 m ²

(2) 工事の過程

工事の施工は、平成 20 年 12 月 5 日より着手し、平成 21 年 3 月 11 日に竣工検査を完了した。実質工期は約 3 か月であった。

工事の統括は津山市教育委員会文化財課（平成 20 年度当時）、設計は（株）文化財保存計画協会、



第29図 天守廻之図（左）と津山絵図（天守曲輪部分）（右）

工事施工は（株）安東組が行った。

（3）工事の概要

今回の整備工事では、平成18・19年度に整備を実施した天守曲輪西側多門櫓平面表示と天守台の間の部分について、通路の土系舗装及び周辺への芝張を行った。また、既存の排水施設遺構を利用して新たに排水溝を設置し、七番門西側について廃城以降に堆積した土砂の撤去を行った。

まず、照明器具及び照明器具の基礎を撤去し、表土をすき取り、整備高にするための不陸整正を行った。すき取り作業中に西辺中央で石列が検出された（p.103写真図版31左下）。石列は11石からなり、上面は平らではあるが、並びが不規則であることや、史料ではこの場所に建物が存在しないことから、建物の礎石ではないと考えられる。また、工事前に行った発掘調査から、多門櫓と天守台石垣間はすべて栗石が充填されていることが判明しており、すき取りはこの栗石の上面までとした。その後照明器具の基礎工と舗装・砂利敷帯部分に碎石、植栽部に真砂土を敷き、照明器具の据え直し、植栽及び芝張作業、土系舗装、玉砂利敷を行った。

天守台の北面に位置する多門櫓腰石垣の南面から七番門にかけては、発掘調査により排水溝遺構が確認されており、この遺構内に暗渠管を埋設した。排水溝遺構の保護と溝蓋の落下を防ぐため、暗渠管と排水溝遺構との間は碎石で充填した。また、七番門の西側は、廃城後の流出土砂の堆積により、石垣が埋没して見えなくなっていたことから、土砂を撤去し、石垣面の清掃を行った。

（4）工事関係者

1. 指導・助言

文化庁記念物課

岡山県教育庁文化財課

史跡津山城跡整備委員会

2. 工事発注者

事業主体：津山市

事務局：津山市教育委員会文化財課

3. 設計

株式会社 文化財保存計画協会

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2丁目5番5号 岩波書店一ツ橋ビル

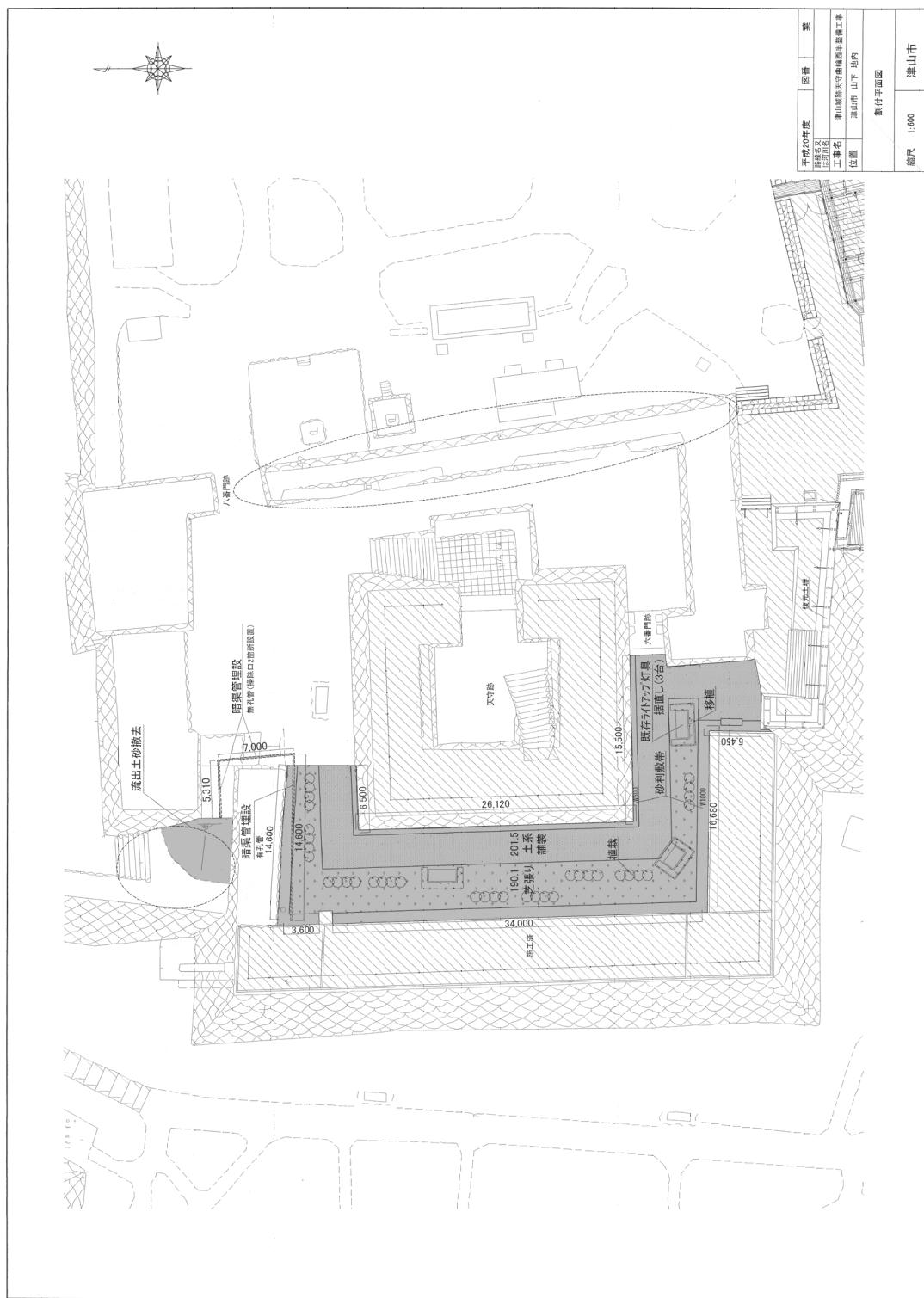
代表取締役 矢野和之

4. 工事施工

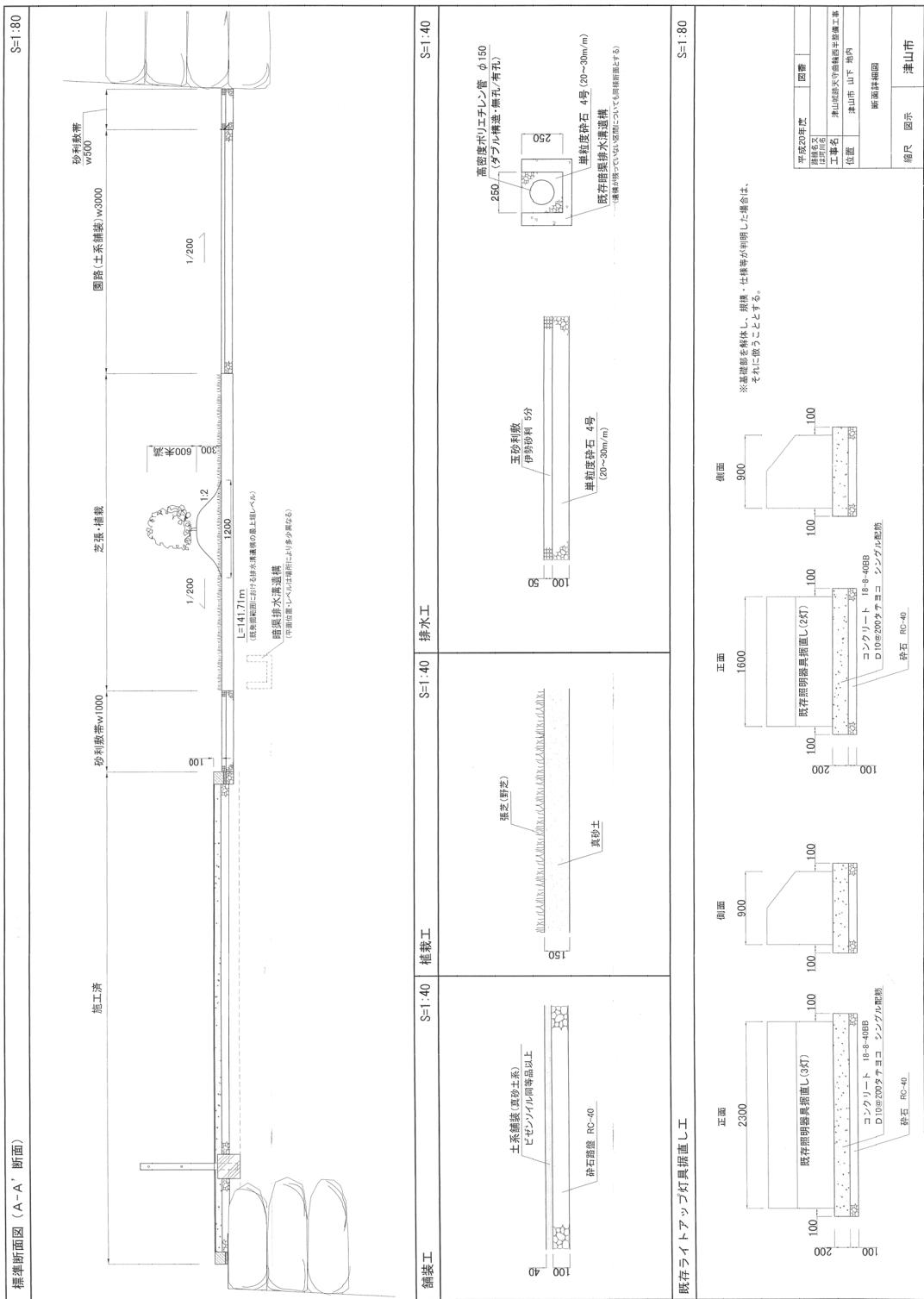
株式会社 安東組

〒 708-0051 岡山県津山市椿高下 38 番地

代表取締役 安東照子



第30図 平成20年度整備工事図面1 (S=1/600)



第31図 平成20年度整備工事図面2 (S=1/600)

第2章 七番門虎口整備工事（平成21年度）

第1節 事業の概要

（1）事業に至る経過

津山市は、平成18年度以降の史跡津山城跡保存整備事業として、「天守曲輪」部分の整備に着手している。平成18年度及び19年度は、この天守曲輪のうち、天守台の南西、西、北西を囲むようにつくられた多門櫓の平面表示を行った。また、天守曲輪の北面にある多門櫓と、その東側に隣接する七番門南側の櫓台石垣についても、解体修理を行った。平成20年度には、天守台と平面表示を行った多門櫓との間の空間に堆積した土を取り除き、土系舗装等を行った。これにより、天守曲輪西半分の整備工事については完了した。

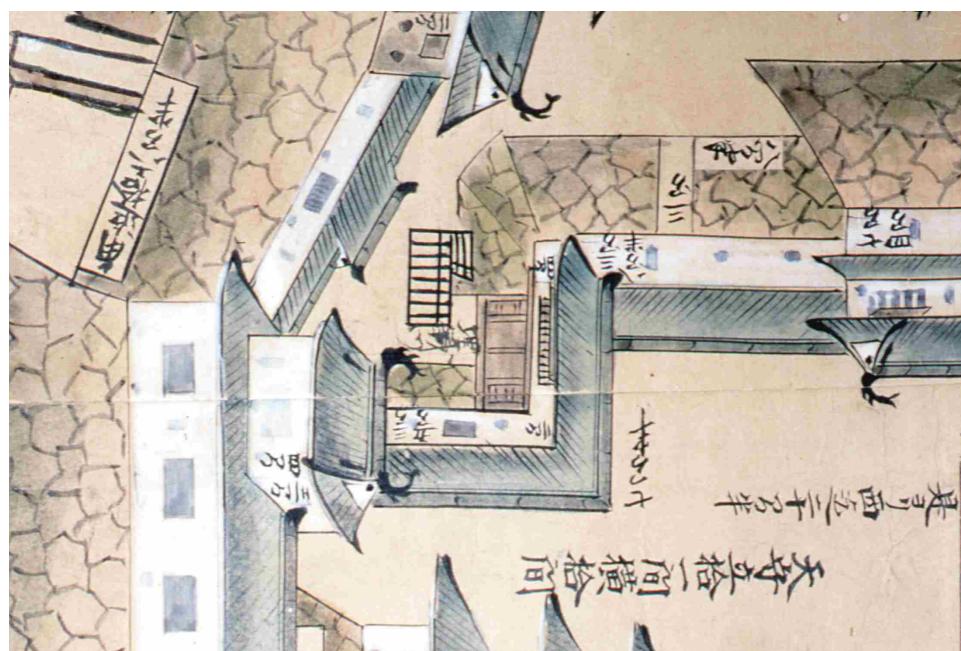
平成21年度は、七番門虎口周辺の整備を実施した。七番門は天守曲輪の北側から北方向に石段を下り、そこから西方向に直角に曲がったところに位置し、L字形の榤形虎口を形成している。七番門の上部は多門櫓であり、北側と南側でそれぞれ天守曲輪を囲む渡り櫓に接続している。櫓の下は門であり、この



第32図 津山城絵図（矢印が七番門）



写真4 七番門虎口発掘調査写真（右が北）



第33図 津山絵図（七番門部分）（上が北方向）

門をくぐり、西に向かうと一段下がった腰曲輪に至る。この腰曲輪に至るには、約2mの落差がある。この落差については、津山松平藩の作事関係の記事を記した『勘定奉行日記』に関連する記事がみられる。文化8年（1811）の記事に、「七番門外橋子繕二十三匁四分」とあることから、この段差部分に「橋子」、つまり木の階段がこの場所に取り付けられていたものと考えられている^{（註1）}。通常は約2mの落差のある石垣であるが、通行の際はこの落差部分に木の階段が取り付けられ、通行しないときは外すことにより、防御性を高めていたと考えられる。この門は西側が表になっていることから、西から東方向へ、つまり腰曲輪から2mの段差を上がって七番門をくぐり、本丸に至ることが意図されていたと考えられる。

整備工事にあたり、遺構の残存状況を確認するため、平成14年度に発掘調査を実施している。発掘調査を行う前は、門の櫓がのる南北方向の石垣は表出していたが、それ以外の楕形部分には土が堆積しており、遺構の残存状況が明らかではなかった。しかし、発掘調査では、七番門の礎石のほか、本丸から北方向に下る石段の下段や、楕形虎口を形成する石垣の東面の最下段などが確認された。さらに、通路に沿う形で豊島石製の排水溝なども確認された^{（註2）}。

整備工事はこれらの調査結果を踏まえた上で実施した。まず、七番門の楕形虎口を形成する櫓台石垣のうち、北側石垣の南面について、石垣天端に凹凸がみられ、間詰石が多く欠落していることにより石と石の間に隙間ができ、そこから内部に詰められている栗石が外に流出していたため、解体修理を行った。解体は、石垣の動きが大きい上から約3段分について実施した。楕形の東面に本来存在していた石垣は最下段のみ残存していたため、そこから上部の石垣を復元した。また、本丸から北方向に下る雁木についても最下段のみ残存していたため、そこから本丸にいたるまでの残りの雁木を復元した。七番門の礎石は、発掘調査で西側の2石が残存していることが判明しているため、これを表出させる方向で整備を進めた。

排水は、平成20年度の整備工事により、発掘調査で検出された豊島石製のU字溝を、整備後にも排水施設として活用できるよう、溝の内部に暗渠管を設置した。平成21年度整備工事では、水の出口にあたる西側の石垣が一部欠落していたため、U字型に加工した石と、その上に載る石を新しく据えた。

石垣の天端面にあたる七番門櫓台の北側石垣とそれにつながる腰石垣、及び復元した楕形石垣の上面は、それぞれ三和土仕上げとした。

工事は平成21年度の単年で行い、史跡津山城跡整備委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の指導・助言のもと実施した。

註

（註1）平岡正宏編 2009『津山城百聞録』pp.36-37

（註2）行田裕美 2007「7. 第6次調査（平成14年度）」pp.74-78

（2）事業体制

事業は津山市が直営で実施した。

(3) 事業の経過

七番門虎口整備工事にかかる経過は下記のとおりである。

平成 10 年 3 月	『史跡津山城跡保存整備計画』策定
平成 18 年 1 月 25 日～平成 18 年 3 月 15 日	天守曲輪西半整備工事設計委託
平成 21 年 8 月 21 日～平成 22 年 1 月 25 日	津山城跡七番門虎口整備工事監理業務委託
平成 21 年 9 月 4 日～平成 22 年 1 月 15 日	津山城跡七番門虎口整備工事

(4) 事業費

事業に要した予算は下記のとおりである。(単位:円)

	実施設計	工事費	設計監理	年度別計
平成 17 年度	2,997,750			2,997,750
平成 21 年度		9,292,500	1,075,200	10,367,700
合計	2,997,750	9,292,500	1,075,200	13,365,450

第2節 工事の概要

(1) 工事の種別・規模

石垣解体復旧	面積 8.1 m ²
石垣間詰石補修	面積 11.0 m ²
石垣復元	面積 9.2 m ²
石段復元	面積 28.7 m ²
排水口石積	面積 0.4 m ²
三和土（長櫓西側の渡り櫓部）	面積 88.9 m ²
三和土・張芝（復元石垣上面）	面積 18.0 m ²

(2) 工事の過程

工事の施工は、平成21年9月4日より着手し、平成22年1月15日に竣工検査を完了した。実質工期は約4ヶ月であった。

工事の統括は津山市教育委員会文化財課（現在は文化課）、設計は（株）文化財保存計画協会、工事施工は（株）和田石材建設が行った。

(3) 工事の概要

七番門虎口整備工事について、工種ごとの施工概要を以下に記す。

(a) 仮設工事

工事範囲をバリケードで囲い、工事標識を設置した。

(b) 石垣解体工事（七番門櫓台石垣北側南面）

解体する石垣については、工事着手前に石垣の現況写真撮影を行い、解体する石材に番付をし、テープで表示した。縦横500mmピッチで墨打ちを行い、丁張りを設置した。各石材は目視等により石材の破損状況を確認し、再使用の可否を判定した。再利用できない可能性のある石材については撤去前に型取りを行った。石垣の解体はクレーンによって行い、各石の控寸法、重量を記録しながら石材仮置場に小運搬し、並べた。仮置きした石は清掃し、番号が分かるように整理した。間詰石についても場所ごとに土のう袋につけて管理した。合わせて裏栗も撤去し、土を除去しながら仮置場にストックした。

(c) 石垣復旧工事（七番門櫓台石垣北側南面）

石材の破損状況を確認した結果、2石は新石財に取り替え、1石は接着により補修し再利用、残りは

すべて再利用することとなった。石材は兵庫県高砂産の凝灰岩（竜山石）を使用することとした。石の加工は現場で行い、周囲との関係を確認しながら加工整形と表面の仕上げを行った。新石材については旧石材との区別がつくよう、見えない箇所に墨で「H 2 1」と記した。裏栗石は、城内にある材料をできるだけ使用し、不足分は購入した。石積みはクレーンで行い、撤去前の写真等を検討しながら行った。裏栗石は既存の栗石としっかりとかみ合うように丁寧にかませるように施工し、栗石が動きにくいように碎石を入れた。間詰石は撤去前の記録に基づき、撤去前の状況に近くなるよう詰めた。

(d) 石垣復元工事（七番門櫓形東側石垣）

現存する1段目の石垣より上には土砂が堆積していたため、これを人力及び小形バックホーで掘削し、土砂を除去した。石垣の復元にあたっては、復元高や既存石垣とのすり付けなどを検討する必要があった。地表面のレベルについては、平成19年度及び平成20年度に行った天守台北側の発掘調査において確認された在城時の地表面レベルや、近接する八番門付近の石垣面にみられる加工痕などにより決定した。石垣の復元高については、櫓台北側石垣の隅角石に天端石が接する痕跡などから決定した。石垣は、天端石の高さと現存する1段目の石垣との高低差から、現存石垣を含め3段になることが考えられた。復元石垣の高さは標高141.75mとした。石垣天端は、復元雁木の天端高と比べ15cm程度低くなるが、その部分は三和土ですりあわせて調整をした。

石垣の復元にあたっては、できるだけ加工を施さない自然石を用い、裏込めに使用する石はなるべく城内のものを再利用した。裏込め石の空隙には、単粒碎石を充填した。

(e) 石段（雁木）復元工事

本丸から北方向に下る雁木については、ほとんどの石がなくなっているが、最下段の石がかろうじて残存している。地表面のレベルは、これまでの発掘調査成果等を参考に決定し、最上段の踏み面高を標高141.9mとした。また、七番門南石垣に一部雁木の痕跡が残っていたことなども、復元の参考にした。これらを検討した結果、現存する最下段石の据え直し高は標高140.57mなので、復元する階段は7段、蹴上げを190mmとして施工することとした。また、復元する雁木最上段部の背面（南側）と現況地表面との間には、敷石を同じレベルで据えることとした。

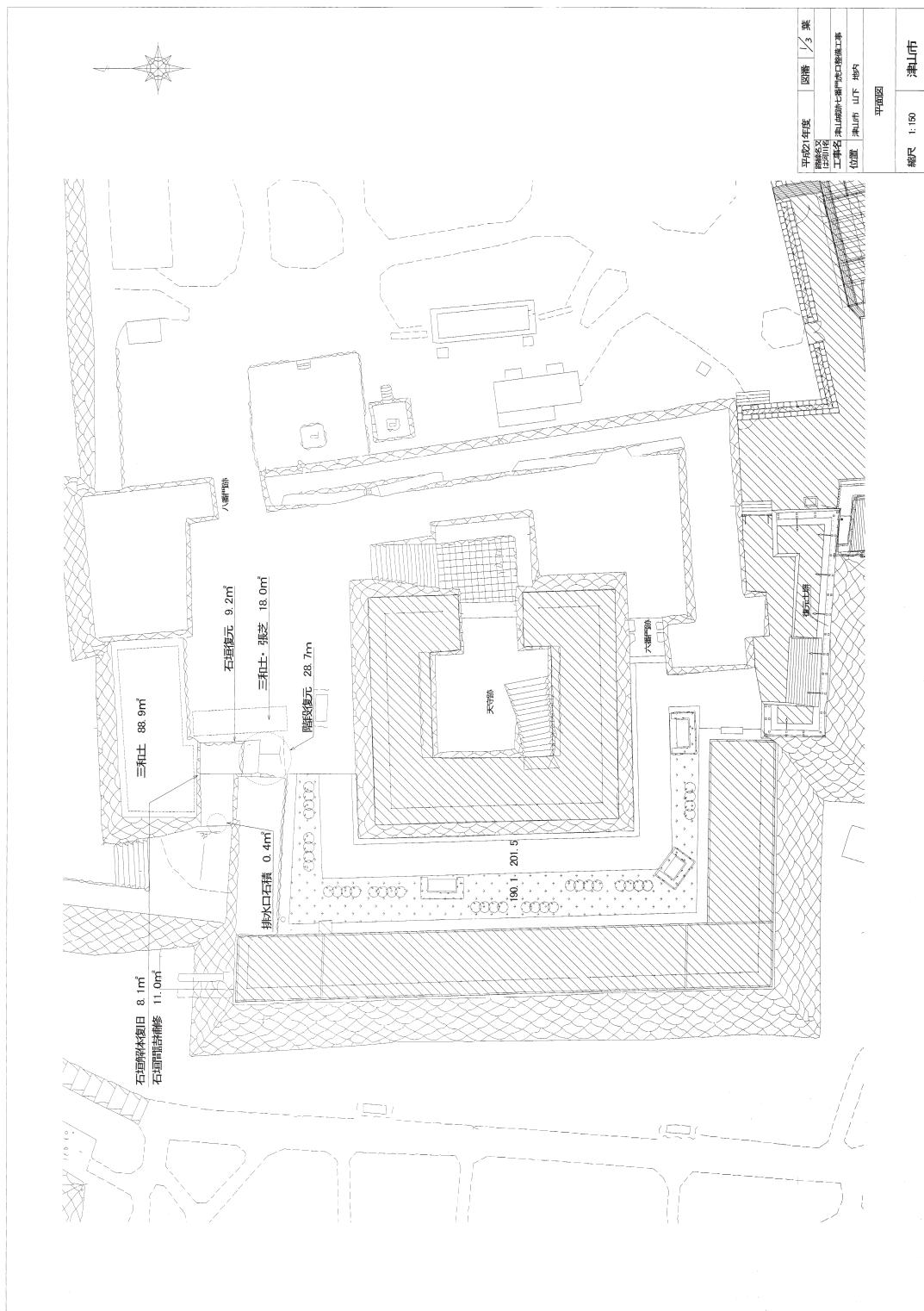
雁木は最下段以外は新石を使用した。石の加工は最下段に残っている石を見本にして行い、踏み面に水がたまらないよう、角を尖らせないよう注意して行った。

(f) 三和土工事（七番門北石垣天端）

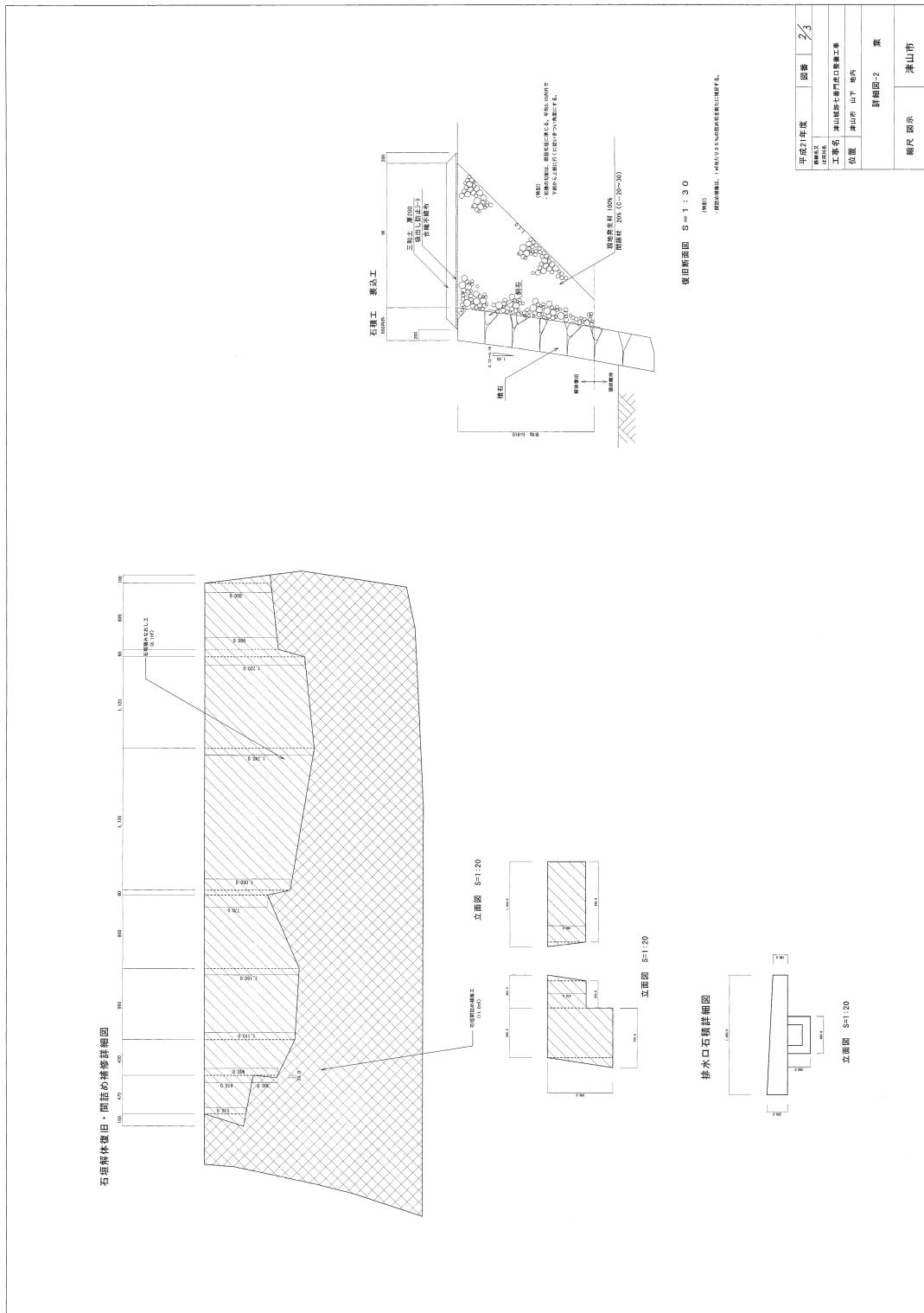
七番門北石垣については平成19年度に発掘調査を実施しており、調査の結果、石垣の内側はすべて栗石で充填されていたことが判明している。さらに、その際の調査では栗石を20cm程度除去すると、中央部に上面が平らな石が東西方向に6個、東端では南北方向に2個、合計8個が並んでみつかっている。これらは、七番門櫓台部分とそれにつながる建物の基礎石と考えられる。

これらの遺構保護と、石垣背面への雨水浸透を防ぐため、整備は上面を三和土舗装することとした。

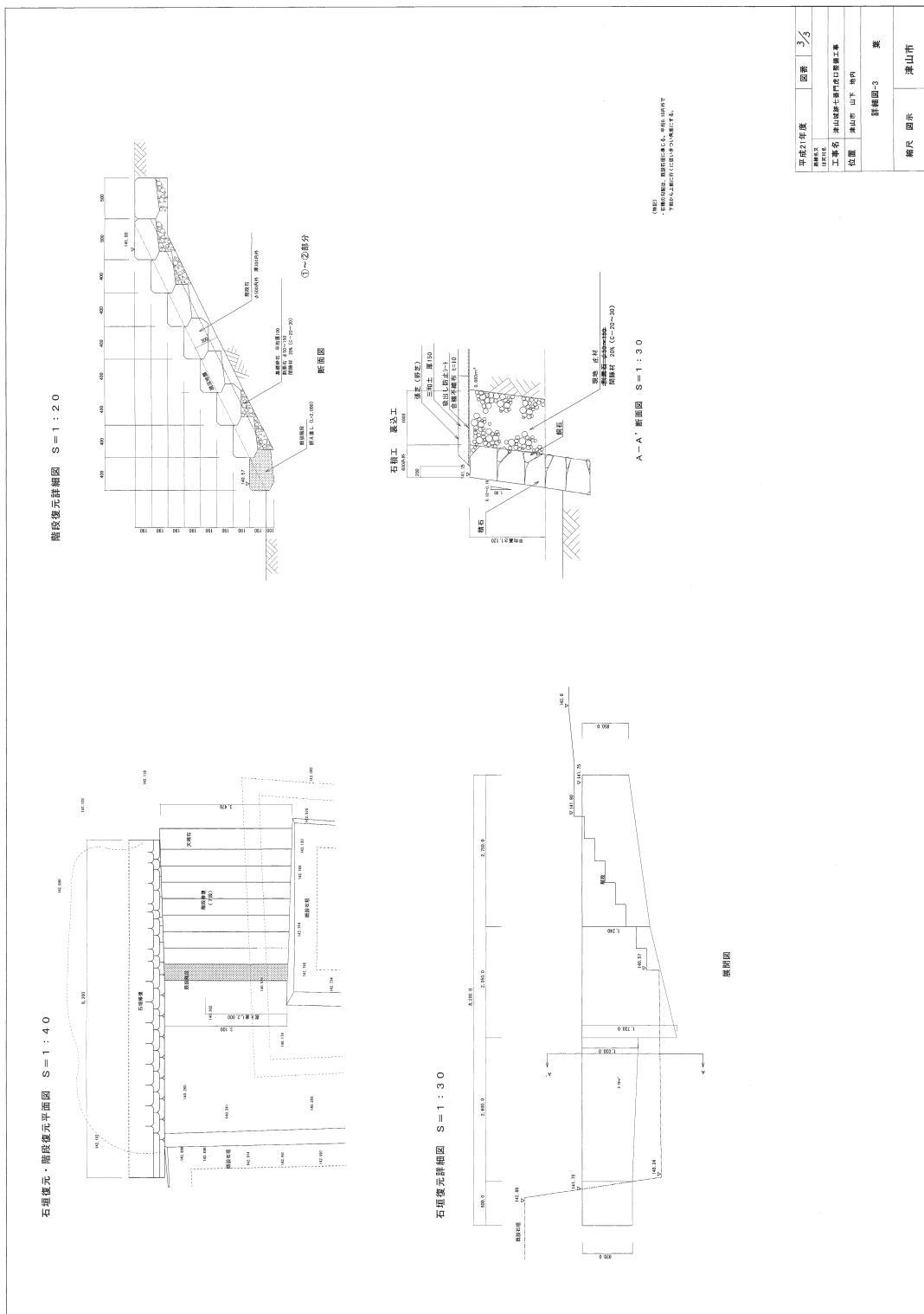
まず、三和土については混合試験を実施し、赤土、碎石、石灰、塩化カルシウムを混合したものを用いた。



第34図 平成21年度整備工事図面1 (S=1/600)



第35図 平成21年度整備工事図面2 (S = 1/80、1/120)



第36図 平成21年度整備工事図面3 ($S=1/160, 1/120, 1/80$)

施工は、天端面に吸出し防止シートを敷設し、その上に三和土舗装を施工高の半分まで施工した。一層目がある程度乾燥した後、残り半分の二層目を施工した。天端はプレート等で調整しながらならした。

(g) 三和土・張芝（復元石垣上面）

七番門北石垣天端と同様、東側の復元石垣の天端についても三和土舗装を行った。天端面に吸出し防止シートを敷設し、その上に三和土舗装を行った。舗装は、復元石垣の天端から 15 cm の厚さで施工した。最後に、三和土舗装の法面保護のため上面に張芝を行い、東側の未整備部分にすりつけた。

（4）工事関係者

1. 指導・助言

文化庁記念物課

岡山県教育庁文化財課

史跡津山城跡整備委員会

2. 工事発注者

事業主体：津山市

事務局：津山市教育委員会文化財課

3. 設計・監理

株式会社 文化財保存計画協会

〒 101-0003 東京都千代田区一ツ橋2丁目5番5号 岩波書店一ツ橋ビル

代表取締役 矢野和之

4. 工事施工

株式会社 和田石材建設

〒 552-0012 大阪府大阪市港区市岡 2-1-25

代表取締役 和田行雄

現場代理人 岡崎芳樹

写真図版 31 平成 20 年度整備工事 1



工事着手前（南東から）



工事着手前（南から）



照明器具撤去後



照明器具基礎撤去後



表土すき取り



表土すき取り後



石列検出状況（右が北）



石列検出状況（西から）

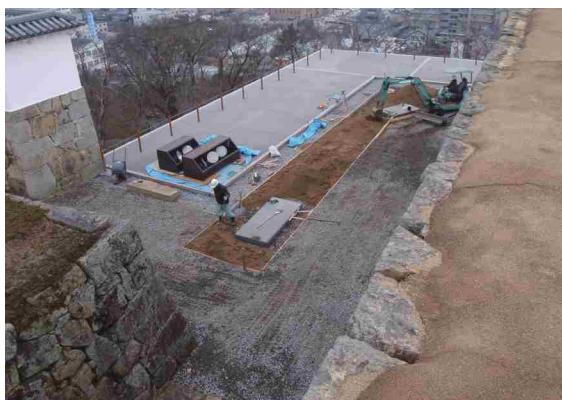
写真図版 32 平成 20 年度整備工事 2



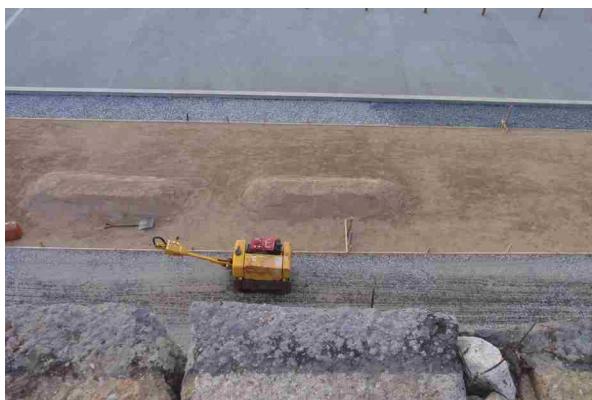
照明器具基礎コンクリート打設



舗装部分碎石敷作業



植栽部分真砂土敷作業



植栽部分盛土作業



暗渠管埋設



暗渠管設置



暗渠管埋設後



排水溝蓋復元後

写真図版 33 平成 20 年度整備工事 3



堆積土砂撤去



土砂撤去後



植栽



芝張り



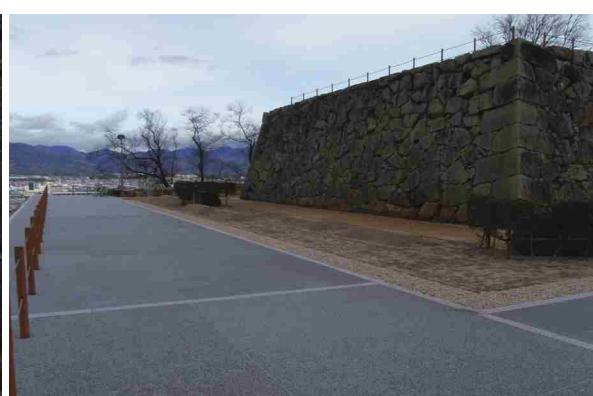
土系舗装



玉砂利敷き後



整備工事完了（南東から）



整備工事完了（南から）

写真図版 34 平成 21 年度整備工事 1



工事着手前（南から）



資材搬入



石垣墨付け



番号付け完了



丁張り（石垣部）



修復石垣裏込掘削



石垣撤去



石垣撤去

写真図版 35 平成 21 年度整備工事 2



積み直し完了



石垣復元部背面すき取り



新石搬入



石垣一段目復元



石垣復元



石垣復元



石垣復元



丁張り（雁木部）

写真図版 36 平成 21 年度整備工事 3



雁木部すき取り



雁木復元



雁木復元



雁木復元



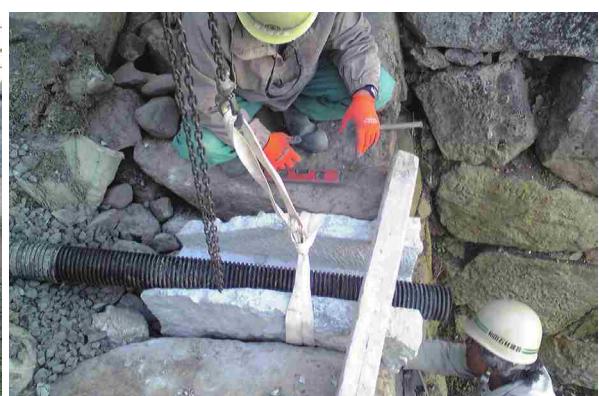
雁木復元（最上段）



雁木復元（最上段）



排水管設置



排水管設置

写真図版 37 平成 21 年度整備工事 4



排水部分石垣復元



三和土施工



三和土施工



三和土施工



石垣修復完了（南から）



舗装完了（南から）



石垣復元完了（西から）



雁木復元完了（北から）

写真図版 38 平成 21 年度整備工事 5



芝

芝張り前



芝張り施工中

芝張り施工中



芝張り施工中

芝張り竹釘打ち



整備完了後航空写真（上が北）

整備完了後航空写真（北から）

報 告 書 抄 錄

史跡津山城跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 87 集

保存整備事業報告書Ⅲ

2017年3月31日 発行

発行 津山市教育員会生涯学習部文化課

津山弥生の里文化財センター

〒708-0824

岡山県津山市沼 600-1 番地

T E L 0868-24-8413

F A X 0868-24-8414

印刷 (有) 弘文社
